

# 東方魔天狼

タバスコ星

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

古の時代、大罪を犯した白き狼の魔神は幻想郷で何を見るのか？そして幻想郷に訪れる異変にどう立ち向かうのか？

もしも柊さんがめちやくちや強かったらの話。

誰も書いてないので自分で書きました！

# 目次

1.	始まり	1
	登場人物	10
一章・	紅霧異変	
2.	紅霧異変 ①	18
3.	紅霧異変 ②	31
4.	紅霧異変 ③	42
5.	紅霧異変 ④	51
6.	紅霧異変 ⑤	56
7.	紅霧異変 ⑥	65
8.	紅霧異変 ⑦	79
9.	紅霧異変 ⑧	103
	二章・妖怪山反乱異変	
	10. 妖怪山反乱異変 ①	115
	11. 妖怪山反乱異変 ②	120
	12. 妖怪山反乱異変 ③	129
	13. 妖怪山反乱異変 ④	133
	14. 妖怪山反乱異変 ⑤	137
	15. 妖怪山反乱異変 ⑥	142
	16. 妖怪山反乱異変 ⑦	149
	17. 妖怪山反乱異変 ⑧	157
	18. 妖怪山反乱異変 ⑨	168
	三章・春雪異変	
	19. 春雪異変 ①	179
	20. 春雪異変 ②	186

3 2.	永夜異変⑧	296
3 1.	永夜異変⑦	286
3 0.	永夜異変⑥	277
2 9.	永夜異変⑤	267
2 8.	永夜異変④	259
2 7.	永夜異変③	246
2 6.	永夜異変②	237
2 5.	永夜異変①	230
四章・永夜異変		
2 4.	春雪異変⑥	216
2 3.	春雪異変⑤	209
2 2.	春雪異変④	200
2 1.	春雪異変③	192

4 1.	風神異変⑦	400
4 0.	風神異変⑥	392
3 9.	風神異変⑤	383
3 8.	風神異変④	374
3 7.	風神異変③	367
3 6.	風神異変②	356
3 5.	風神異変①	349
五章・風神異変		
2.	彩華	338
1.	彩華	331
外伝1. 彩華の章		
3 4.	永夜異変⑩	320
3 3.	永夜異変⑨	311

4 2. 風神異変⑧

4 3. 風神異変⑨

六章・星怨異変

4 4. 星怨異変①

4 5. 星怨異変②

4 6. 星怨異変③

4 7. 星怨異変④

4 8. 星怨異変⑤

4 9. 星怨異変⑥

5 0. 星怨異変⑦

5 1. 星怨異変⑧

5 2. 星怨異変⑨

七章・銀色の狼の旧地獄巡り

409

421

431

440

452

458

466

473

479

487

497

5 3. 銀色の狼の旧地獄巡り①

506

5 4. 銀色の狼の旧地獄巡り②

513

5 5. 銀色の狼の旧地獄巡り③

521

5 6. 銀色の狼の旧地獄巡り④

529

5 7. 銀色の狼の旧地獄巡り⑤

535

5 8. 銀色の狼の旧地獄巡り⑥

541

5 9. 銀色の狼の旧地獄巡り⑦

581	6	572	6	566	6	552
	2.		1.		0.	
	銀		銀		銀	
	色		色		色	
	の		の		の	
	狼		狼		狼	
	の		の		の	
	旧		旧		旧	
	地		地		地	
	獄		獄		獄	
	巡		巡		巡	
	り		り		り	
	⑩		⑨		⑧	

## 1 . 始まり

「私は一体何者なんだ！」白き狼の耳と尾を持つ<sup>少女</sup>魔神が叫ぶ。

「どうして私は他の兄妹と姿が違うのだ！」その魔神はあまりにも純粹過ぎた。

「なぜ、なぜなんだ！」あまりにも純粹過ぎるが故に魔神は<sup>彼女</sup>氣づかない。

「それは、ねえ。あなたの家族があなたを愛していないからよ。」

本当の愛を

「やはり…そうか。」

魔神の内側に潜む「悪意」に

「なら、どうすればいいかわかるわね。」

その、<sup>悪魔</sup>女神が

「ああ、私が滅ぼし、新たに作り上げる。」

<sup>少女</sup>魔神の心を穢し<sup>魔王</sup>魔神に仕立て上げたことに、

ピピピピピ

「うゝん」

私は犬走椀。妖怪の山を警備する哨戒天狗。いつも通りの時間に起きて、任務にでなければいけない。

この天狗の山は縦社会、上の命令には必ず従わなければならない。さもなければどんなペナルティが待ってるか。元々妖怪の山は鬼がトップだったけど、色々あつて今は妖怪の山にはいない。おっと、そんなことより早く準備しなきゃ。今日は私と二人の先輩で見廻りだった。

急がなきゃ。

【少女準備中】

「遅いぞ！犬走！」



「申し訳ありません！」

そうだった、この人はとっても厳しいことで有名だった！

何せ、集合時間の1時間前にはもう到着しているのだ。別に私は遅れた訳ではないけど、ものすごくくしかられている。

「もう止めないか。」

もう一人の先輩が止めてくれた。

「これから任務だ無駄口を叩くな。」

やっぱりこの人も厳しいな。

ちなみに、私を叱っていたのは、かびま風間 きぼ牙様。

もう一人はあまほし天星 やしろう社様。風間様が男性で、天星様が女性である。この人達は、私より

もはるかに階級が高い。天星様なんて、大天狗様からの任務を直々に伝えられる。ちなみに私はちらりとししか大天狗様を見たことがない。それだけすごい人なのだ！

「犬走！何をぼうつとしている！」

「!!!」

《時は、昼》

うーん。対して何もなか「ばあ！」

「ひゃあモゴ！ ムー!!」

「こちら椽、脅かしたのは誤りますから静かにしてください。」

そう言つて彼女は私の口を塞いでいた手をどけた。

「何するんですか文さん！」先輩方に聞こえないように極力声を小さくしていった。

「いやあ、可愛い椽に会いにきたんですよ。」

この人は射命丸 文様。妖怪の山のトップであり天狗の長である天魔様の娘である。

そんな彼女が私に会いにくる理由なんて…

「また特ダネ探しを手伝え〜でしよ。」

「おお、話しが早い。お願いします!!」

「任務中なので今度にしてください。」

この人は文々。新聞なるものを出版している。別に新聞を出版しているのはいいことだと思ふ。でもほとんど嘘っぱちなのである。

「え〜、お願いしますよ〜。」

「そんなこと言つてもダメですよ。」

珍しく今日は粘つてくる。

「どうしたんですか？今日はやけに粘りますね。」

「実はこの間、湖のほとりに真つ赤なお屋敷を見つけたんですよ。」

ん？湖のほとり？確かそこは…

「確かそこには何もなかったと思いますけど…」

「そうなんですよ。突然出現したみたい何です。」

「まさか、そんな…」

「本当何ですよ。その感じ信じてませんね。」

「まあ、にわかには信じがたいですけど…」

「まあ続きを聞いてください。それで珍しくて入ろうとしたんですけど門番に止められて。」

「はあ」

「なのでこっそり入ろうと思ったんですけどね。」

「コソ泥ですかあんたは？」

「まあまあ、でも入れなかつたんですよ。入ろうとしたら外に叩き出される見たいに。」

「結界でも張つてたんじやないですか。」

「私は、あの館には何か得たいの知れない大きな秘密があると思うんです。」

「つまり、あなたはその館の中を私の千里眼で覗いて欲しいと？」

「はい！」

「いやです。」

「ダメでしたかー。」

ようやく諦めが着いたようだ。

「権が助けてくれないのが残念ですけど、この射命丸！絶対に諦めませんよ！」

「はあ、頑張ってください。」

この人のめげない所は見習おう。

そうして彼女はどこかへ飛んでいった。

時々私は自由な彼女がうらやましい。誰に対してもフレンドリーだからどんな人や妖怪でも話せる。でもどうして彼女は下つ端である私なんか話しかけてくれるのだろうか。

### 《夜》

結局、あれから何もなかった。強いて言うなら道に迷った人間を人里まで送ったことだけかな？でも何もなく平和なのが一番！

ずっとこれからも平和なのが良いな

「おい！犬走！何をぼさつとしている早く報告をしないか!!」

「ヒヤイ！すみません！」

平和…かなあ？

《犬走家にて》

「ふう、今日も疲れた。」

ん？家の前に何か荷物がおいてある。

「郵便？なんだこれ」

どうやら弟からのようだ

「え〜つと？」

『姉貴へ

おみやげに酒を買った。泣いて喜べ。

弟より』

イラッ

「私あんまり酒飲まないんだよな。て言うか何本目だよ。どんだけ酒好きなんだよ。」  
うちには、弟が送ってきた酒のせいで、バーを開けるくらいにある。全くどうしようか。

ん？まだなんか書いてある

『P. S.

たまにでいいから帰ってこい。兄妹全員が心配してる。』

…すまないな弟よ。

もうみんなに合わせる顔がないんだよ。

《一方その頃》

「パチエ、準備はできた？」

「後少し」

「フフ、後少しで幻想郷は私達のもの。」

紅い悪魔は高らかに笑う。

## 登場人物

犬走 椛

性別：女性

能力：千里先を見渡す程度の能力／〈削除済み〉

概要：

本作の主人公。下っ端天狗。性格はいたって真面目だが時々ミスをする。兄妹がいる。本名は、〈削除済み〉

武器は、支給される白狼剣と盾。

普段は髪で隠れて見えないが首筋に赤黒い入墨がある「I」

風間 牙かざま きば

種族：白狼天狗

性別：男性



能力：音を聞き分ける程度の能力

概要：

棍の先輩。

とにかく真面目。後輩には厳しいが、いざという時には助けてくれる。打撃などの格闘術が得意。能力を使って相手の弱点部位を聞き分ける。

武器は、鉄性のガントレット。

あまほし やしろ  
天星社

種族：白狼天狗

性別：女性

能力：認識を合理化する程度の能力／真理を知る程度の能力

概要：

実は、白狼天狗のトップ。この事実は、あまり知られていない。理由は彼女自身、潜入作戦を得意とするため正体を知られることを好まないからである。暗殺術を得意と

する。武器は、支給される白狼剣のみ。

魔術師エルマ・ファウストの能力を受け継いだことにより、あらゆる魔術を行使することが出来る。

「IV」

大天狗

種族：烏天狗

性別：男性

能力：不明

概要：

権力に胡座をかいているだけの無能。

先代の天魔の息子のため権力ばかりはある。

白狼天狗を見下している。

その権力が故に天魔も手が出せないほど。

裏では、禁術に手を出し幻想郷を乗っ取ろうと目論む。

ラティオに殺害される。

その後天魔によって大天狗の座は複数人で着くことになる。

射命丸しやめいまる 文あや

種族：烏天狗

性別：女性

能力：風を操る程度の能力

概要：

幻想郷の新聞記者。

ほとんど捏造だが、時々本当のことを書く。

実は、妖怪の山ではトップクラスの強さ。

妖怪の山の長、天魔の一人娘。よく椀に会いに行く。

大天狗の1人

博はく霊れい  
霊れい夢む

種族：人間

性別：女性

能力：空を飛ぶ程度の能力

概要：

博霊の巫女。

歴代の中でも最強と言われている。

性格は少しドライだが、基本的に正義の心を持っている。

武器は、右手に大串、左手にお祓い棒。

権の弟

性別：男性

能力：〈削除済み〉

概要：

酒好き、家族でただ一人権の居場所をしる男。家族に教えないのは、彼女本人が自分の意志で帰ってこないといけなと思うているため。一度権に会いに行こうとしたが、博霊大結界の存在のせいで入れなかつた。彼なら結界をいとも容易く破壊できるが、権

に止められた。

謎の女神

性別：女性

能力：不明

概要：

かつてとある一柱の魔神を操り、世界を滅ぼそうと企んだ。名前も、姿も、能力も、不明。しかしまだ生きていることは、確かでこの世界のどこか潜んでいる。

ラティオ・スレッショルド

種族：亜神

性別：女性

能力：世界を創造する程度の能力

概要：元々人であつたが修行によつて神へと転生した。

椛には盲信的で彼女の命令はなんでも yes と言う。

左手のひらに謎の入墨「VI」

山城<sup>やましろ</sup>音<sup>おと</sup>

性別：女性

種族：白狼天狗

能力：???

概要：椛の後輩。優秀な為、椛よりも階級は上である。しかし何故か椛を恨んでいる。

## 一章・紅霧異変

### 2. 紅霧異変 ①

私はずっと一人ぼっち。

お姉さまも、咲夜も、パチエも、美鈴も、妖精も、みんな私を無視するの。  
なんで

なんで

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

虹の翼を持つ少女は、人知れず女神悪魔に壊されていた。



〈side out〉

「ふわ〜」

はあ、今日はなぜか呼び出しを食らった。でも私一人だけではなく全天狗が呼び出されたようだ。天狗だけでなく山にすむほかの妖怪や神も呼ばれているようだ。

【少女移動中】

「椀」

「おはよーにとり」

この子は河城にとり、私の友人である。時々休みの時に一緒に将棋を指すことがある。ちなみに内の目覚まし時計は、彼女が作ったものだ。

「今日はどうしたんだろう」にとりが聞いてくる。

「うーん、もうすぐ誰かが何かしら発表するんじゃない？」

「静粛に!!!」

おっとあれは…

「皆の者、よく来てくれた。私は、大天狗様の代理だ。今日は天魔様のご意向を報告にきた。先日、湖畔に出現した紅の館。同士の中にはもうすでに知っている者もいるだろう。今日はその事についての報告だ。天魔様からは、あの館に住まう者は幻想郷のパワーバランスを崩しかねないほどの実力者とのことだ。そのため妖怪の山の住民は安

全を守るため彼らが何か起こそうとも我々は関与しないとのことだ。」

…なんで天星様が天魔様のご意向の報告をしているんだ。普通は、大天狗様の仕事なのに。

まあ、いいか。

「それでは解散！　白狼天狗は持ち場に戻れ。」

「なんだかきな臭いね。」そうにとりは言う。

その時、

「もーみーじー！」

あー来た。

「おっとそばにいるのはにとりではないですか。これはどうも。」

「おっすおっす。文。最近カメラは大丈夫かい？」

「おかげ様でバツチリです。」

二人が話している間に逃げてしまおう…

「どこへ行くこうと言うのですか？　権。」

チッ　ばれた。

そんな彼女に私はこう言った。

「はあ、少し周りを見てください。」

「？」

『誰よ、あの子？』

『なんで、あんな下っ端に射命丸様は…』

『下っ端の分際で…』

うぐつ、視線が痛い。

て言うか下っ端言い過ぎ。

「殺す」

ん？今一瞬何か聞こえたような…

「周りの声なんか気にしたら負けですよ。」

そんなことよりも、あの館やっぱり何かすごい情報が眠っているはずですよ。天狗が

手を出せないとか、きつと幻想郷ぐるみの陰謀にちがいない。」

「そうですか？」

「はい！てな訳で…」

「嫌ですよ。」

「…まだ全部言い終わってない…」

最後まで言わなくても分かる

「文様が入れないほどの結界を張れるほどの力の持ち主ですよ。多分無理だと思いません。仮に見れたとしても、もし気づかれたら殺されちゃいます。」

トントン

「ん？ どうしたのにとり？」

「どうやらお困りのようだねお二人さん。」

「はい！」「いえ全く。」

私達（ほとんど文様）の返答を聞いて彼女は、おもむろにカバンをあさり出した。

「ちよūdい物があったよ。ほらこれこれ。」

「？ 普通のカメラに見えますが？」

「フツフツ、これは遠隔地撮影カメラだー。」

どんな壁があろうとも転写のように撮影ができる代物だぜ！」

…どうなってるんだ。河童の技術力。

「おお、それさえあればあの館中が分かると言うことですね！」

もうかつてにしてください…

「それでは撮りまーす。はい！チーズ！」

爽やかなシャッター音がながれる代わりに、カメラは、煙を上げて動かなくなってしまうった。

「ウギャー。私の一週間の徹夜の結晶がー。」

一週間も徹夜してたのか。寝ろよ体にわるい。

「そのく、すみませんね。にとり」

「…いいんだ。」

そう言つて彼女は壊れたカメラを回収して帰つていった。

…頑張れ。にとり

「さ さあ気を取り直して、次は権の番です。」

「正気ですか？あんた？死にますよ私。」

そう言つと彼女も残念そうに項垂れた。

「うー、最近権が冷たい…。」

ムムム…。

「はあ、わかりました。やりますよ。」

「え!?! 本当ですか!?!」

まあ、何かあつても大丈夫だし。

「千里眼発動」

うくん、どれどれ…

……

……

…

「文様、無理みたいです。」

「椀でもダメでしたか。」

「はい。お役にたてずすみません。」

「いえ！いいんですよ。それなら他の方法を試すまでです！それでは！」

…相変わらずポジティブだなあ



さて実を言うとあの館の中を覗くことは出来た。

ふふふ、確かに実力者がいるなあ。まあ、無茶苦茶なことはしないだろうな。何せ私の自慢の妹だからな。

…ばれないようにしよう。

《紅魔館にて》

「後少し、後少しでこの幻想郷は私の物に…」

「お嬢様、紅茶をお待ちしました。」

「あら、ありがとうございます。咲夜。」

「やれやれ、まさかこんな所にいたなんて。覗き見とは趣味がわるいですよ。姉さん。」

《????  
side》

ああ、今日もあの方は美しいわ。後少しでばれる所だった。それもこれも、あいつらが、あのお方に暴言を吐くからよ。嘆かわしい。あの方の素晴らしさに気づかないなんておかしいように。ずっとずっと、お慕いしておりますわ。

ウフフ、アハハハハハ

そう言うと彼女は左手のひらの入墨をうっとり眺めた。「VI」

斯くして様々な思いが夜を暗躍する。

## 3. 紅霧異変②

《side文》

どうも！ 射命丸 文です。うくん、やっぱりどうしてもあの館のことが気になる。きつとあつと驚く特ダネがあるに違いない。

でも、椀の千里眼でも中が見れませんでしたからね。

!!!

そうだ、霊夢さんの所へ行こう。あの人を焚き付ければ、いい内容の新聞を書けるかも知れません！

そうとなれば、直行です！

そうして彼女は、博霊神社へと、向かった。

《記者移動中》

…見えてきた。あれが博霊神社です。長い階段に自然に囲まれているのが特徴です。今は深緑がきれいですが、春になると桜で、秋になると紅葉によつて、四季によつて様々な顔を見せます。

私は春の、それも夜の大階段を上るのが好きです。階段の隣に無数に設置された灯籠が夜をぼんやりと照らし、散つて行く桜に灯籠の光が反射して、まるで桜の花自身が淡い光を発しながら舞い落ちるのがとても素晴らしいと思います。私はその時期の博霊神社は幻想郷で最も幻想的な場所だと思っています。でも不思議なことに、里の人間は気味悪がつてあまりここに来ないんですけどね。どうも妖怪ばかり来るからだそうです。そうした理由から里では、「妖怪神社」と呼ばれているそうです。

…別に博霊神社に来る妖怪は、人喰い妖怪と言う訳ではないんですがね。

おっと、話が半分それてしまいました。

「ん〜？ 文？何しにきたのよ。」

この少し無愛想な女の人は、博霊 霊夢

今代の博霊の巫女で、他の妖怪からは、尊敬と畏怖（2：8）を込めて『鬼巫女』と呼ばれてます。

「…今大分失礼なことを考えてたでしょ。」

「い！ いいえ！ そんなことが有ろうはずがございません！」

「どうだか。」

あ、危なかった…。

「で？ 何か用？」

「あつ！ 実はですね。湖のほとりに大きな館が出現したのはご存知ですか？」

「ええ、知っているわよ。」

「なら話が早い。あの館の住人もしかしたら異変を起こすかも知れないので倒して来てくれませんか？」

「幻想郷の安全のために。」

「なくにが幻想郷の安全のためよ。あんたの目的はいい新聞のネタでしょ。」

うぐつ、ばれてる。

「だいたい、私は異変が起こらないと動かないわよ。」

「おーい！お前らーなに話してんだ？」

あの人は…

「これはこれは、魔理沙さんではありませんか。」



「よう！文。こないだぶりなんだぜ！」

この人は、霧雨 魔理沙。「普通の魔法使い」を自称する「普通の盗っ人」。

「死ぬまで借りるだけなんだぜ！」とか言つて本当に返さないらしい。私のカメラも、犠牲になりました。

「それより、なんの話をしてたんだぜ？」

「魔理沙さんあの例の館のこと、ご存知ですよね！」

「？ 館？なんのことだぜ？」

おや？知らなかったようです。

ん？ちよつと待てよ…

「魔理沙さん、私の新聞買ってますよね。そこに載せてるはず何ですが…」

「ああ！あれならしつかりと窓拭きに使つたぜ。」

……どうしてくれようか。

「まあ、魔理沙、つまり…」

《少女説明中》

「なるほど！そういうことなのか！」

はあく。

「紅い館！」

どうして、

「きつと中には、」

皆、私の新聞を…

「すごいお宝があるに違いない！」

ひどいです…

「ちよつと文。いつまでしよげてるの？魔理沙もう行ったわよ。」

…本当だ。もういない。

「所で霊夢さんは、ちゃんと読んでくれますよね？」

「えつと、その、新聞は色んな使い方できるから。多少はね。」

……………。

《side out》

【湖畔にて】

《side 魔理沙》

「はえ〜。本当にあつたんだな〜。にしてもでかいな！」

これは、どうやら想像以上のお宝が眠っているにちがいない！

「門番なんて、いないじゃないか。」

どうやら。文の情報は間違っていたみたいだ。  
私は門を飛び越え、館の敷地に侵入した。

「…普通に到着したぜ。」

どうやら、霊夢は文の捏造新聞に騙されているようだな。  
帰ったらこの魔理沙様がアドバイスをしてやろう！

そう思いながら私は、窓から屋敷の中へ入って行った。

私は、この時気づかなかった。この時幻想郷は、どうなっていたのかを。  
そしてこれは、異変の序章に過ぎないことを。

《 s i d e o u t 》

【博霊神社にて】

## 《side 靈夢》

空が赤い。

それも、夕焼けのような綺麗さは感じない。まるで空が血を流しているような。どうやらある場所を中心に、変化が起こっているようだ。確かあそこは…

「どうなっているのでしょうか…。って、靈夢さん!!!」

私の身体は自然に行動に移っていた。

## 《side out》

【紅魔館にて】

フッフ、遂にこの時が来たようね。私がこの幻想郷の支配者になるときが！

「お嬢様。紅茶はいかがですか？」

「ありがとう。咲夜。いただくとするわ？」

また姉様が私を抜きにして、何かしている。  
許せない  
赦せない  
ユルセナイ

【妖怪の山にて】

《side 椀》

うわ。すごいなく。空が真っ赤だ。

「どうなってるんだ！」

他の同業達は、パニックになっているけど…

まあ命令のせいで白狼天狗には、どうにもできないけどね。

どうやらあの赤い、いや紅い霧、彼女が何かしたわけでは無さそうだ。

それなら、博霊の巫女が何とかしてくれるはず。

『動揺するな！お前達、持ち場に戻れ！』

天星様からの指令が入ってきたようだ。

## 4. 紅霧異変③

【紅魔館内部にて】

《side 魔理沙》

「すっげ〜！中は、外見以上に広く感じるなあ〜。」

いや〜、大した物だ。

上の階に上がるのと、下の階に下る両方の階段があるが…。

どうも、私の直感は下に行けと言っている。

「よし！早速行ってみるか！」

《少女移動中》



「な、な、な、なんだこれは〜!!!」

そこにあつたのは…

広大と言う言葉では、物足りないほど広い図書館。

そして、見渡す限りの

本!!

本!!!

本!!!!!!

地上に数えられないほどの、巨大な本棚が有るのはもちろん

何と空中にも全ての面に本が敷き詰められている正方形の本棚が、  
1  
2  
3  
4  
5個!

「ざっと見た感じ…なんて数の魔導書だ!!!」

や、ヤバイ。自分のサガを抑えられそうにない。

「こ、こんなに有るんだから一冊位いいよなー」

いや、一冊と言わず100冊や千冊でも…

そう思い私は、近くにあつた魔導書に触れようとしたその時！

「！・なんだぜ!?!」

何かが破裂したような音と共に、私は円形の透明な壁に囲まれた。

「あら、どうやらネズミが一匹入り込んでたみたいね。」

穏やか、いや、やる気の無さそうな声がした方向を見た。

そこには、紫色の縦ラインが入ったローブを着た少女が

宙に浮いていた。

「なんだおま…「うわく!!!」さすがパチュリー様！侵入して来たネズミをあつと言う間に閉じ込めてしまうなんて！」

「なんだなんだ!!? 今度は? 赤い髪が悪魔? 見たいな少女が飛んできたぞ?!

「なんだお前ら?!」

「あなたに教える義理はないし、それはこっちのセリフよ。」

「まあいいわ。これから博霊の巫女が来て忙しくなるしあなたごときに構っている暇はないわ。」

「! 　　なんでここで霊夢が関わってくるんだよ!!!」

「そういうながら私は自身の周りに弾幕を張り透明な壁を破壊した。」

「あら、少しはやるようね。」

「これからこの幻想郷は、紅魔館の主の物になる。どう? あなたも情けで協力させて上げる。この幻想郷が我々の物になったらあなたをこの私の召し使いにして上げる。」

「パチュリー様の召し使いに成れることを光榮に思いなさいよ人間!!」

私が召し使い？

「フフフフ。ハハハハハ。」

「どうしたのでしょうか？恐怖の余り気が触れたのでしょうか？」

…その悪魔、うるさい

「私がお前の僕？ ふざけたことを言うもんだな。霊夢が来ずとも、この霧雨 魔理沙様が、今回の異変を解決してやるぜ！」

そう言つて私はミニ八卦炉を取り出した。

「あら、残念ね。それならばあなたを始末しなければならぬわ。」

「できる物ならやってみろ！」

「私が数百年研究した魔法をあなたの子どもがかじった程度の魔法で破れるとは思わな  
いでちょうだい。」

彼女がそう言ったその時、景色が一変した。まるで無数の太陽が私の周りに出現した  
ように。

「この魔法は！この魔法を使えばあんなコソ泥なんて一瞬で消炭「お前さつきからうる  
さい！」ウギヤ!!」

私は構える。

「消し飛ぶがいいわ。」

〈日符「ロイヤルフレア」〉

そう彼女が唱えるとまばゆい光と共に、私の意識は落ちた。

《side out》

【湖上空にて】

《side 霊夢》

やっぱり、何か行動に移すと思ってた。

はあ、めんどくさ。今回も早く終わらして煎餅でも食べよう。

《少女移動中》

【紅魔館門前にて】

どうやら、門番はあいつのようね。

私の前には緑色のチャイナドレスを着た赤い髪で高身長的女性が立っていた。

「お初にお目にかかります。博霊の巫女

私はこの紅魔館の門番をさせていただきます。紅 美鈴と言う者です。」

そう彼女は丁寧に言った。

「そんなことどうでもいいのよ。この紅い霧、

あなたの館から出てきてるでしょ！早く止めなさい！」

「それは出来ない相談です。これより我が主レミア・スカーレット様がこの幻想郷を支配するのです。あの方は、それが完了するまで何人たりとも通してはならないと仰せです。申し訳ありませんがお引き取りください。」

…埒が明かない。

「もういいわ。あなたの主を出しなさい！」

「お断りさせていただきます。お会いしたいのであれば私を倒していかれては？」

…ほう！いい度胸じゃない。

私は、大串とお祓い棒を構えた。

《 s i d e o u t 》

「どうやら、姉さん来てないみたいね。残念。まあどの道これから会うのだからまあいいか。」

そうして黒いコウモリの翼が生えた赤い髪の少女は、うつすらと微笑んだ。

「さてと、パチュリー様が散らかした本をかたづけないと。」



## 5. 紅霧異変④

【紅魔館門前にて】

《side 霊夢》

私は今、紅 美鈴と名乗る門番と対峙をしている。

「ハッ!!!」

最初に仕掛けて来たのは向こうからだった。

鞭のようなスピードの蹴りが上から私を襲う。

とつさに私はかわす。

かわしたことによつて標的を失つた蹴りは、石レンガの地面をえぐる。

「これでは、あなたを倒したとしても、後で怒られそうですねっ!!!」

続く第二撃は、拳だ。

まっすぐ私の、みぞおちに向かって来る。

とっさの判断で、お祓い棒でガードす  
 「グウツ!!!」  
 !?!?!!

なんて破壊力だ。

身体への直撃は免れた物の、数メートル後ろに吹き飛ばされた。

「あら、そんな心配をする必要はないわ！私があなた達を倒してしまうからねっ!!!」  
 そう言つて私は大串を彼女にぶつけた。

左腕で、彼女はそれをガードする

「はっ！ さっきの攻撃で、吹き飛ばされたあなたが何を言います  
 !?!?!」

相手が、言い終わらない内に大串から弾幕を放つ

彼女は、直に被弾してしまう。

結構なダメージのようだが、致命的な物ではない。

どうやら、全て当たる前に回避したようだ。

「クツ!! 卑怯ですよ!!」

「こっちは、異変解決が仕事よ！いちいち相手の得意分野で戦う訳には行かないの！」  
 そうまだ弾幕を撃つてこないが恐らく向こうは、格闘による戦闘が得意なはずだ。

「ならば、こちらも弾幕を使いましょう。」

「！」

私は再び、大串とお祓い棒を構えた。

〈華符「芳華絢爛」〉

!!これは!!!

すごい弾幕ね。

でも…

「かわせないほどではないわ!!!」

そう言って私は弾幕の間を飛び回りながら、弾幕を撃ちかえす。

「なんと！ なかなかやるではないですか！ならば…」

真つ直ぐこちらへ突っ込んできた。

「クッ!!」

蹴りとパンチを連続で食らう。

しかし、私もやられている訳には行かない。

攻撃を防ぎながら、弾幕を撃っていく。

「ならば、これでどうですかー！」

彼女は後ろへ飛び退き、スペルカードを撃つ

〈彩符「極彩颯風」〉

どうやら、違和感は本当のようだ。

彼女はスペルカードと格闘を同時に出来ない!!

攻撃のタイミングは、スペルカードの発動中！

「所で、私がない間に館の侵入を許してしまったあの金髪の少女は知り合いですか？

まあ、もう始末されていますが。」

.....は？

金髪の少女?? 誰? まさか魔理沙? そんなはずは...

「おや? 動きが鈍くなりまへ(霊符「夢想封印」)〈

気がつくくと、紅　美鈴はひしやげた門に気絶しながらもたれていた。

「早く、中に入らないと。」

「そう言っって私は館の巨大な扉を開けた。」

## 6. 紅霧異変⑤

お姉様

お姉様 お姉様

お姉様ヲ姉様お姉サマお姉様

お姉様お姉様

わタ s h i ガ , あ ナ t a を

コワシテアゲル

彼女の胸元には、青くそして怪しく輝く宝石があつた…。

【紅魔館エントランスにて】

《Side 靈夢》

紅 美鈴を倒した後、私は館の内部に侵入した。

…広いわ。

でも不思議。とても暗い…

「！」

突然私の目の前に、何者かが出現する。

「お待ちしております。博霊 靈夢様。

ようこそ、紅魔館へ。私<sup>わたくし</sup>は、

メイドの十六夜 咲夜と申します。

早速で申し上げにくいのですが、お嬢様の命によってあなたの命をいただく所存です。」

そう、十六夜 咲夜と名乗るメイドが一気にまくし立てた。

「どきなさい。今私は、虫の居どころが悪いの。退かないのなら、あなたのお嬢様とやらをここに呼び出して来なさい。」

私は腸が煮えかえる気持ち、抑えながら比較的穏やかな声で話した。

「…どうやら落ち着いている振りをしていますが、とてもご立腹のご様子で…。おおかた、先ほどの侵入者の事を思つてでしょう。」

!!!

コイツ!!!

「あら、そう怖いお顔をなさらないで。」

「魔理沙は… 魔理沙は無事なんでしょうね!!!」

私は、怒鳴る。

「さあ、どうでしょう?」

彼女に飛びかかろうとしたその時!

「!? 後ろ!」

背後に何か飛んでくる気配を感じた。

お祓い棒で防ぐ。



どうやら、飛んで来たのはナイフのようだ。

まさか後ろにもだれかが!!

「隙あり!!!」

私のすぐ後ろに、ナイフを持った咲夜がいた。

かなりの距離があつたはずよ!!

一体どうやって!

「クッ!!」

私は横によける。

ザスッ!

腕にかする。

そのまま私は、飛び退いた。

「哀れなあなたに、教えて差し上げましょう!

私の能力は、時を止める程度の能力!」

時を…止めるですって!?

「この、忌み嫌われてきた能力をお嬢様のお役にたてられるとわ光栄です。」

「私を信じてくれるのはお嬢様だけ……。」

「この十六夜 咲夜！ なんとしてでもあなたを始末します！」

そう言ったと思うと、私の周りに無数のナイフが出現した。

「へメイド秘技「殺人ドール」>!!!」

私は、陰陽玉を二つ出現させ全てのナイフを防ぐことに成功する。

これは、何か対策せねば!!!

私は、ナイフをかわしながらもお札を撃っていく。

「フツ！」

相手は恐らく時間を止めて、よけている。

恐らくこのままでは埒が明かない。

「フフツ。やみくもに撃つても当たりませんよ！」

と思うじゃん！

「何!?!」

彼女は地面降りた瞬間、身動きがとれなくなつた。

「まさか!!」

そう、そのまさかだ！

さつき、撃つた無数のお札

そのお札が地面にびっしりと張り付いている。

私は、そのお札の一枚一枚に固定の結界なるものを張っていた。

「クッ!!己!」

「口調が変わったわね。」

そう言っただけで私は、彼女に近づいて行く。

彼女は無数のナイフを投げて来た。

「さっきから、不思議に思ってたのよね。 どうして時間を止めている間に私に直接攻撃しないのかってね。」

歩きながら私は言う。

「何か有るんじゃないかってね。」

「っ!」

「その反応凶星みたいね。」

そうやって彼女の前に大串をかざす。

「これで勝てたと思わないことね！ 私を倒したとしてもお嬢様があなたを…。」

…。

「…それを言って勝利した悪役がいる？」

〈霊符「夢想封印」〉

紅魔館のメイド 十六夜 咲夜を倒した私は館の内部へ侵入する。

《side out》

【紅魔館最上階とある部屋にて】

咲夜は、やられたようね。

必ずあなたの仇も取るわ。

そのためにはなんとしてでも幻想郷を支配するわ。

何よりもあの娘のために。

彼女はまだ知らない、自らが思う娘がどうなっているのかを。

## 7. 紅霧異変⑥

【紅魔館最上階とある部屋にて】

《side 霊夢》

私は、とある部屋の中にいる。

何か得体の知れない禍禍しい感じがしたからだ。

入って見ると案の定！

「あら、よく来たわね。博霊の巫女！」

そこには、巨大な玉座に座った…

子ども？

「ずいぶんと小さいわね。」

そう私は煽る。

「見た目に惑わされるとはまだまだだね。それともわかって言ってるのかしら。さしずめこの国で言う負け犬の遠吠えってやつかしら？」

「まだ日本の文化をよく知らないみたいだから教えてあげるわ。そのセリフは勝つてから言うものよ。」

そう返すも、目の前にいる子どもが得体の知れない化け物だと言うことに気づいていた。

それに、隣にいる紫の恐らく魔女である少女も厄介ね。

…?!  
!?!。

その時私の勘が、危険信号を発した。

魔女の隣にいる赤い髪の悪魔、彼女からあまり力を感じない



はずなのに、何かいやな予感がする。

その悪魔は、私と目があつたのかうつすらと微笑む。

「あら、どこを見ているのかしら。余所見をするほどの余裕があるのかしら。」

そう玉座に座った少女が言った。

「自己紹介が必要ね。私の名はレミア・スカーレット。吸血鬼よ。」

そう言いながら丁寧にお辞儀をした。

「早速で悪いのだけれど、博霊の巫女。あなた、降伏しなさい。」

「何を言つて」

「これを見ても同じようなことが言えるのかしら？ パチエ。」

「わかったわ、レミイ。」

そう言つて、パチエと呼ばれた少女が手をかぎす。

「魔理沙!!!」

すると目の前に、十字架に張られたようなポーズのボロボロの魔理沙が出てきたではないか!!!

「あなた達!!!」

「おっと卑怯とは言われたくないわ。賢いといつて欲しいわ。」

そう言つて続ける。

「私はあの娘のためになんとしてでも幻想郷を支配しなくてはならないの。あの娘がのびのびと生きるためにね。そのためにはどんな手だって使うわ!!」

「幸いにもこのネズミは生かしてあげてるわ。」

彼女がそう言うのと、私は魔理沙の方を向いた

「……うう。」

弱々しい魔理沙の声が聞こえる。

「彼女は返してあげるわ。どのみちあなたも怪我人を抱えながら戦えないしね。解放して上げてパチエ。」

「分かったわ。」

そう言うのと、魔女は魔理沙を地面にゆっくりと下ろした。

「魔理沙!!」

私は魔理沙へ駆け寄る。

「……すまなかつたぜ。霊夢。」

「感動の再開の所悪いのだけれど、彼女を担いで帰って（ドカン!!!）」

レミアアが言い終わらない内に彼女達の地面を中心に部屋が爆発した。

部屋、いや屋敷が崩壊していく。

その時私の目に移ったのは、青く輝く宝石のネックレスをつけた虹色の羽根を持つ少女だった。

《side out》

【妖怪の山にて】

《side 椀》

!!!

この魔力は!!

間違いない、やつだ!!!

私は千里眼を使った。

！なんて事だ!!!

この幻想郷で、まさかやつの被害者がいたなんて。それも年端もいかない子どもだぞ  
!?!

『総員！ 持ち場に戻れ！ 我々には関係のないことだ！』

天星様から、そのような指令が降りてきたが：

私は、他の同業に見つからないように一人で持ち場を離れた。

〈偽罪「銀<sup>ブー</sup>幻<sup>カ</sup>狼」〉

《side out》

【紅魔館にて】

《side 小悪魔》

私は、今爆発に巻き込まれた二人の主を担いでいる。私にとっては大したことなかったがこの二人にとってはよほどのダメージなのか気を失っている。

「ちよつと！あなた！」

そう博霊の巫女に呼ばれる。

「彼女は何者なの?!」

「彼女は、お嬢様の妹です！ 無駄話している時間はないので端的に言います。あの方の能力は、ありとあらゆるものを破壊する程度の能力です。私が相手をしますので私の主と他の従者を見てきてくれませんか？」

「でも…」

彼女が何かを言い返そうとした瞬間！

アアアアアアアアアア

けたたましい叫び声と共に妹様の妖力が上がった。

「このままだと幻想郷が滅んでしまいます。どうか急いでください！」

そう言つて私は飛び立った。

実を言うと私には妹様との面識が全くといっていいほどなかった。いや、なにも存在すら知らなかった訳ではない。

何度かパチュリー様から聞いた事がある。

曰く、生まれた時から妖力が強すぎて父と母を殺してしまったこと。

曰く、私が召喚されるずっと前に自身の心までも壊してしまったこと。

曰く、地下に幽閉されていること。

等々

今回の異変だつて彼女のために起こしたとのことらしい。

紅い霧を張つて彼女を自由に遊ばせてあげたり、

お嬢様が支配者となつて妹様が破壊行為をしても力で黙らせたりするためであつた。

私は、彼女の心が壊れてしまったのは彼女の能力が起因する事だと思つていた。しかし違つた！

私は、彼女の胸元にある宝石を見て合点がいった。





このままだと妹様が死んでしまう！

そう思った瞬間、私は自らの魔力を瘴気に変換して空に張った。

瘴気とは、我々が身体にまよって戦ったり回復に用いたりする事ができる物だ。

「!!」

遠くで、博霊の巫女は愕然としていたが、この際もう気にしない。

アアアアアア イタイイタイイタイイタイイタイ

妹様は叫ぶ

「今、助けますね！もう少しの辛抱です！だからすみません!!」

妹様を瘴気で拘束し、ネックレスを引きはがそうとする。

バチイッツ!!

「ぐうつ!!」

ネックレスに弾かれる

あの女神悪魔！今度は完全に対策してるわ！

あのときのようにはいかないってことね！

グウウウウウウ!!!

唸り声と共に妹様は拘束していた瘴気をなんと破壊した！

自由になった妹様は私を殴りつける。

私は、腕を交差してガードしたが…

「?!?!?!」

そのまま私は地面に叩き落とされた。

なんてパワーだ!!

さっきまでそんなことなかったのに。

それに妖力もあがって…

「ウグッ!!」

両腕に激痛が走る!

「なんだ?!」

私の腕はまるで弾けたかのように血を吹き出していた。

まさかこれは、「あらゆる物を破壊する程度の能力」!

そう思っている間にも妹様の妖力が増えていった。

ガ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
!!!!

吸血鬼の膨大なエネルギーを対価に力を引き出しているようだ、このままでは…

もう、私にはどうすることも出来ないのか……

その時、私は背後に懐かしい魔力を感じた。

後ろを振り返ると、銀色に輝く狼の群れがいた。



〈禁忌「カゴメカゴメ」〉

空中に格子状に小さな無数の弾幕が出現したかと思うと、妹様が発射した特大の弾幕に巻き込まれながらこちらに向かってきた。

いや我々のいる所だけではない、あちらこちらに同じような弾幕を放っている。

私と狼は避ける。

「どうやら話している時間はないな。これは勘なんだが昔一度あの女神に精神を汚染された私なら何とか彼女の心とあの宝石に干渉する事が出来るかもしれない！」

「そんな都合のいい事がありますか!？」

「わからんが…」

ええい！これは賭けだ！ それにどのみちこのままには出来ん！ お前も彼女を殺すやらかたはしたくないだろう。」

「!」

私は驚いた。彼女は本当に私のことを思ってくれているんだ!

そう思うとなんだか目頭が熱く…

「おいおい!?! 泣くのは後にしてくれ。彼女を殺したくないのは私の意地でもあるんだぞ! 彼女を殺したらあの女神の思うつぼのような気がする。」

そうだ。あの女神悪魔の好きにさせてたまるか!

「私の狼で彼女に近づくと、だからあの弾幕を何とかしてくれないか?」

「わかりました!」

そう言って私は、妹様の目の前まで飛び立ちふさがった。

ジャマヲスルナアアアアアアアア!

〈禁忌「レーヴァテイン」〉

叫びながら剣状のレーザーをだし、私に斬りかかってくる。

私も負けじと自身の瘴気を剣状に変形し防ぐ。

ガキイイイイン

まるで金属と金属をぶつけたような音がした。

「クッ!!!」

なんて力なの!? 軽く魔神クラスじゃない! それに硬質化した瘴気にヒビが入って



いる！

でも耐え抜かなければ：

ドカッ

突然妹様は私を蹴飛ばした。

すると、彼女はあたりに向けて無数の弾幕を撃っていった。

まるで爆撃機が頭上を通過して行くかのように地面に無数の爆発が起こる。

まずい！！ 地面にいる狼達に攻撃し始めた！

私は瘴気を展開して無数の弾幕にした。

この弾幕には細工がしてあり、瘴気を高密度に圧縮しているためダイヤモンドよりも硬くなっている。それに加え弾の周囲には数枚の膜を張ることで何発は妹様の弾幕に当たっても爆散しない仕組みになっている。

これなら、動き回る狼全員に防御壁を張るより魔力使用における効率がいい。それに今空に瘴気を張っているためもうそんなに魔力はない！

しかし、それでもすべての弾幕を撃ち落とすことは不可能だ！

あれだけたくさんいた狼がどんどん数を減らして来ている。このままでは…姉さん…。

そんな心配をしていた瞬間、空中を跳ね回って移動していた狼が妹様に飛びついた。

すると！

グアアアアアア！

けたたましい妹様の叫びと共に、その狼は妹様の中に吸い込まれるように消えた。

《side out》

《side 権》

よし！成功した。思った通りだ！

ヤツの魔力に一度影響された者は影響された同士心に干渉し合う事が出きる。

ここまででは上手くいった。

あとは…

《side out》

【フランドール・スカーレットの深層意識内部】

《side フランドール》

私は小さいときから、何かがおかしかった。何かを壊したい衝動に刈られていた。そのせいでお父様もお母様も殺してしまった。自分でもいけないことだと気づいていた。最初はお姉様はとも優しくかったでもいつからかお姉様は私とは、会わなくなつた。どうしてどうしてどうして。

いや、もう答えはわかっている…

もう一人の自分が語りかけてくる。彼女は

『もう、狂ってしまいましょー！そうすれば楽になれる。』

という。

嫌だ！

嫌だ！

嫌だ！

いつも私はその提案を断っている。

でも今回は違った。今まで聞いた事がない…いや、一度だけ聞いた事のある声が聞こえた。

『あなたのお姉様、あなたを放って何かやってるわよ』

その声を聞いた時、私の部屋の机に青色に輝く宝石が出現した。

私とその宝石に触れたとき私ともう一人（狂気）の私（気）は入れ替り、私は自分の心の奥底まで突き落とされた。

でも…もうこれでいいや。

ここにいればもう苦しまなくてもすむよね…。

そう思うと私は檻に囲まれた。

これも…お父様とお母様を殺した罰  
ごめんなさい

お姉様

『よつと。』 トサツ

何かが着地するような音が聞こえた。

『ヤバイな。こんな所まで崩れかけてる。』

…だれ。

『ん？あれは…』

だれかがこちらに歩いてくる。

『君が、とらわれのお姫さまか？』

女の人の声が私に聞いてくる。

来ないで！私はここにいるべきなの！

そう私は答えた。

すると…

『いんや、君はここにいるべきじゃない。君には帰るべき家がある。』

その声は、そう答える。

もうないの！私はお父様とお母様を殺してしまったの！

『でも止めようとしたんだろ。』

それは！…

私は顔をあげて声の主をみる、そこにたっていたのは白い犬の耳と尻尾をはやした女の人だった。

『ん？ああこれ？この狼セットは生まれつきあるんだよ。言うなれば私の相棒だな！』

そう彼女は満面の笑みで言った。

楽しそうに

ハッ！いけない！

『まあまあ、そんな怖い顔せずに。この檻邪魔だな。』

そう言うと彼女は私の檻に手をかけ…

グググッ

金属の曲がる音と共に檻を壊した。

『隣座りなよ。名前は？』

…フラン…。フランドール・スカーレット。

私はそう答える。

『いい名前だな！おいで。』

彼女は座り込み、自分の隣の地面をポンポンと叩いた。私は座り込む。

『自分の行動を止めようとしただけで十分だ。世の中には、少しかどわかされただけで自分の意思で大罪をおかしたバカもいる位だからな。そのバカはな、自らの意思で家族



に手を出したんだぜ。』

そんな！…ひどい…

『…そうだろ。』

さつきまで明るかったお姉さんが、少し落ち込んだように見えた。しかしすぐにさつきの明るい様子に戻って

『まつ！そんな訳だから君はまだやり直せる。』

でも、もう一人の私（狂）が強くて私にはどうすることも出来ないの。

『フランって呼ぶぞ。いいかい、あれはフラン自身でコントロールしなきゃいけないんだ。放っておいたらいつまでたっても変わらないぞ。』

でも一度だって成功した事ないの！

『コントロールしようとしたのか！偉い子だ！私も手伝ってやるから安心しな！一緒に君の狂気に「反逆」しようぜ！』

でも…

お姉様は…お姉様はもう私を嫌いになっちゃったの…

『…本当にそうか。んゝ私の見立てではそろそろかな？』

その時私の記憶にこんな言葉の数々が戻ってくるような感覚と共に再生された。

「妹様！必ずあなたを守りますね！」

「妹様。おやつにプリンを持ってきました。ゆっくり食べてくださいね！」

「妹様！一緒に遊びましょ！」

「妹様！」

「妹様！」

「妹様！」

「妹様！」

最後にこんな言葉も思い出した。

「フラン……。絶対に……。絶対に私はあなたを見捨てないからね。だから安心して……。」

記憶と共にひび割れた空間が修復されていく。

『君がどんなに事を聞いたのかわからない、でもそれは君にとってかけがえの無い物のはずだ。』

……アア……アアアア……ウワー……!!

私は泣き出してしまった。

しばらく泣いて落ち着いた時……

『落ち着いたか?』

…ヒック…ヒック…スン…うん!…

『君はまだまだ若い。これからもつといろいろな事を経験していけ!』

………

その…お姉さん…私、500歳超えてるよ…

『それでも私よりはるかに若いんだ。応援してるぞ!』

…お姉さんは、何歳なんだろう?

私が聞こうとしたその時

『おつと!女性に年齢を聞くのは例え同性であつても失礼に当たるぞ!これ人生の先輩からのアドバイス。…昔、その事でエライ目にあつた。』

お姉さんの目が遠くなる。

へ、へえ、そうなんだ！

『さうと！そろそろ私はここから出なきやいけない。ついでに君の狂気を少し弱らせとくから！あとはフランの仕事だ！頑張れよ！』

！

まだ聞きたいことがある！

また会える!?

『ああ！もちろん！なんたつて言つたつてここは幻想郷。どんな幻想だつてかなえられるんだ！』

『じゃあまたいつか！』

さよなら、狼のお姉さん

『そうだった！私としたことが！フラン、もう一つ人生のアドバイス！名前を聴くときは自分が先に名乗るのが礼儀！私みたいになるなよ！それと私に会つたことは二人の秘密だぞ！』

そう言つて彼女は振り返つた。

ホントだ！私、まだお姉さんの名前すら知らなかつた！

私つてばいつも自分の事ばかり。

お姉さん！名前なんて言うの？

すると彼女はこう答えた。

『今は、皆から犬走 椛つて呼ばれてる。でも本当の名前はね…』

《side out》

【崩壊した紅魔館にて】

《side 小悪魔》

あれからしばらくたつけど、先程の喧騒が嘘のように静かになつた。妹様も飛んだまま動かない。いつの間にあの青い宝石もなくなっている。

「ねえ！大丈夫なんでしょうね！」

「あの人なら大丈夫です。」

「いったいどうなってるんだぜ!？」

博霊の巫女と白黒の魔法使いが聞いてくる。

「今回、私はなにも出来なかった。何が歴代最強よ！幻想郷の危機になにも出来ないなんてー！」

「いえー！なにも出来なかったのは私もです。あの人がいなければ私もやられていました。今回のことはあの人以外誰もどうしようも出来なかったんです！だから気をしっかり持つてください！」

私は、彼女を励ました。

「でもー！」

やれやれ、まだ反論するか。

「今のあなたの体たらくを見たらお嬢様はさぞがっかりするでしょうね！博霊の巫女がこんなにも腑抜けだったなんてってね！」

「!! 言ってくれるじゃない！」

「まあ、だれも死なずにすんだのはいいことじゃないか！」

そう白黒が言う

「私、霧雨 魔理沙って言うんだ以後よろしくな。」

「ああ、私は博霊 霊夢よろしくね。」

そう二人は自己紹介をした。

「以後よろしく？ 異変を起こした私達を歓迎してくださいるのですか？」

「ええ。この幻想郷では何かあっても、宴会を開いて水に流すのがルールよ。まあ肝心の何かは終わってないけどね。」

……：以外とそこら辺はルーズなんだな幻想郷。

「所であの狼は何者？たくさんいたはずなのに消えちやつてるわ。」

「あれは……」

私が説明しようとしたその時！



トサツ

何かが着地するような音が聞こえた。

「まあ、詮索はしてくるな博霊の巫女よ。私には敵対の意味はない。今回の異変解決に免じて彼女と私の詮索はよしてくれないか。」

そこには、あの狼がいた。

「……わかったわ。」

「いいのか霊夢？」

「私は幻想郷の抑止力、異変を起こさない限り余計なことはいわ。でも異変を起こすので有ればその時は容赦しないわ！」

さすが、博霊の巫女と言ったところか。

「うむ、ありがたい。」

なんだか場が終息しようとしている雰囲気にある…

「待つて！私はあなたに話が…」

私はそう狼に話かけようとするが

「私も君も、お互い詮索はやめよう。君にも主はいるはずだ。お互い静な生活がしたいものだろう。そしてすまない…。」

「それではまた縁が有れば会おう！」

そう言ったかと思いきや、狼は見えなくなり消えてしまった。

「き、消えた！」

《side out》

《side 文》

ウググ！

くやじい！

まさか、あのタイミングで呼びだしを食らうとは！

霊夢さんが飛び出した後、妖怪の山本部から司令があつた。内容はパニックに陥つた妖怪の山の鎮静化！

そんなつまらない任務のお陰で私の特ダネのチャンスは潰えた…

任務の最中に紅の霧が消えて行くのを見た時には絶望した。

しかしすぐ後に、黒いもやのようなものが空を覆った時には驚きましたけどね！

そんな訳で今私は、全速力で紅魔館に行つたのですが…

「おう！遅かつたじゃねえか文！」

ぼろぼろの魔理沙さんが私にそう言う。

うわー！黒いもやすら消えてるー！

「はあ、そこにいる金髪の少女が異変の犯人ですか？」

そう言つて私は、もう一人の少女を膝枕している金髪の少女を見た。そばには銀髪のメイドがおり嬉しそうに傘をさしている。

「正確には、そのの寝てる方だけどね。」

「そうなんですか？」

そう言いながら彼女達の写真を撮った。

「まるで、仲のとてもいい姉妹みたいですね。」

「ええ、そうね。」

私の発言に霊夢さんが答えてくれた。

## 9. 紅霧異変⑧

《side レミリア》

夢を見ていた…

一緒に従者達と友人と

<sup>フラン</sup>妹と一緒に食卓を囲む夢を見ていた。

「お姉様、お姉様、起きて。」

そんな声が聞こえた。

いつも聞いている声だ。しかし以前のような狂気は感じられない。

私は目をあける。

「おはよう。お姉様。」

その声の主は柔らかくそう言っている。

私は彼女の膝元で眠っていたようだ。

「フラン？もう大丈夫なの？」

そう私は問いかける。

「ええ、大丈夫よお姉様。それとごめんなさい。」

彼女は謝った。

私は彼女を抱き締める。

「いいのー！もういいのよー！」

そう彼女に強く言った。

もうこれでもにも心配せずに、フランと一緒に…

「感動の再会の所悪いんだけど。」

そう聞き覚えのある台詞が聞こえた。視線の先には博霊の巫女が立っていた。ひどくボロボロだ。

「異変の元凶は私よ！煮るなり焼くなり好きにしなさい！その代わり妹と従者達には手を出さないで！」

そう言い私はフランを庇う。

すると彼女は

「別に取って喰う訳じゃないんだから。あなた達には宴会の準備を手伝ってもらいたいだけよ。」

宴会？！彼女は何を言っているのだろうか。

そんな疑問に答えたのはフランだった。

「幻想郷では異変を起こしても宴会を開いて水に流すのがルールなんですって！だから

一緒に準備しましょう！お姉様！」

…ああ、フランはなんていい子なんだろう。

そんな感傷に浸っていると

「いつかまた会えるよね狼のお姉さん。」

よく聞こえなかったがフランが何か言った。

「？フラン？」

「ん？なんでもないよお姉様！」

この子は私の想像よりもはるかに成長していくんだなあ

「おーい！お前らー！早く行こうぜ！」

《《side out》》

《《次の日の夜、博霊神社 宴会の席にて》》

《《side 霊夢》》

準備をし終わった私達は酒を飲んで騒ぎまくっていた。

しかし私は、あまり楽しめるような気持ちではなかった。

「よっ！霊夢！なにしかたつらしてんだよ！」

「別にそんな顔してないわよ！」

「聞いたぜ！お前私の心配をしてくれてたんだな！ありがとな！霊夢！」

「!!!」

「ゲホッ！ゲホッ！誰から聞いたのよ！」

「レミリアとパチュリーだか？」

私は二人の方を見た。



私の視線に気づいたのかしてやったと言うような顔でにやにやしていた。

……後で絞めてやろうか。

すると、なにやら落ち込んだ様子の文が入ってきた。

「なに文？まだ落ち込んでるの？」

「いえ、特ダネのことではないんです。可愛い後輩を誘おうとしたら私にも関わってないから行きませんって断られたんです……」

別に宴会は誰が来ても歓迎するのに……

「随分と真面目な子ね。」

「うくん、あの子あまり他人と関わりたくないって言うオーラを出してますからね。」

「なにそれ？どんな見た目の子？」

私は聞くと彼女は答えた。

「白狼天狗なんですけど、尻尾がモフモフしてて気持ちいいんですよ。あとちらつとしか見えなかったんですが、首すじになにやら入墨をしてるんですよ。昔ヤンチャでもしてたのかな？」

白「狼」天狗ねえ……

「まあ、来なかった物はしょうがない。新聞完成したので読んで見ますか？」

そう言い彼女は私に一部をくれ、みんなの所へ行った。

「おう！文！私にも一枚くれ。」

「わかりました！魔理沙さん！今度はちゃんと読んでくださいね！さもないとあなたの主食は虫って新聞に書きますよ。」

「…えっ?!」

そんな騒がしい皆を遠巻きに私は新聞に目を落とした。

大手がら！博霊の巫女またもや異変を解決！

「っ！」

そんな見出しに私は胸が締め付けられるような思いだった。

私はなにも出来なかったのに！

そんな私に背後から声をかけてきた者がいた。

「あら霊夢。こんばんはー。」

「…何よ紫。」

こいつは、八雲 紫。見ためは金髪で美少女だが、とても胡散臭いのである。実はこの幻想郷を創りあげた大妖怪の内の一人である。

「あなたもしかして一人で落ち込んでるの？」

「…別に。」

「そんなこと言っただって私にはお見通しよ。」

「ぐっ」

実は彼女、私の育て親の一人なのである。

「今回の異変を見てたけど。あんなレベルの異変はそうないわよ。それも今回きりだと思ってもいいくらい。」

「それでも私は！」

そう言おうとしたら、紫に口を塞がれた。

「はいはい！今は宴の席よ！あなたも楽しみましょう！」

そう言っただけで彼女は手をどけて、私にお酒をついだ。

「…ありがとう」

「うふふ。いいのよ。」

ん？今見てたって…

「あんた見てたのになんで手伝わなかったのよ！」

「もう、霊夢。そんなに怒らないで。」

「あんたね〜！」

そう彼女に威嚇すると、彼女はこう返した。

「私も色々調べたわ。」

「!どうだったの?」

「結論から言うとなにもわからなかったわ。」

私は転げそうになった。

「あのあと、あの青い宝石を探したわ。でも見つからなかった。」

それって…

「まさかまだ館の連中が隠し持ってるの?」

「それはないとハッキリ言えるわ。」

……なんでそんなことわかったのか、この際聴かないことにしよう。

「それからあの狼なんだけど。」

「あんた調べたの? 私約束したからあまり深入りする事はしたくないの。」

「まあ調べたけど結局無駄足に終わったわ。」

まさか、こいつですら手掛かりを掴めないなんて…

「式を使って探したんだけど、それでも見つからなかったわ。恐らく宝石もそいつが持ってる。」

「大丈夫なんでしょうね。」

「念のため、あの小悪魔って子も調べただけど…」

「あんた…程々にしときなさいよ。」

「こつちもダメだったわ。なかなか尻尾を見せなかったの。」

「すごいな、あの紫を欺くなんて。」

「やはりただ者ではない。」

「でも、近しい存在なら聞いたことあるわよ。」

「…何なの？」

「古の時代、私が生まれるよりもはるかに前の時代、ある一柱の魔神が世界を滅ぼそうとしたらしいの。その魔神は黒いもやのような物を出して大陸を引き裂いたって言う伝承よ。伝承といつても子供に読み聞かせるおとぎ話みたいな物だけけど。」

「ふーん。」

「私はあまり興味が無さそうに聞いていた。」

「でも、魔神ねえ…」

「紫はその魔神とやらに会ったことはあるの？」

「そう聞くと」

「私？ないわよ。そもそも、そんな怪物いてたのなら何か痕跡があるはずよ。多分あの

子の黒いもやも偶然よ。」

「そう……。」

大陸を裂いた魔神：もしいるのなら一度会ってみたいな

《 side out 》

【柩宅にて】

《 side 柩 》

ヘックシユツ！

珍しくくしやみをしたな。

さてと、文様から宴会のお誘いが会ったがフラン以外が知らない私が言っても場違いだろう。

それに、明日も仕事がある。今日は早く寝よう。

…その前に、

私はあの青い宝石を手に持った。

あの女神悪魔は人を不幸にする事が趣味なのだ。

理由なんてない。

ただただ、人が悲しむのが好きなのである

私は、一度ヤツの手に落ちた。だが次はない

必ず

お前を

殺す

そして私は宝石を砕いた。

その日、妖怪の山からすべての鳥が飛び立った。まるで何かを恐れるかのように…

《side out》

【存在しないはずのとある空間にて】

《side ????》

ああ、今回もお見事でした。我主！

まさかあの女神悪魔が手を出してくるだなんて！

見抜けなかった私にも責任があります！

だから自分への罰としてあなた様にお会いするのはまたの機会にしますわ。

そう言って彼女はまた左手の入墨をうつとりと眺めた。「VI」



## 二章・妖怪山反乱異変

## 10. 妖怪山反乱異変①

【妖怪の山本部にて】

「いやあ、実に惜しかった。」

とある天狗がそう言う。

「もしあの時、紅の館の勢力が勝てば我々天狗の幻想郷内での地位は上がったのになあ。」

「本当だなあ、大天狗様が奴等を倒して幻想郷の英雄になる。その功績で天魔を今の地位から蹴落とせる上にこの幻想郷での権力も鰻登り。そうすれば俺たちもうまい汁が吸えたつてのになあ。」

他の天狗達と同調する。

「いや、そうでなくともこれから大天狗様は天魔を今の地位から蹴落とそうと準備されているらしいぞ。」

一人の天狗がそう言う。

「とぅとぅ?」

「お前ら知らないのか？ある白狼天狗の能力を使って天魔を落とし入れようとしているらしい。」

「本当か？仮にそうだとしてもそいつは信用なるのか？」

「そうだけ。それに白狼天狗ごときにそんな大役が務まるとは思えんが。」

「信用するものにも、そいつは大天狗様の命令に逆らえない。逆らうと死ぬからな。とある古の禁術らしい。そいつの能力については教えてもらえなかった。」

「ああ、例のあの禁術か。正直あんまり信用ならんが…その白狼天狗の名は？」

「ああ、天星 社ってヤツだが。知ってるかお前ら？」

「ああ！あいつか！結構な美人だよな。すべてが終わったらそいつを俺たちにくれないか聞いて見ようぜ。」

「いい考えだ！」

そう天狗達は下卑たことを言い出した。

「おっとこの会話を聞かれたらまずいな。」

「そうだな。」

そうやって天狗達は笑い始めた。

とある白狼天狗の男に聞かれている事も知らずに。

「まさか！あいつがそんな！」

その白狼天狗はあまりにも純粹で正義感に溢れていたが、どうすればいいか思い悩むことになる。

《side out》

《数日後》

【妖怪の山哨戒任務集合場所にて】

《side 牙》

ああ、俺はどうすればいい。

「……様。」

あいつとはガキの時からの付き合いだ。

「……ば様！」

思えば、最近になって妙に大天狗に呼ばれていた。あいつは俺よりはるかに優秀だと

は思ってたんだが。

「牙様!!」

「おっおう!?!」

俺は声をかけられていたことに気づく。

「どうされたのですか? ぼうつとして、あなたらしくない。」

彼女は、犬走 椀。俺の後輩でよく任務で一緒になる。俺は彼女に一人前になっても  
らいたくいつも厳しい態度をとっている。

「なんでもない。すまないな…。」

いつも厳しく接している先輩がこうでは説得力がないな…

「何か悩み事ですか? 解決できる保証はありませんが、他人に打ち明ける事で気分が晴  
れる事もあります。私で良ければ聞きますよ。」

彼女はそういったが、そんな事に彼女を巻き込む訳には行かない。

「悩みなんてないぞ! そつそうだな! 最近読んでいる本が面白くて夜遅くまで読んでし  
まった! いやあ俺としたことが!」

彼女を騙すようにで悪いがいた仕方ない。

「そうですねが…。」

まだ少し疑いの目で見えていたが、これ以上は聞いてこない。

俺はひとまずホツとした。

この日俺は妖怪の山に迷いこんだ人間を5人も見逃すという大失敗をした。

《side out》

《side 権》

信じられない！

あのむちやくちや厳しい牙様があんなミスを犯すなんて！

思えばここ数日、彼はずっと上の空だった。

いつからだったか…

そうだ！紅い霧の異変が解決したという報告のために呼び出しされてからだったと思う。

これは何かあるぞ！っていうかこれ以上こんなミスされたら困る。連帯責任で私まで罰を食らうんだぞ！このままではいけない。

うくん、どうしたものか…。

## 11. 妖怪山反乱異変②

《side 椀》

私は、今夜道を歩いている。あれから結局、牙様は罰として減給を食らった。運が良  
いことに私はお咎めなしだ。

それでも、ずっとこの現状が続くのはまずい。

そう思い悩んでいた時、私は誰かが倒れているのを見つけた。

「大丈夫ですか!？」

声をかけた私は驚いた。なぜなら…

「牙様…!？」

そこで倒れていたのは、私の悩みの種である風間 牙様だったのだ。

「…酒臭い。」

小声で私はそう言いながら彼を担いで家に帰った。

【犬走家にて】

担いで帰ったのは良い物の、この部屋のアルコール類を赤の他人の男性に見せるのは  
まずい。これではあらぬ誤解を生んでしまう。

…あいつめ!

牙様が眠っている間に隠してしまおう。幸い明日は二人とも休みだ。じっくり彼に訳を聞こう。

「次の日」

「う〜ん。」

どうやら起きたみたいだ。昨日は寝ずに彼が起きるのを待つてたからな。

「おはようございます。」

そう言つて私は彼に水をあげた。

「…おはよう。」

寝ぼけているのか、はたまた気づいているのか彼はいけしやあしやあと返事をし、水を飲んだ。

……別に寝てなかったからってイラついてる訳じゃないぞ。

「ん?…ん?…ん?…ん?!!!」

どうやら前者のようだった。コップと私を何度も見比べて最後には驚いて声を出していた。

「な、な、な、なんで?!お、お前が俺の家に?!?!」

……

「ここは私の家です。昨日の事を覚えていないようなので説明いたします。私が昨日の夜、帰路についている途中恐らくお酒を大量に飲んだあなたが倒れているのを発見しました。私はあなたの家を知らないなので私の家に連れてきた所存です。」

そう説明すると彼は

「そうか、本当に申し訳ない。この仮は後日返させてもらう。それではさらばだ。」

そう言い彼は出ていこうとする。

「ちよつとちよつと!待つてください!あなたが深酒するだなんて絶対おかしいです!それに今回のミスも何か不自然です!これ以上何かあつてはまずいので私に包み隠さずすべてを打ち明けてください!」

「だからなにもないといっているだろう!しつこいぞ犬走!」



…このガキは何を言っているのだろうか…

「いい加減にしろ!!!」

思わず怒鳴ってしまった…

ついでに魔力も少し漏れてしまった…

…別寝れなかったから怒ってる訳じゃないぞ。

私の剣幕に驚いたのか、はたまた私の魔力にあてられたのかどうやら牙様は腰を抜かしてしまったらしい。

そ、そんなにびっくりする事じゃないのに。

「…コホン、まあゆっくりでいいので話しをしましょう。立てますか?」

そうやって私は彼に手をさしのべる。

「お、おう。ありがとう。」

〔数分後〕

…さつきからずつと彼は黙っているが、まあ辛抱強く待とう。

「お前を巻き込んでもいい内容かわからない。いや実際はわかりきっている事なんだから…」

ようやく彼は口を開いた。

「構いません。ですのでゆつくりと話してください。」

そうして彼はとんでもない事実を話し始めた。

「結論から言うと、大天狗がクーデターを起こそうとしている可能性がある。」

「！本当ですか？！」

「実際はどうかわからないがこの間の集会でその情報を聞いた。」

なんでも偶然聞いたそうさ。しかしそれなら…

「それなら、天魔様に報告はできないのですか？」

私がそう提案する。

「いや、どうやら大天狗には配下が大勢いるらしい。天魔様にお会いする前に奴等に目をつけられるかもしれない。それに奴等の話では、とある白狼天狗が逆らえずにしたがっているらしい。」

白狼天狗？それほど厄介な相手なのか？

「して、それはどなたなのですか？」

「それは…天星だ。」

……………は？

「そうなんですか?!」

これはさすがに驚いた。まさかあの方が…

いや、しかしまだ疑問が残っている。

「彼女が支配されているのはわかりました。それが何故天魔様に報告ができない理由になるんですか？」

「俺とあいつは同期だ。そのお陰であいつの能力を知っている。」

…うん

今日は驚かされてばかりだな。まさか彼と天星様が同期だったとは…

それと天星様の能力か…確かに聞いた事がないな。

「どんな能力なのですか？」

「それは…認識を合理化する程度の能力だ。」

……なるほど、なかなかむちゃくちゃな能力だな。

確かにその能力さえあればやりたい放題だ。

「…そうですか…」

他には何か情報はありますか？」

そう聞くと

「他に情報…何か禁術を使っていると聞いた。」

禁術？

「かけられた者が術者に逆らうと死ぬらしい。」

…うん、なんでそれを早く言わない。

あの人なら天魔様に直接報告できると思ったが、天星様の能力によって天魔様も曝露されている可能性が高い。

「そうですか。なら私も調べるとします。」

そう言うと彼はひどく驚いたようだった。

「いや、お前がそんなことをする必要はない。さつきはお前の迫力に気圧されてつい話してしまったがこの件には関わるな！それに証拠もないんだぞ！」

……

私は彼の両肩にそつと手を置き満面の笑みでこういった。

「うるさい」

…別に寝れなかったから怒ってる訳じゃないぞ。

彼が言っていた禁術、あれは私達<sup>が</sup>作ってしまった物に似ている。

偶然だとは思うがあれは生命を冒流する物に他ならない。私はそれを破壊しなければならぬ。例えそれが私達の作り出した物とは別の物であつても。

それこそ私が犯した罪の償いの一つだと思つている。

そうして私は首すじの入墨をさすつた。

「I」

## 12. 妖怪山反乱異変③

「数日後」

《side 椛》

あれから私達はそれぞれ大天狗について調べた。牙様は能力を使い大天狗の部下の話を盗み聞きし、私はある方法で調べた。

〈偽罪「銀幻狼」<sup>PHOUKA</sup>〉

私が出す瘴気を無数の狼に変身させる技だ。

この狼達が聞いた音は直接私に届くと言う仕組みとなっている。狼自身を透明化することもできる。

一つ弱点を挙げるのであれば、

この狼、出せば出すほど操作が難しくなる。だから私は数匹の狼を直接コントロールし他の大多数の狼には大雑把な命令をぐたす事がある。

前回フランの件でもこの方法で挑んだ。

そして狼達を使って色々な情報を集めたが…

知れば知るほど大天狗がどれだけでもない奴か見えてくる。様をつけていたのが恥ずかしくなってくる。

まずこいつは仕事を殆ど部下に任せる。そのくせその部下が少しでも失敗すると全責任をその部下に押し付ける。

仮に部下が何か功績を残しても全て自分の物にしてしまう。しかし奴はかなりの強引な方法でそれらをやっているが天魔様にもばれず部下に慕われ続けている。

それは天星様の能力によるものだ。

：思い返して見れば確かに彼女は大天狗の仕事を代わりに行っている事が多く、この間も報告の仕事を押し付けられていた。その時誰も違和感を持たなかったのは彼女の能力のお陰だろう。

：私はおかしいと思っていたがあまり気にしなかったが

話を戻そう。問題はこのあとの情報にある。どうやら牙様の言っていたことは本当だったのだ。

そして禁術だ。天星様に施してある術、偶然だと思っていたが違った。

間違いないあれは、私達を作り出した忌まわしい術式へ心喰らいである。

その術は術者が逆らったと思った時、任意で発動が可能であり、一度発動すると生命活動に必要な重要器官を破壊しつくすと言う代物だ。



奴はどこで手に入れたか分からないが私達が作り出した禁術について書かれている本を持っている。

一度、狼で盗もうとしたが、どうやら本の位置が分かるように妖術をかけてある。

これは許せる物ではない。

その術を作り出した一人である私が言うのはお門違いかもしれない。

だが、自分の過ちを償うのは間違いいではないだろう？

全てが終わったあと私はこの事実を彼らに話さなければならぬ。例え恨まれようとも。

《side out》

《side 牙》

あれから数日後、俺は犬走に呼ばれた。

「牙様、情報が揃いました。あなたの言う通り天魔様に報告するのはあまりにも危険です。」

「!やはりそうか。」

俺は悔しそうに言う。

「しかし、方法がないわけではありません。」

「なんだと!？」

「天星様をどうにかすればこちらの物です。どうやら術式についての本があるようです。」

「本当か!? どうすれば!」

「まず明日は有給を取りましょう。それから大天狗屋敷に忍び込み天星様の解放と決定的な証拠の収集をしましょう。」

ならば!

「ならば俺一人で行こう。これ以上お前を巻き込む訳には行かない。」

「いいえ、私も行かなくてはなりません。」

「何を言ってる!?!」

「今はまだ事情を言えませんが私は行かなくてはならないです。」

「…そうか。」

すると彼女は…

「…これ以上話すと誰かに聞かれるかもしれません。それでは。」

そう言い去っていった。

《side out》

## 13. 妖怪山反乱異変④

「夜」

《side 牙》

今我々は天狗屋敷の裏手にいる。

「いつまでもここにいてはらちが明きません。早速いきましょう。」

犬走がそう言う。

なんて頼もしい後輩なのだろう…

そして俺たちは屋敷のなかに入っていった。

【屋敷内部にて】

中に入った物の、敵があまりにも多すぎる。

「役割分担をしましょう。調べたところ天星様がかけられている術はかけられた者が戦闘不能に陥らなければ解くことができせん。つまり派手にばれると言うことです。」

「！俺が行く！」

「よろしいのですね？」

犬走にそんな危険なことをさせる訳には行かない。

「戦って勝利したらなりふり構わず彼女を連れて私の家に逃げてください。」

「私は証拠を集めて参ります。ではご武運を！」

《《side out》》

《《side 椀》》

任意に発動出来ると言ったがああ術はそんなにすぐに被術者を殺められる物ではない。

被術者が術者に明確な裏切りの意思がなければ発動しない。

ならば天星様を気絶させればいい。

この術は私達で作ったが担当していた私の部下の一人が術に手を加えた。恐らく大天狗はこの事を知るよしもない。

彼女がそうしなければ私は堕ちるところまで堕ちていたかもしれない。

彼女は身を呈して私を正気に戻した。彼女が死んだのは間違いなく私のせいだ。あいつのためにもあの本を回収しなければならぬ。

私は右肩に「IV」の入墨を刻んだ人間の少女の最後の笑顔天才魔術師を思い浮かべた。

《《side out》》

《《side 天星 社》》

「お前はもうすぐ俺たちの物になるんだよ！」

目の前の天狗がそう言い下卑た視線を私に向けた。

私は小心者だ。自らが死ぬのが怖く大天狗の言いなりになっている。私は誰かが私を救ってくれるのを待っていた。そんな奴は一人たりともいないのに…

「ぐげっ?!」

目の前の天狗が吹っ飛んで言った。

「社!!! お前を救いにきた!!!」

馬鹿者…

「もう私はおしまいなんだよー」

そう言い私は白狼剣を抜き相手に向けた。

懐かしい幼なじみに…

《《 side out 》》

《《 side 牙 》》

見つけた!

お前の苦しみずっと気づかなかったのは俺だ!!

任務で何度も一緒だったのに!

だがもうこれ以上は苦しませない!

そのためにもお前に勝ってお前を救う!

そう俺は決意し拳を構えた。

《side out》

《side ???》

全て私の不始末ね：

あの方を救うと意気込んでいたのに情けない。

あなたがこんなに苦しんでいるのにごめんなさいね。

でもあと少しの辛抱よ。

そう言い肩に入墨をしてある少女の魂は社の頬を撫でる。勿論社はその事に気づかない。「IV」

## 14・妖怪山反乱異変⑤

《side 牙》

恐らく攻撃のタイミングは同時だった。

しかし向こうの方が何枚も上手だった。俺の拳を剣で促し蹴りをいれてきた。もろに食らった俺は後ろの壁まで吹っ飛びそのまま壁にめり込んだ。

「グハッ!!」

メキメキと言う木の壁にめり込む音とともに大量の血を吐いた。

俺の意識が一瞬薄れる。しかしここで勝たなければ後がない! そう思い俺は意識を強く持った。

そして…

「うおおおおおおお!!」

自分の気を引き締めるために俺は叫んだ。

全神経を足に集中させ力を込める。

物の一瞬で距離を詰め、勢いそのまま拳をぶつけようとする。

ガキイイイイン!!

社は剣で受け止める。

占めた!この勢いなら社も受けきる事ができないは…

「ガツ?!?」

上から衝撃を食らった。

「お前が、お前が私に勝てる分けないだろう!!」

社がうつ伏せに倒れている俺に叫ぶ。

…確かにそうだ。俺は一度たりとも社に勝利したことがない。ほんの一度たりとも  
な…

「だが!!それがどうした!!!!例え一度たりとも勝てなかったとしてもお前に今!勝負を挑  
まなければ俺は後の人生後悔の念と向き合わなければならぬ!だから負けようが勝  
つために戦う!」

俺はそう叫び返しながら立ち上がろうとする。

「むちやくちやだよ牙は…言ってることがめちやくちやだ。でもずっとそのめちやく  
ちやな理論が好きだった。」

そう言い彼女は微笑み、剣を振り上げた。



血が大量に滴り落ちる。

しかし俺からではない。

社の頸動脈からだった。

社が俺に倒れこむが、すかさず俺は彼女を抱き抱えるように受け止める。

「ああ…ああ…うああああああ!!!」

俺は絶叫する。

「なんで、なんでなんだよ!」

俺は社に聞く。

彼女は弱々しい声で返した。

「最初からこうすべきだった。私は小心者だ。最初からこうすればお前を傷つけずにすんだのに……」

「まだ……まだだ！まだ間に合う！」

「私を……助けて……くれ……て……ありがとう。」

「やめろおおおおおおお!!」

再び俺は絶叫する。

「こんな……こんなこと……あんな……」

社が何をした。なんでこいつがこんな目に会わなければいけない！

そんな後悔の念に苛まれている俺に声が届く。

『あの……』

「……誰だ……」

俺は社をかばうように抱き抱えながら問いただす。

『今は時間ありません！ですが私なら社さんを救えます！』

何をいつているんだ？

一瞬俺は理解が出来なかった。

社を救うだって？そんな事ができるのか？どうやって？

いくつもの疑問が頭をよぎった。

『では、行きます!』

俺が返事をする前に光の玉が出現し社の中に吸い込まれていった。

「社!?!お前社に何をした!!」

俺が問いたさすがなにも返ってこない。そこにあるのは不自然な静寂だった。あれだけ派手に暴れたのに誰一人様子を見に来ない。

## 15. 妖怪山反乱異変⑥

《side 椀》

牙様と別れた私は大天狗の不祥事に関する証拠を集めていた。まあではでは、闇取引から賄賂まで暗殺の証拠すらある。

「急げ！あちらから大きな音がしたぞ！」

大天狗の部下が大勢大きな音のした方に向かっていった。どうやら牙様と社様が戦っていることがばれたようだ。

私は急いで例の本のある大天狗の部屋まで行った。

部屋の前まで来た私は気づいた。

…中にあるな。

部屋の中から八つの人型の生き物がいる。そのなかで一体特に強い気配を感じる。恐らくそいつが大天狗だろう。しかしどこか不自然な力の大きさだ。まるでどこから取って付けたような感じだ。

私達が作った禁術ではないようだが…

私は障子を勢いよく開け中に入った。すると先程開けた障子が勢いよく閉じた。

そんな中、私は七人の烏天狗に囲まれた。

そして、一人の偉そうな烏天狗がゆっくりと拍手しながら嫌らしい笑で近づいてきた。

「おやおや、誰かきたと思つたが白狼天狗の小娘ではないか。」

大天狗がそんな事を言つていたが私は机の上においてある魔書「omnino m i c o n」に目を配つた。

それは私の大事な12人の配下の一人、人間であつたが「世界の真理を知る程度の能力」を持った天才魔術師のエルマ・ファウストによつて書き上げられた魔書。彼女の能力を用いて彼女自身が知り編み出した全ての魔術が書かれた書。

あれは人を不幸する物ではない。全ての発展のために存在する物だ。しかし私の手に余る。私が殺した彼女のためにも、いつかあの本を正しく使える者が出てくるまで封印しなければならぬ。

「白狼天狗の分際で俺を無視するとは！後で後悔させてやる！」

自分の発言を見下しているやつに無視されるのが気に入らなかつたのか突然怒りだした。

「まあいい、誰に命令されてここにきた。お前ともう一人の白狼天狗が俺を嗅ぎ回つてゐることはもうすでに知つてゐるからな。しかし問題は誰が首謀者なのか、白狼天狗ご

ときにそんな計画は出来ないからな。」

…こいつ、やたらと白狼天狗を見下してくるな。

「首謀者なんていませんよ。私達の目的は天星 社様の解放とついでにあなたの反乱の証明ですよ。」

私は敬語で答えた。

すると、奴は突然笑いだしこういった。

「あの白狼天狗の解放だと！面白！まるで獣畜生のような仲間意識だな！あんなクズのためにわざわざ自殺しに来たと言うのか！」

そんなことを言う奴に私は一言こう返した。

「あなたよりはましだと思いますけど。」

案の定と言うかなんと言うか…

「なんだと!!!」

怒り出してしまったようだ。

「下手に出ていれば！生かして私の慰み物にしてやろうと思っていたがもう許さない!! 気がすむまでいたぶってぶち殺してやる!!」

…見下している白狼天狗にまでそんな目で見ていいのか。いよいよ救いようがないな。

「ふっふん！まあいい殺す前に教えてやるよ！」

そういつて聞いてもいない、恐らくこいつに取つてとても重要なことを話し出した。

「俺は、前天魔の息子でとても偉い。だから俺が妖怪の山、いや幻想郷の頂点に立つべきである！そのためにも今の天魔を失脚させる！」

……はっ？

うすうす思つてはいたが……

こいつ、馬鹿だな。

あまりにも馬鹿な事を言うものだから驚いた私の表情がどうやらこいつに取つては畏怖の表情に見えたようだ。

「どうだ！素晴らしい判断だろう！」

いいえ全く

「俺見たいな奴はそういない！」

ええ、あなた程馬鹿な奴は他に見たことありません。

「まあ、俺は今気分がいい。冥土の土産にお前の知りたいことを教えてやろう。」

ならば……

「その後ろの本どこで手に入れたんですか？」

私は聞く。

「これか？これはな、俺の部下が珍しいものとして俺に献上したものだ。どうやら忘れ去られて幻想郷に来たらしい。」

忘れ去られた？私はカウントされてないのか？失礼だな！

まあそんな冗談はおいといて、実はあの魔書私とエルマ以外は存在を知らない。創作者のエルマはすでに死んでいる。しかし幻想郷にいる私は恐らくカウントされていない。だから忘れ去られたと言う判定になっていると私は仮説を立てる。

すると奴はこう言ってきた。

「この本の創作者はほんとに馬鹿だな！」

……………は？

「こんなに禁術を作り出しているくせに、最後になんて書いていると思う？」

……

「全ての世界の平和を願ってだってよ！」

「俺だったらこの力を持って世界を俺の物にするけどな！ハッハッハッハ！」

「…れよ」

「え？何だって？」



「黙れ  
!!!!!!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!

もう怒りが抑えられない!

こいつは

『……様!』

あいつを!

『私はあなたを愛しています!!』

エルマを!

『生き……て……くだ……さ……い』

侮辱した!!

溢れだした魔力に当てられ数名の大天狗の部下は気を失い。等の本人は腰が抜け座

り込んでいた。

無意識のうちにあふれでた魔力をこれも無意識のうちに瘴気に変化した。あまりの量に瘴気が天井を突き破り夜空を飲み込んだ。

このとき一瞬、大天狗は椀を白狼天狗ではなく禍禍しい狼の何かと錯覚した。

## 16. 妖怪山反乱異変⑦

〔社の深層意識内部〕

《side 社》

私は小さい時に両親をなくした。その後親戚に引き取られたが能力がわかるや否や私を化け物扱いした。しかしそんな中、牙だけはずっと私の味方でいてくれた。彼は私の両親が生きていた頃からの幼なじみである。

少し不器用だが人一倍正義感があるのがあいつの長所だ。幼い頃の私はそんな彼に惹かれた。

しかしある日、私の能力に目をつけた大天狗が親戚に言い値で私を買おうと言ってきた。案の定、私を厄介扱いしなかった親戚はその取引に応じた。その後大天狗は私の体に何かを刻み込んだ。曰く古の禁術らしい。どんな禁術かは、本能的に理解できた。このとき私は全てに絶望しもう自身は終わりだと思った。

そんな中、私は大天狗達に暗殺術等を叩き込まれた。そのお陰で並の白狼天狗では、私には勝てないほどの実力を手にいれた。牙でさえ私には勝てない。何度か合同訓練に参加してもいいと言う許可が出た。その度に牙が私の組み手相手になってくれる。

当然私には勝てない。しかし彼は諦めず必死に訓練をしていた。

ああ、こいつは昔から変わってないんだな。

私は嬉しく思いながらも、彼を裏切っているような感覚で罪悪感にさいなまれていた。

こいつに：

こいつにだけは：

知られて欲しくない：

心からそう思った。

しかし、現実には厳しかった。彼は私の境遇を知ってしまった。それだけではない。私達の共通の後輩である犬走にも知られてしまった。

彼女はとても不思議な子だ。私や牙がどれだけ厳しく指導しようが文句ひとつ言わずに従う。それも完璧なほどに。そして彼女を調べたがなにも出てこなかった。

そう：

どこから来たかと言う情報さえも

私は少し不自然に思いながらも彼女を後輩として厳しく接していた。

厳しかったからと言って嫌いと言うわけではなかった。むしろ気に入っていた。

そんな、私に取って大切な二人に全て気づかれた。大天狗からは我々に歯向かう者は殺せと命令があったがこの二人を殺す位なら自分が死んだ方がましだ。

…これで良かったんだ。

『本当にそうですか?』

?!?!

誰だ!

『私はエルマ・ファウスト。とある魔神の配下にして、あなたに刻まれた禁術を作った魔術師です。』

私の目の前にローブを着た、黒髪の紫色のインナーカラーの入った私よりも背の低い少女が現れた。

そうかお前が、お前のせいだ!

私は驚きよりも先に怒りが出てきた。

私はとつさに彼女に飛びかかり押し倒した。

『全て私の責任です。私は発展のためと吟いながら自分の知識欲のためにあの本を作ってしまいました。』

ああそうだ! お前があんなものさえ作らなければ!

私は！私は…私は…は！

『ええそうです。私のせいであなたに訪れるはずの幸せは全て消えてしまいました。』

…

『今更勝手かもしれませんが、私に罪滅ぼしをさせてください！』

…今更何をするつもりだ。

私は彼女に聞き返す。

『私の持つている知識と能力、魔力、そしてあの本をあなたに差し上げます。』

そう言い彼女は私の頭に手をかざした。

すると私の頭に何かが流れ込んでくるような感覚がした。

『今あなたに私の世界の真理を知る程度の能力を譲渡するついでに魔術耐性を付与しな  
おかつあなたに刻まれた禁術を消しています。副作用で私の全ての記憶を見ることにな  
りますが…』

…ああ、お前も苦労していたんだな。

『あなた程ではありませんよ。』

そう微笑み掛けてくる。

彼女は私ににている。遙か前に人間として生を受けたが、能力の存在のため家族から  
気味悪がられていた。そして彼女が忠誠を誓うことになる、魔神に拾われた。私と違う

ところはここからだ。彼女はその魔神を恨むようなことはせず、それどころかその魔神を改心させようとした。結果的に成功したが彼女は命を落としてしまった。身を呈して魔神をかばった彼女が、ついに魔神の心を動かしたのだ。それに加え後の発展のために全てを書き記した本を作ったのだ。

私とは大違いだ：

『あなたはまだ間に合います！あなたを愛してくれる存在がいる限りあなたは終わりではありません。それに例え道を踏み外したとしても私の主人があなたを止めてくれるはずです。』

お前の主人？

私が聞こうとしたその時最後の記憶が流れてきた。

!!?!?  
え!?

お前の主人って！

『はい！今は貴女の後輩です。』

そうなのか…

『私はあなたに幸せになってほしいのと同じで彼女と仲良くしてあげてください！ああ見えて寂しがり屋さんなんですよ。』

…ああ！わかった約束する。

そういった私の右肩に「IV」の文字が浮かび上がった。

《side out》

【大天狗屋敷一室にて】

《side 牙》

どうなっているんだ?!

俺は社を抱き抱えながら驚愕していた。

社の傷が消えていくのだ。

「ん…ん…」

そんな俺の反応をよそに社は目を覚ました。

「社！」

「すまない牙。お前に迷惑かけてしまった。」

「お前はなにも悪くない！悪いのは大天狗だ！」

「それでもだ。それとありがとう。」

「本当に良かった。」

俺がそう安堵していると社は俺に手をかざしてきた。暖かな光とともに俺の傷が



治っていった。

「お前！そんなことができたのか?!」

俺が聞くと…

「とあるお人好しの魔術師が私に世界の真理を教えてくれた。」

彼女の発言に理解しかねると、彼女は突然

「さて、例の本を回収するか。」

パチン！

彼女が指を鳴らしたかと思うと彼女の目の前に突然本が出現した。

「うまくいったようだな。これが魔術か。」

「な、何をしたんだ!?!」

「ん?!秘密!」

そう言い目くばせをした彼女に何故かドキツとした。

「と、所でその本は?!」

そう聞くと…

「この本は全ての発展の為の本だ。悪用した大天狗には天罰が下るだろう。」

良かった。これでもう私の未練はもうないわ。  
社さん！あとは頼みましたよ！  
そう言い彼女は天に召された。

## 17. 妖怪山反乱異変⑧

《side 棍》

「く、来るな!!」

大天狗がそう叫ぶ。しかし私は無視する。

ミシ

「お、お前達いけ!」

大天狗の部下達が突っ込んでくる。

グウオン!!

右腕に瘴気を集中させ巨大なそして漆黒の腕に形成し大天狗の部下達をまとめてなぎ倒す。

「そ、そんな……」

大天狗が何かいっているが気にしない。

ミシ

「そ、そうだ！お前のほしいものを全てやろう！さつき魔書の事を言っていたな！そ、それをやろう！」

私は口を開いた。

「あ？魔書ならもうないぞ。」

私の言葉に大天狗が振り向く。

「な、なんだと！」

まあ、その本は然るべき者の手に渡ったんだからな。

「クソクソクソクソ！！かくなる上は！」

そう言つて大天狗は、地面に何かを投げた。すると辺りに煙がまい。その混乱に乗じて大天狗は逃げた。

まあ、もう奴にはもうなにも出来ない。

にしても… 少しやり過ぎたかなあ。

よくよく考えると結構ヤバイかも… まあ良いか。

すると…

「犬走〜！犬走〜！どこだ〜！」

…まだ敵地のど真ん中だぞ。て言うか早く逃げろっていったよな？

「私はここです。なんでまだいるんですか？」

私は部屋から出る。

「！すっげえぶっ壊れてるな！何があつたんだ?!」

牙様は私の後ろに広がる惨状を見て驚きの声をあげた。

…もうさすがに誤魔化せないか。

私が口を開こうとしたとき。

「あまり詮索はやめようじゃないか牙。こうしてみんな無事だったのだから。」

意外にも口を開いたのは社様だった。すると社様は自らの右肩を指差し、そのあとに私に向かって4本の指を立てた。

あいつ、まだあの世にも行かずにこの世でフラフラしてたのか。

彼女はおもむろにこう言った。

「4番は私に自らの全てをくれた。何もかもをな。だからお前が気に病むことはない。このまま生活を続けてくれ。」

私はこう返した。

「そうですか。ありがとうございます。」

牙様だけが、話に着いていけてないのか私達を困惑した表情で見る。

「あ、そうだ！証拠を天魔様の所に持って行かないと！」

「その必要はない！」

突如、辺りに凜とした声が響く。

…おやおや、おいでなすった。

この山の長が…

「て、天魔様!？」

牙様は突然の事に驚いている。

そして向いた方向には数人の部下を連れた。黒髪のどことなく文様にている美女がたっていた。

「何、驚く事はない。我々上層部にかけられた暗示が消えたのだからな。」

「ツ!!」

その言葉に社様は身構えた。

天魔様は社様の前まで行きそして：

「すまなかつた。」

頭を下げたのである。

「て、天魔様?!」

さすがの社様も驚きを隠せなかつたようだ。

「私が奴をなんとかしていたらお前達をこんな苦しませる事はなかつた。許せとは言わない、だが謝らせてほしい。」

自分の非はしっかり認める。

なんて出来た上司なのだろう。

「さて、風間 牙、ならびに天星 社。お前達を二階級あげてをここに決定する。」

おお！良かった良かった！

「ちよつと待つてください！犬走は？犬走には何も無いのですか？今回の作戦、全て犬走が考えたようなものです！それなのに……！」

余計な事を！私は静かに暮らしたいんだ！目立つのは御免被る！

「その事なんだが……」

「いえ！お言葉ですが私の作戦は安直なもので誰でも考えられたものです！それに結局

「私は何もできませんでした!」

うん!これで行けるかな!

「ほう、何もできなかったねえ。」

そう彼女は私の後ろを除きこんだ。別に何も…。

……………あ。

そこには私が怒りのあまり吹き飛ばした大天狗の部下達が転がっていた。どうやらまだ生きているようだが…。

やっちゃまった

「それに、証拠はお前が集めたんだろう。ありがたく受けとるとするよ。」

そう言つてニヤニヤと笑いだした。

うん、この人は間違いなく文様の母親だ。

「犬走 椛。大天狗の屋敷への突入作戦の考案、及び証拠の収集。その功績を讃えて四階級昇級とする!」

ウワアーアーアー!!

私のほのぼの隠居生活が〜!

「良かったな!犬走!」



牙様、うるさい。

「お前の場合階級が4つ上がった暗いじやまだ低いほう何だかな。」

この天魔様なんで私の階級を知っているのだろう？

「文がいつもお前の事を話していたぞ！」

案の定と言うかなんと言うか…。

「因みに大天狗は勿論指名手配をする。」

まあ、あとはなんとかしてくれるだろう。そう言つて解散となつた。

【椀宅にて】

「それで、社様。どこまでついてくるのですか？」

私はおもむろに彼女に聞く。

「話が終わったら帰るから。」

「はあ、とりあえず上がってください。」

そう言つて私は彼女を家の中まで迎え入れた。

「これは!? うん、私には人の趣味をとやかくいう資格はないが…」

聞いているか弟よ。お前の嫌がら、ついに本領発揮だぞ!

「弟が送ってくるんです。一本どうですか?」

「いや、いい。」

「本題に入ろう。今回私は一度死んだ。」

「そうですか。」

「しかし、エルマ氏によってよみがえった。」

「それで?」

「その時、彼女の能力、知識、そして記憶を受け継いだ。」

「…そこまで知って私を侮蔑しないのか?」

私は口調を戻した。

「ああ、しない私は君を悪いとは思っていない。」

「そうか。」

「そして万が一君が道を踏み外したのなら、私は君を止める。先輩として。」

「…そうですか。これからもよろしくお願いいたします。先輩。」

今の私には私を止めてくれる遥か年下の先輩がいる。その事実だけでも私はとても幸せなのだろう。

《side out》

《side 大天狗》

なんなんだ!?あの化け物は??!

今俺はうつそうとした森を駆け回っている。

クソ!惨めだ!!何故俺様はこんな目に!

次の瞬間、後ろから何か得たいの知れない気配がした。さっきの白狼天狗とはまた違う気配!

俺はその恐怖に動けないでいた。

「あらあら、この程度の殺気で動けなくなるとは…情けないわね。」

後ろから揺つたりとした女の声が聞こえた。

「お、俺を殺すのか?」

俺はその何かに問う。

「愚問ね、当たり前じゃないの。ウフフフ!」

何がおかしいのかそれは笑っている。

「頼む命だけは助けてくれ。」

「もーまったく。」

後ろから何か近づいてくる気配を感じた。そいつは俺の耳元で

「だーめ」

ひどく不自然なほど甘ったるい声が俺の耳を襲う。気を抜くと魂ごと持ってかれそうなほどだ。

「じゃあね、バイバイ。」

死んでたまる?!?!?

ぐちゃ

《side out》

こんな下賤な輩はあなた様が手を下す価値はありません。

あなた様に仇なすものは私が排除しますわ！ウフフフアハハハハ  
そう言って左手の平に「VI」の入墨をほった彼女は存在しないはずの空間で躍り狂う。

## 18. 妖怪山反乱異変⑨

〔本部にて〕

《side 椀》

「大天狗が死亡した。」

我々三人は、あの事件以降大天狗の情報を聞かなかったが、天魔様の呼び出しで本部に向かった。

すると、彼女から直々に大天狗についての報告を聞くことになる。

「それは本当ですか?!」

最初に口を開いたのは牙様だった。

「ああ、死体はとてもひどい状態だったよ。まるで正面と背後から同時に壁に潰されたようだった。」

……ほう。

「犯人の目星はついているのですか。」

社様が落ち着き払った声で聞く。

「いや、それがまったくと言っていいほど手掛かりがなかった。」

「そうですか。」

そこで私は聞く。

「現場にいったときに何か違和感とか感じましたか？」

「?うくん… あ! そういえば検証に行った天狗達から現場で平衡感覚が失われたと言っていたな、暫くするとそれもなくなったようだが…。」

ふむ、成る程。

「まあ、とりあえず報告は以上だ。これからも操作を続けて行くが改めてお前達には感謝する。」

そう言つて私達は本部を出た。

【その日の夜、宴会の席にて】

まあこれも異変ということになるのか…

今私達は妖怪の山の住人で宴会を開いている。

牙様と社様は色んな天狗やら河童やらに囲まれているが、私は端っこで一人ちまちまとお酒を飲んでいた。

私の意思を尊重してくれたのか天魔様は、私の功績を大々的には発表しなかった。いや、有難い。

「椀〜!」

おや?にとりがきた。その後ろには、この山では有名な厄神様がいた。

厄神様

厄を溜め込み、そしてその厄が人に戻らないようにする。年に一度厄を洗い流すことで有名な神なのである。

一部の天狗からは嫌われているが彼女を慕う者も多いという。

立派な人だなあ

「楽しんでるかい? そうだ紹介するよ彼女は鍵山 雛。知つてると思うが厄神様さ。よく私のラボに遊びにくるんだよ。」

へえにとりと仲がいいのか

すると彼女は私に近づいてきたが何かに気づいたのか突然止まり震えだした。

……やっぱり神のクラスになると私の魔力を感じとるのか。

私は彼女に手を差し出し

「初めまして! 犬走 椛といいます! 実はファンなんです! ぜひとも握手してください

!?!?!?!

うそは言っていないぞ。私は本当に彼女のやっている人助けなどに憧れているんだ。

「え、ええ! よ、よろしく!」



すると彼女は笑顔を顔に浮かべた。

よ、良かった。元気になつてくれたみたい。

「そうだったの?! 知らなかったよ権!」

にとりが驚きの声をあげる。

「そうだ! この際二人とも仲良くなつてよ! 私はどこか別の場所に行くからさ!」

そう、にとりは屈託のない笑顔を見せ他の河童の所へ行つた。

……どうしようか。

「そのく何か飲みたいものはありますか? 取つてきますよ!」

私はそう彼女に聞く。

「いえ! そ、そんなことあなたに頼めません!」

お、おう。ひどく焦っている様子だ。

「あのく私はなにもするつもりはないので、そのくあまり怖がらないでください。平和が第一です!」

どうだ?

「! 分かりました。」

少し落ち着いたみたいだ。

「にとりとはいつ知り合っただんですか？」

まずはにとりの事に着いて聞こう。

「…結構昔だったんですけど、当時私は厄神ということもあって色んな人から苛められていたんです。」

「そんなある日、偶然にとりが私を見つけてくれたんですよ！そしていじめてくる人を追い払って私を助けてくれたんです！」

にとりさん、マジでかっこいい！

「そこから始まりでした。あなたはいつからですか？」

そうだな。

「私が初めて会ったのは五年位前だったかな？確かあの時彼女は何か探し物をしていました。それで私は彼女の探し物を手伝ったんですが結局見つからないままだったんですよ。まあそんな事があったんでよく話をしたんです。そしたら共通の趣味が合ったんですよ！」

「ほう、その趣味とは？」

「将棋です。」

「本当ですか?!私もよくにとりとよく指してます！今度一緒に対局しませんか？」

「いいですね！」

どうやら彼女と仲良くできそうだ。

「あ！因みに私は雛と呼び捨てにしてください。それから敬語も不要です。」

「こちらこそ権と読んでください。私も敬語じゃなくても結構ですよ！」

「そう！ありがとうございます！」

「こちらこそありがとうございます！」

「雛〜！権〜！こっちに美味しそうな料理があるけど来る〜？」

おや、にとりが呼んでいる。

「私はちよつと休憩するからここに残っておくわ！ちよつと飲みすぎたみたい。」

「そう！じゃあいつてくるね！」

そういつて雛はにとりの方へと走って行った。

その後社様や牙様が来た。物凄く視線が痛かったが結構楽しかった。

そして…

「もくもくじくじく！」

すつかり出来上がった文様が私に突撃してきた。そしてそのまま私に抱きつく。「聞きましたよ。大活躍じゃないですか。」

「そうか天魔様は彼女に言ったのか。」

「ありがとうございます。でも記事を書くときは私の事は書かないでくださいよ。」

私はそう言うのと、意外にも彼女は

「うー！嫌です！私の椛が活躍したんです！みんなに知ってもらわないと私、記者やってきた意味がありません！」

「ちよつといつから私はあなたの物になったんですか！離れてください！他の人が見えますー！」

「椛は…私の…可愛い…後輩なんだからあ。」

「zzzz」

ね、寝やがった！

「文様起きてください！」

「ちよつとく文く！」

あの方は！

「あ！椛じゃない！昇格おめでどう！」

この人は姫海棠 はたて様

良く私を可愛がつてくれる烏天狗の一人である。

この人も新聞記者なのだが、あまり取材に行かないらしい。

「ありがとうございます。」

「もう！文つたら！椀が困つてるじゃない！」

そう言い彼女は文を引つ張つた。

「とりあえず、こいつを休ませてくるからまた後で！」

そう言い去つていった。

嵐みたいな人たちだったなあ。

【その後犬走宅にて】

無事宴会も終わり解散となった。

さて、

「いるんだろ？ラティオ。」

私は誰もいないはずの空間に聞いた。

「は〜い！我が主様！」

すると、目の前から黒髪の不気味な程顔の整つた女性が出てきた。

彼女はラティオ。種族は亜神。元々人だったが、自ら神に転生した。私の部下である

証拠に左手の平に「VI」の入墨が彫つてある。

能力は世界を創造する程度の能力で無限に色々な条件の世界を創る事が出来る。しかしその世界に入るには彼女の許可を得なければならぬ。でなければその世界に入ることもすら出来ないだろう。

「大天狗殺したのお前だろ?」

私の間に彼女は嬉しそうに

「はい!」

と答えた。

…やっぱり。恐らくだが彼女は大天狗の前と後ろに新たな小さい世界を創りそのまま押し潰したのだろう。

「今度から幻想郷の殺害行為は禁止する。」

「はい!」

…彼女は昔からそうだ私の命令には文句一つ言わずに従う。

「所で、いつから幻想郷にいたんだ?」

「あなた様について来たのですとそばにいて覗かせていただきました。」

そ う 彼 女 は こ れ ま た 嬉 し そ う に

はあああああああああああ  
?!?!?!?

ずっと覗いてた?!

「私が風呂に入っている時とか?!?」

すると彼女はもじもじしながら

「勿論です!」

と言いやがった!

何が勿論ですだ!ヤバイ鳥肌が止まらない!ちよつと恐怖すら感じたいる。

「わ、わかった。私の家に住んでも良いから今度からはやめるように!」

「ええええ?!?」

何をビックリしてんだ?!なんでこんな事には不満いっばい何だ?!

「むー!分かりました。」

そう言つて彼女は澁々従つた。

ふう良かった。

そうだ！

「お前に頼みたい事がある。」

「何なりと！」

「家の外観をそのままに中の空間を広げて新しい部屋を作つてくれないか？」

彼女の能力はこんな事にも使えるのだ！

「はい！何か要望はありますか？」

勿論だ！私は後ろの部屋の惨状を見て

「酒蔵を作つてくれ。」

そう頼んだ。

すると

木や金属やらがきしむ音とともに色々な部屋が形成されて行く。

さすがだ。

これでとつても住みやすくなつたぞ。

因みに何故か布団がなくなり変わりに大きなベッドが1つだけ出現したのは別の話。



## 三章・春雪異変

## 19・春雪異変①

『みんなへ

もう私は長くないのかもしれない。もしかしたら明日死ぬかもしれない。でもどうせ死ぬなら世界の行く末を見続けたい。本当は死にたくないかった。でもこれが現実だから仕方がないよね？場所はどうしよう？そうだ！生き物に最も近くて遠い場所にするよ！我ながらいい案だね！

シロギーより』

その魔神は死ぬにはまだ若すぎた。

〈side 椀〉

大天狗の事件が解決した後、私の家にはラテイオが住み着いた。彼女が居るだけで結構助かることが多い。掃除やら洗濯やら色々手伝ってくれる。

そんな事よりここ最近、まだまだ寒い。4月なのに！妖怪の山を見渡すとまだ雪が大量に積もっている上に次から次へと、どんどん雪が降ってくる。それに加えたくさんの動物が餓死している。

このまま続くのは、あまりよろしくない。

妖怪の山本部も解決に乗り出そうとはしているがまだしつぽすら捕まえていない。

「ヘックション!!」

今私は休憩中であり、たまたま天屋様と会っていた。

「大丈夫ですか？」

私が聞くと彼女は

「私よりもあなたの方が心配だ。何せずっと外で哨戒任務をこなしているからな。」

そう、あれから天屋様は昇級したのであまり哨戒任務につかなくなった。公にはされ

ていないが白狼天狗の責任者となった。

「…あなたの能力でこの異常な現象の原因を解明出来ないのか？」

そう、その方法もあるのだが…

「実はPHOUKAには弱点が合つて、寒くなると三体位しか出せなくなるんです。あと、千里眼は目的の場所がないと使えませんよ。」

「そ、そうか…。」

意外な弱手！PHOUKA！

でもこんな能力使わずとも…

「あなたの能力で解決出来ますよ。」

「そうか！使つて見るか！」

そう言つて彼女は魔書を取り出し、そして…

『わがひとみに　このはざまの　いじようたる　しんじつを　うつせ』

と唱えた。

かなり古い魔術だなあ。そんなことまで記録されていたのか。

「わかつたぞ、場所は冥界だ。どうやら冥界の女主人が西行妖なる物を咲かせるために春を集めているらしい。もうすでに博霊の巫女達が解決に向かっているようだ。」

「そうですか。ならもう直解決するかもしれないですね。」

本当に仕事が早くて助かる。

社様の言った咲かせると言う単語が気になるが…

「所で、最近風間先輩とはどうですか？」

「あの事件以降、二人は付き合い合い始めたらしい

「?!???!

」そ、そうだな！とつても…」

「社様こんな所におられたのですか!？」

突然、甲高い声が響いて来た。

視線の先には、白狼天狗の少女が立っていた。

彼女は山城 音。私の後輩だが上司である。噂によると入隊試験の時にこれまで類をみないほどいい成績だったらしい。社様はそんな彼女の實力を買ってか彼女を直属の部下にした。一応牙様も社様の直属の部下にあたる。私も誘われたが丁重にお断りした。

話を戻そう。そんな優秀な後輩だけなら別にいいが彼女は特別私を目の敵にしている。

「あなたは、犬走 椀！また社様をつけ回しているのですね！いけません社様、嫌なら嫌

と仰つてください。さもないと彼女が付け上がりますよ！」

…ひどい言われよう。悲しくなってきたな。

「やめろ音！むしろ私が彼女をつけ回していたのだ。だから彼女を責めるな。それに彼女は私の恩人でもある。」

そう社様は論ず。

「社様はお優しいですね。フン！社様の優しさに感謝しなさい！」

「それに本当に手柄を立てたのですか？話を聞く限り社様を救いだしたのは牙様のようなのですが？あなたは牙様の手柄にあやかっただけではないのですか？あまり出世出来ないのが良い証拠です。」

「おやおや、それは辛辣ですね。椛はしっかりと大天狗の悪事の証拠を手に入れましたよ。」

…あんたがここを出てきたら色々と話がややこしくなります。

私の頭を撫でながら文様は、音に言う。

「(、(、これは射命丸様！」

ほら、社様はともかく音が驚いてるよ。

「椛に何か言うことは有りませんか？」

そう文様はニコニコしながら言う。

…なんか怒ってるなあ彼女。

「くっ！ご、ごめんなさい。」

渋々と言った感じで音は謝った。

「私からも謝らせてくれ椀。すまなかった。」

社様まで謝り出した。

「それでは私達は持ち場にに戻ります。行くぞ音！」

「はい！社様！」

そして音は私をひと睨みして去っていった。

「もう！あの子椀に対して失礼すぎます！」

私と文様の二人になったとたん彼女はブンブンと怒り出した。

「私は、あまり気にしてないので構いませんが…そんなことより！」

「？」

「あなたの新聞のせいで私は、あれから暫く悪目立ちしたんですよ！」

私は、文様にクレームを出す。

「良かったです！みんなに椀の活躍を知ってもらえて！」

彼女には悪意がないのか嬉しそうにニコニコしていた。

「わざわざ私に文句を言いに来る人もいたんですよ！お前ごときが付け上がるなよって

ね！」

思わず殴り飛ばす所だった。

「金輪際私の事を記事にするのはやめてくださいね！」

「えーそんなー。」

文様は残念そうな顔をして言った。

「うー、そこまで言われるなんて。しくしく」

うっ

「な、泣くことないじゃないですか。分かりましたよ私が悪かったです。」

そう言うと彼女はこう言った。

「なら、しつぽと耳揉ましてください!!」

「この人はじめからそれが目的か!!!」

## 20. 春雪異変②

《side 魔理沙》

私は、今異変の犯人を探しに幻想郷中を飛び回っていた。

まったく霊夢の馬鹿はあとで行くなんて言い出すしここはこの霧雨 魔理沙様がないとかしなくつちやな!

そんな中、雲を抜けたと思ったら突然景色が変わった。

さつきまで昼間だったのに急に真つ暗になった。

それに加えて、目の前には博霊神社の階段とは比にならないほど長い階段があつた。その頂上の奥にはここからでも全体像が見える程の馬鹿でかい、花のついていない桜の木あつた。

そして何かが、その桜の木に吸収されている。恐らく『春』だ。

「なんだ……これは?」

あまりの光景について言葉が出てしまった。

ん?

階段の上に人影が見える。



その人影はゆっくりと階段を下ってくる。

そいつは白色の髪に二本の刀を持った少女だった。

「ここは冥界。あなたのような人間の来るべき場所ではない。即刻ここから立ち去りなさい。」

「ここが冥界？なら…」

「観念しろ！お前たちがこの異変の元凶っていうことはわかっているぜ！ああそうだ！別に抵抗しても良いぜ！力ずくは大好きだからな！」

「フーン・博霊の巫女でもないただの人間如きがいきがるな！何者だお前は？」  
そう彼女が聞いてくる。

私が誰かって？

「私は、普通の魔法使い 霧雨 魔理沙様だけ！」

そう言つて私は構える。

相手も二本の刀を抜き、こう答えた。

「私は、魂魄 妖夢。貴様の命をもらい受けるものだ！」

《side out》

《side 霊夢》

魔理沙が異変の元凶を探している一方で私は神社のこたつでくつろいでいた。「お邪魔します。」

そういい入ってきたのは咲夜だった。

「どうしてみんな玄関から入ってこないのかしら？ 所で今日はあなた一人？」  
私は彼女に問うと、

「お嬢様は寒いから出たくないと言っているわ。」

と言った。続けざまに彼女はこう言った。

「早く異変解決に行ったら？ 白黒の魔法使いはもう行ったみたいだけど？」  
「わかってるわ。」

そう答えると彼女は、

「なら急いだ方がいいわ。彼女死ぬかもしれないわよ。忠告はしたからね。」

と言い帰って行った。

…さて、行きますか。

《side out》

【冥界にて】

《side 魔理沙》

…くっ！

なんて斬撃の速さだ！

「はああああ！」

〈人符「現世斬」〉

相手が私めがけて切りかかってくる。

「おっとー！」

しかし私はとっさに後ろへ飛び退きかわした。

ガリガリガリガリ  
!!!!

「?!?!」

何と彼女の放った斬撃が私めがけて飛んで来たではないか!?

彼女が飛ばした斬撃が地面をえぐりながら私に向かってくる！直撃すればただじゃ

すまない！こうなったら！

私は箒を呼び寄せ空を飛びギリギリ避けることができた。

ズガアアアアン!!!

私と言う標的を失った斬撃は後ろにあった石垣をけたたましい轟音とともに破壊した。

あ、あつぶねえ！

「ちよこまかと!?」

そう言うのと彼女は怒りに任せ斬撃を私めがけていくつも翔ばしてきた。

随分と正確な斬撃だな！だが避けられないことはない！

「いのー！」

こいつの攻撃は何と言うか正直過ぎるな。

ならー！

〈魔符「ミルキーウェイ」〉

「そんな遅い弾幕あたるものかー！」

そういい彼女は素晴らしいながら高速でよけた。

そして私めがけて真つ直ぐ飛び込んできた。

「よしー！」

私は彼女の死角から弾幕を飛ばした。

「グウっ!?!」

すると見事に彼女に直撃した。

その一瞬、彼女に隙ができた。

「いまだー！マスタースパーク!!!」

「なに?! キャアアアアアアアアアア!!?!」

私が放ったマスターズパークが見事に相手に直撃し、彼女は吹き飛んだ。

地面に着地するとそこにはボロボロになった妖夢がいた。

「お前の敗因はその真っ直ぐ過ぎる性格だぜ。」

そう私は静かに告げた。

「そう…ですか。私は負けたのですね。」

おや? 口調が変わった。

「しかしあなたでは幽々子様には勝てないでしょう。」

幽々子。それがこいつのボスの名前か。

……どうやら向こうから来てくれたみたいだ。

私の視線の先には桜のような髪をした亡霊が宙に浮きながら怪しく微笑んでいた。

《 s i d e o u t 》

## 21. 春雪異変③

〈冥界にて〉

《side 魔理沙》

「お前が幽々子とやらか？」

そう私は目の前に浮かぶ桜色の髪をした亡霊の少女に問いかけた。

すると、凜としたきれいな声が帰ってきた。

「ええ、そうよ。ようこそ冥界へ。」

「さっさとこの異変を止めろ！」

私は彼女に向かって怒鳴る。

しかし、

「それは出来ない相談ね。」

「私は一度で良いからこの桜を咲かせてみたいの。もう生きている間のことはなにも覚えていないけど。もしかしたらこの桜、西行妖を咲かせることで何か思い出すかもしれないわ。」

「だから、邪魔しないで。」

?!

なんつー殺気だ！

こうなつたら一人でもこいつを止めてやる！

「あら？どうやらもう一人のお客様が来たようね。一緒にもてなしてあげるわ。」  
もう一人？

「霊夢!？」

私の後ろには見慣れた紅白の巫女服を着た少女が立っていた。

「……めん魔理沙。」

「やっぱり来てくれると思つたぜ！一緒に戦おう！」

素晴らしい私と霊夢は構えた。

「ふふふ。いらつしやい。」

《side out》

《side 霊夢》

さつきからしていた嫌な予感っていうのは、彼女かしら？

いや、何だか違うような気がする。

「来ないのなら私から行くわよ。」

素晴らしい、彼女は多数の弾幕を撃ってきた。

「……………」

ヤバイ、あまりにも綺麗だからつい見とれてしまった！

「魔理沙!!」

「……………」

どうやら見とれていたのは私だけでなく魔理沙も同じだったようだ。

ドクン

「次は私からだ!」

そう言い魔理沙もまた大量の弾幕を相手めがけて撃った。

ドクン

このまま私も押し切る!



ドクン

!?!? いったい何が!?

戦っている私たちを余所に突然西行妖の様子が変わった。

これは、脈動している?!

「何をした?!」

魔理沙が幽々子を問い詰める。

所が

「分からない、まさかこんなことになるだなんて!」

どうやら向こうも何が起こっているのか分からないようだ。

嫌な予感はいか!

アアアアアア!!!

響き渡る数多くの悲鳴と共に大量の何かがどこからともなく出現し西行妖に吸い後

まれて行った。

《side out》

〈幻想郷にて〉

《side 権》

「いったい全体どうなってるんだ!？」

「生き物だけでなく天狗達まで倒れ出したぞ?!」

「お前ら落ち着け!!倒れた者を本部まで連れていけ!」

なんて事だ。まさか春どころか魂まで持つていくだなんて!

それにこの魔力は…!

「犬走!」

倒れた天狗の一人を担いでいた私の所に天星様が来る。

「これはいったい!?!それに先程の脈動音は!?!」

彼女は私に聞いてくる。

「詳しくはわかりません!しかし心当たりがあります。

この魔力は恐らく蒐集の魔神、シロギーに間違いありません。」

「魔神だ?!」

「はい！そしてこの惨状を止められるのは私しか居ません。そして時間がない！次の脈動が来るとさらに被害が増えます！」

「!？」

「そうかならばそいつを渡せ。私が代わりに連れて行く。お前はこの異変を止めてきてくれ。」

「そう彼女は私に託した。」

「はい！行つてきます！」

「私が向かおうとしたそのとき。」

「ちよつと待て。何か顔を隠す物があるだろう。これやるよ。」

「と彼女は私に歌舞伎で使うようなお面を渡してきた。」

「……これは？」

「私が聞き返そうとしたそのとき。」

ドクン

「!?!本当に時間がないようだ帰ってきたら話す！」

「そう言い彼女は本部へと向かっていった。」

《side out》

〈幻想郷のとある場所にて〉

《side  
????》

これは飛んでもないことになりましたね。

まさかシロギーが関係しているなんて。

この一件あいつが何とかしてくれるだろうけど。

そう言い私は屋敷から飛び立とうとする魂を瘴気でできた鎖で繋ぎ止めていた。

気づかれないように、ひとつ残らず。

《side out》

〈冥界にて〉

《 s  
i  
d  
e  
o  
u  
t  
》

キ  
ヤ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
ハ  
!

.....

.....

.....

《 s  
i  
d  
e  
????  
》

## 2.2. 春雪異変④

〈冥界にて〉

《side 犬走 楯》

冥界に到着した私は全ての元凶の元へ行つた。そこには博麗の巫女の他、白黒の魔法使い、桜色の髪をした亡霊、そしてその先には…

…シロギー。お前、こんな所にいたのか。

私は、目の前の巨大な桜の木を眺めた。

すると…

「ちよつと、あんた！誰よ!？」

博麗の巫女が私に話しかけてきた。

「久しいな博麗の巫女。」

ん？仮面を着けているせいか声がちよつと変わつてる？

「あんたなんか知らないわよ!」

そう言う彼女に私は一言言つた。

「銀色の狼。」

「!!」「何だって?!」

博麗の巫女だけではなく、白黒の魔法使いも驚いていた。て言うかなんで魔法使いの方も知ってるんだ?あの時気絶してただろう?

「今度は何をしに来たの?」

「うむ、そうだな…私が所属している組織が大変なことになってな。我々の組織に限ったことじゃないが幻想郷中の生き物から魂をその桜に吸われている。これが続けばいずれ我々の組織だけではなく幻想郷が壊滅してしまう。」

「やっぱりそうだったのね!」

さすが博麗の巫女、もうすでに勘づいていたか。

「私はそれを止めに来た。」

「?!……引っ込んでなさい!これは私の、博麗の巫女としての私の役目なのよ!あんたに頼まずとも私が止めて見せるわ!」

……若いつて良いな。

その時だった。

ドクン

!!!!!!

今までとは比にならない程の魔力を感じた。

桜の木の幹がメキメキと音を立て変形していく。音が止むと共に桜の木に大きな穴が空いていた。

「な、なんなのよ!?!この威圧感は何?!

博麗の巫女は、どうやら立っているだけでもやつとのようだ。

無理もない。あれほどの威圧感の中立っていられる人間は数人といないだろう。

穴から何か人のような何かが這い出てくる。

そして、

べちゃ!

落ちてきた。

そして落ちてきた何かは立ち上がりとする。あの顔は間違いない。私達を覗く目は餌を見つけた獣その物。あのとときの彼女はもうそこにはいない。

……マジかよ。蘇りやがった。最悪の化け物として。

「なあ博麗の巫女よ。」

私はおもむろに博麗の巫女に聞く。

「な、何よ?!」

「あいつは私の知り合いの慣れの果てだ。」

「なんですって?!」





彼女の怒りの咆哮だった。

そして彼女は怒りに身を任せ私を殴り続けた。

……確かに威力は高い。だが、以前とは比べ物にならないほど弱くなっている。

何故かは分からないがこれは好機！押し切る！

そして私は彼女を殴り地べたに叩きつけた。地面に巨大なクレーターが出来る。

すまないなシロギー、どうしてそうなったのか分からないが少し戦闘不能にさせてもらおう。

次の瞬間、私の腕が宙を舞った。

やつぱりな。記憶がなくなると体に染み付いた剣術はもう忘れられないみたいだ。

彼女は瘴気を一瞬にして細い剣にしたのだ。

…少し油断した。

私は腕が地面に落ちる前に傷口から瘴気を出して切り落とされた腕をキャッチし、そして繋げた。

それから白狼剣を引抜き構えた。

すると彼女の視線は私の剣に集中した。

おや？本来じゃ彼女はこんな事をしないはずだ。

私は、白狼剣を彼女に振るう。彼女は剣で防御するが足が地面にめり込む。それなの

にまだ私の剣を見つめている。

すかさず彼女の顔に拳を入れる。

「フギャ!?!」

やはりそうか。本来の彼女は剣だけではなくもつと視野を広げて戦っていた。何せ戦場ではルールなしの殺し合いだからな。相手の剣以外の動き含め周りの状況をよく見ないと不意打ちをされるかもしれないな。

「グウウウウウウ!!」

私の突然の一撃に腹を立てたのかまるで獣のように唸り出した。

そして…

「おいおい勘弁しろよ!」

何と彼女の背中から木が生えてきたのだ。それも一本や二本といった所ではない。

その木々が一点に集束し光を帯びる。そして私に向かって地面を抉りながらレーザーが直進する。

私はとつさに避けるがレーザーが当たった場所には獄炎の火柱が立っていた。

獄炎

それは我々魔神が出す、自然界の法則をねじ曲げた炎。それは対象を焼き尽くすまで消えることはない。威力は個人差がある上に魔神なら自分が出した炎限定で消せる。

例外もいるが…。

しかし、予想外だった。まさかあそこまで出来るなんて。幸い威力はそこまでない。そこまでないにしろ、他の種族にとっては充分驚異になるだろう。

「アガツ!？」

突然シロギーが頭を抱え悶え出した。

?!もしかして。

よし!このまま死なない程度に攻撃を続けて行こう。

そつちが獄炎を出すなら私もやってやろう。

滅罪「獄炎狼」<sup>heihound</sup>

私の目の前には巨大な獄炎でできた狼が出現する。

これは走りながら獄炎を吐く戦車のような物だ。

私はずっと彼女は狩りをする獣のような状態だと思っていたがどうやら違うようだ。恐らく違和感の原因はこれだろう。あれは獣ではなくどちらかと言うと子供だな。このままじゃれていくともしかしたら記憶が戻るかもしれない。

すると突然彼女が私の目の前に現れたのだ。な、なんてスピードだ!

私はつい反射時に彼女を結構な力で殴り飛ばしてしまった。

まずい、あそこには博麗の巫女達がいる!

「あぶない!!」

私は彼女達に呼びかけるが体勢を立て直したシロギーは私ではなく桜色の髪をした亡霊の方を向いた。

ヤバいさすがに遊び過ぎた!!

彼女はその亡霊に突進しそして…

「うえええええん!!」

泣きついたので。

……え?!

「ど、どうして?!」

博麗の巫女はその亡霊に聞いた。

「え、え? わからないわ?」

どうやら彼女自身も分からないようだった。

ん？なぜだ？今まで気づかなかったが何故かシロギーからこの亡霊と同じ霊力を感じるんだ？

「うう…。」

未だ泣き止まない彼女に私達は疑問を並べるしかなかった。

チラッ

あ！こっち見た。

プイッ！

どうやら私は嫌われたらしい。

## 23. 春雪異変⑤

〈冥界 白玉楼にて〉

《side 霊夢》

「お茶をお持ちしました。」

どうやら妖夢がお茶を入れ終わったようだ。

私は出されたお茶を啜った。

そして言った。

「さて…。話を聞かせてくれるかしら。」

すると彼女は話をするかと思いきや突然こういい出した。

「その前に…。誰だ？話を盗み聞きしてる奴は？」

?! まさか！

「あら、どうやらばれた見たいね。」

そんな聞き慣れた声と共に空間が裂けた。そして…

「久しぶり幽々子。」

「久しぶり紫。」

紫が出てきた。

幽々子に挨拶をし終わると、彼女は銀色の狼の方へと顔を向けた。

「結構自身があつたのによく気づいたわね。」

「それほどの霊力を持つていながら気づかないのはむしろ無礼に当たるのではないだろうか。」

「あら、それは私に対する嫌味かしら?」

「そうだ。紫は館の異変の後彼女を探していた。しかし紫はあれほどの力を持っている彼女を見つけるところか手がかりの一つも見つける事が出来なかった。」

「いや、そんなつもりはない。誤解をさせてしまったならば謝ろう。すまない。」

以外にも彼女は素直に謝った。

そんな彼女に驚いたのか紫は

「ふくん。まあ良いわ。本題に入りましょう。まずはあの子は何なのかしら?」

彼女は少し考える素振りを見せゆつくりと口を開いた。

「そうだな。あいつの名前はシロギー。蒐集と言う二つ名を持った魔神だ。」

「魔神ってあの?」

紫は彼女に聞き返した。

「あの? すまないがどう言う風に伝わっているか説明してくれ。」



そして紫はかつて私に少しだけ話してくれただけ話しておとぎ話を話した。

『かつて魔神たちの住む国には皆が憧れる程仲の良い王家の家族がいました。

しかしある時、その兄妹の一人が自分の存在に疑問を抱きました。その魔神は他の兄妹と姿が違っていたのです。そんな自分に疑問を抱いて居た彼女の前にある女神が現れ彼女を唆します。

我を忘れたその魔神は12の配下を引き連れ世界を支配しようとなりました。

妖精、妖怪、巨人、神、天使、悪魔、人間、そして自らの同胞である魔神ですら逆らうものは皆、手にかけてのです。そんな中魔神以外の種族が手を取り合いその魔神を倒そうとします。彼らは彼らの種族の中で最も優れた者を選び出しその魔神を倒そうとしました。しかし選び出された彼らはその魔神と彼女の配下達に為す術もなく殺されてしまいました。その魔神は大陸を裂き海を蒸発させ多くの生き物を死に導きました。

そんな彼女は皆から恐れられこう呼ばれました。魔王と。

そんな中嫌われ者である彼女を愛する者がまだいたのです。彼女の家族でした。家族達は彼女がこれ以上罪を重ねる事に耐えられなかったのです。そこで彼等は家族全員で魔王を倒すことを決めました。

所が魔王は不死身だったので。そこで家族達は魔王を倒すことをやめ彼女を説得

しようと思いました。

初めはなかなか上手く行きませんでした。しかし何回も何回も続けて行くうちに彼女の心は次第に善を思い出し初めました。そして家族達は遂に彼女を改心させることが出来ました。そして魔王だった彼女は罰を受けるために監獄に幽閉され平和が訪れることになりました。』

まさかそんな話だったなんて！

私はもちろん魔理沙や幽々子、そして妖夢までもが驚いていた。

話を聞き終わり銀色の狼は話し始めた。

「ああ、ほとんどその通りだよ。正直驚いている。まさかここまで正確に伝えられていたなんて。1つ訂正するなら不死身では無いと言う事くらいかな？」

そんな彼女に紫は

「魔神については他に何も情報はないわ、だから多くの者はこの話は嘘だと思っているのよ。」

「いや、この話は全て真実だ。まあ証明しろと言われても困るがな。」

「つまりその子は魔神なのね。」

そう言い私は幽々子の膝でスヤスヤ眠っている彼女を見た。

「ああ、そうだ。だが魔王ではないぞ。そいつはその伝説が起きる前に死を宣告されて

いた。そして彼女は世界の行く末を見届ける場所を死に場所にするとか行って行方が分からなくなっていた。」

世界の行く末を見届ける場所を…それで冥界を選んだ訳ね。

「それは分かったわ。じゃあなんで死んだはずの彼女が復活したのかしら？」

そう紫が聞いた。

「詳しくは分からないが、恐らくあの桜を復活させようした際に融合していた彼女をも復活させてしまったのでは無いだろうか？そして春や魂を糧に完全に復活したのでは無いかな？」

「なるほど…ならそういう事で良いわ。」

本当にそれでいいの？

「そうだ。彼女の処遇はどうする？」

「幽々子に懐いているようだから彼女に預けるわ。幸い魂は幻想郷中に戻ったようだし。それを今回の異変の罰としていいわよね幽々子？」

そう言われた幽々子は

「いいわよ。」

と緩い返事をした。

「さてまだ肝心な話は終わってないわ。」

そう言い紫は再び銀色の狼を見た。

「私の事についてだな。」

どうやら向こうも分かっているようだ。

「私もまた魔神だ。」

「でしようね。」

それは私も分かっている。

「その情報だけで充分だろう。」

そう良い彼女は立ち上がり帰ろうとした。

はあ?!それだけ?!

「あら、そのまま大人しく帰れると思っっているのかしら?せめてお面くら外したらどうなの?」

紫は彼女にそう言……!!

突如場の空気が酷く重苦しい物になった。

私は威圧感によつて動けないでいた。

お面を付けていたから分からないが彼女がこちらを睨んでいるような気がしてならない。

紫はあまりの威圧感に冷や汗をかいていた。どうやら彼女も指一本動かさせないよう

だ。

「私は平穩な生活を送りたいのだ。邪魔するのであれば殺しはしないが痛い目に合ってもらおう。勝手にこの幻想郷に住み着いて図々しいかも知れないがな。それに前回の異変、そちら側は約束を破つたでは無いか？」

「そうだ。彼女の言う通り無闇やたらに探らないと言う約束をしていたにもかかわらずそれについて破つてしまった。」

「わ、分かったわ。幻想郷はどんな者でも受け入れるわ。」

半ば脅迫に近い形で紫は了承した。

「うむ。本当に申し訳ない。」

本当に申し訳ないと思うのならもう少し自重して欲しいものだ。

「それでは私はこれで。」

「そう言い彼女は今度こそ去ろうとした。」

「待つて！宴会は…。」

私が言い終わる前に彼女は

「私抜きでしてくれ。人が多い場所はあまり好きでは無いのだ。」

「そう言つて私の静止も聞かずに立ち去つた。」

立ち去つた彼女の首元には何か刺青のような物が見えた。「I」

## 24. 春雪異変⑥

〈妖怪の山本部にて〉

《side 権》

あれから異変の混乱は徐々に落ち着いてきた。シロギーに集められた魂は無事に元の体に戻った。

幸い春を贄に復活しただけで魂にはまだ手を出していなかったようだ。

そして私は今、いつもの哨戒任務を終え休憩していたのだが…

「犬走、怪我はないか？」

そう天星様が聞いてくる。

「いえ、たいした怪我はしてませんから。」

「そうか、なら良かった。」

そうだ！

「私が飛んで行った後天狗たちはどうでした？」

ふと疑問に思ったので聞いてみた。

「あの後、新しい大天狗様達が駆けつけて皆に指示を送りそのお陰で事態は収集した

よ。」

ん？

「新しい大天狗達？」

確かにあの時の大天狗はもういない普通に考えればその空席を埋めるのは当然だろう。

しかし…

「ああ、そうだった。この事はまだ発表されていないのだったな。天魔様はあのような事件の再発を防ぐために大天狗の座を五席用意されたようだ。」

ふむ、確かに大天狗が何人かいれば重要事項の決定も話し合いの末に出すことが出来る。

「因みに大天狗の一席には射命丸様もおられるが…彼女はまあなんと言うかその…。」

「そこまで真剣に仕事しないでしょうね。あるいはこの妖怪の山の情報担当ですかね？」

まさかあの人が大天狗になるなんて。

…それならそうと言ってくれたら良いのに。

「そちらは何か分かったのか？」

「それがですね…。」

私は冥界であった事を彼女にすべて話した。

シロギーの事、幻想郷の賢者との話し合いの事をも包み隠さずに言った。

「ふーむ、そうか。そのシロギー殿だったか？彼女が冥界に預けられるのか。」

「まあ、そうですね。」

「所であのお面はどうされたのですか？」

私はずつと疑問だったことについて聞いた。

「あれは、死んだ父の形見だ。」

予想だにしない回答だった。

「そんな！今すぐ返しますよ！」

私はあのお面を取り出そうとした。

「いやお前は私の恩人だ。どうせなら恩人であるお前に受け取ってほしい。たのむ。」

そ、そこまで言うのなら。

それきり会話が途切れてしまった。

ああ、そうだった。

「私、宴会に誘われたんですけど。」

「！行くのか？」

「いえ、行きませんよ。」



「それもそうか。」

天星様も納得のようだった。

「万が一正体がばれたら幻想郷で生活しにくくなるものな。それに魔神について詳しく知りたいやからもいるだろうし。」

…そこまで大層な理由じゃないけど。

ただ単に酒があまり好きじゃない上に知りもしないやつとは飲みたくないし。

この事は心にしまっておこう。

そんな事を思っていると。

「探しましたよ天星様と…犬走椀。」

面倒くさい奴が来た。まだ楽な方だが…。

「今回はお見事でした！大天狗様達が駆けつけるまでの統率！その上倒れた者も次々と救助していくなんて！」

そう天星様を誉めちぎる彼女は私を親の敵のように憎む音。

「その反面、あなたは何をしていたのですか犬走さん？」

まったく敬意を感じない敬語で私に聞いてくる。

「…えっと、私は持ち場に残って哨戒任務を続けて居ました。」

嘘だがしょうがない。

魔神相手に殴り合いしていたとは口が裂けても言えない。

「ふうん。」

そう彼女は興味無きそうに返した。

聞いてきたのはアンタだろ！なんで私が滑った見たいになつてんだ。

嘘だから別にいいけども！

そんな事を思っている私をよそに彼女は…。

「さあ、さあ、天星様！あちらで話しましょう！」

「お前なあ、いくらなんでも失礼過ぎるぞ。」

そう天星様が彼女に説教する。

「それでは私はこれで。後は御ゆっくりとお話してください。」

「え?!もう行くのか?!」

そんな天星様の声を後ろに私はそそくさと立ち去った。

あの人を迎え撃つために。

「もーみーじー！」

来やがった。

「権は大丈夫でした?!」

そう文様が聞いてくる。

「ええ、大丈夫ですよ。倒れたわけではありませんし。」

私はそう返した。

すると…

「そうだったんですか?!あの異変かなりの妖力を持った天狗でさえも倒れたんですよ。白狼天狗のなかでも倒れていなかった人は数えるほどしかいませんでしたよ！」

しまった。

「ぐ、偶然ですよ！ほら！烏天狗の中にも倒れた人もいるでしょう?」

私がそういったとたん周りの視線が私に集中した。

やってしまった。すつごくにらまれてる。

「それでも少数ですよ！実は権には隠された力があつたりして。」

「ないです。」

「ありや、即答ですか。もう少し自信持ちましょうよ。」

「無いものは無いです。」

…ちよつと焦った。

「そうだ！」

何かを思い付いたのか彼女はこう言った。

「霊夢さんから宴会のお誘いがあったのですが来ますか？」

そんなの決まってるじゃないか。

「行きませんよ。仕事もありますし。」

私は拒否した。行つてばれたりでもしたら注目的になるに違いない。もしかしたら攻撃して来るかもしれない。あまり手荒な真似はしたくないから出来れば危険を侵すようなことは避けたい。

「えー。行きましようよ！」

相変わらずしつこいな。

「だから無理だつて言つてるじゃないですか。」

「むー！」

「そんな駄々こねても行きませんよ。」

「…どうあつても行かないのですか。」

…おや？諦めてくれたみたいだ。

それは良かった…

「この手はあまり使いたくなかったのですが……。」  
 ん？なににするつもりだ？

「椀。私実は大天狗の位に赴任したんです。」

「ここでその事を言うのか。あれ……」

……………おい、まさか！

「大天狗として命じます。犬走 椀！私と共に宴会へ来なさい！」

この人ついに禁忌を使いやがった！

《《side out》》

〈博麗神社 宴会の席にて〉

《《side 霊夢》》

異変の混乱も落ち着き、ここ博麗神社には多くの妖怪達が集まって宴会を始めていた。  
 た。

元凶である西行寺 幽々子までもが来ていた。その従者の妖夢とあの規格外の力を

持つ魔神までもが。

「どうしたんだよ霊夢。そんな顔をして。酒が不味く成っちゃうぞ。」

私のよこで魔理沙が話しかけてきた。

「…そりゃあ、ねえ。この異変を解決した本人がいないのは残念だけど折角の宴会だぜ！ 楽しもう！」

「…分かったわ。」

そうだ。この宴会には銀色の狼は来ていない。私達はまた彼女の手がかりを見つける事が出来なかった。

あれから私達は何をしたかと言うとパチュリー達に頼んで一緒に魔神について調べた。しかしこれはただ時間を無駄にしただけであつた。

本当じゃないのだ。魔神について書かれた情報は。

まるではじめからこの世界には存在しないのではないかと疑うほどに。

しかし、現に魔神はいる。銀色の狼しかり、シロギーしかり、そして紅魔館の小悪魔しかり。彼らは確実に存在するはずだ。なのに情報がない。悔しく思わないはずがないでしょう。

「あー、霊夢。そんな所にいたの？」

紫が突然ぬつと出てきた。

「なに?」

私は、ぶっきらぼうに答えた。

「もう、そんな面倒くさそうな顔しないの。」

「そんなつもりはないけど…。」

無意識にそんな顔してたのか…

「にしても怖かったわ。あの時。」

あの時? ああ、銀色の狼が威圧してきたときか。

「あなたでも怖かったの?」

彼女もかなりの化け物だ。なんせこの幻想郷を作った妖怪の一人だからね。

それも外の世界とは一切干渉しないように。

「怖かったわよ。何せ動いたら殺されると思ったほどよ。こんな思いをしたのはいつぶ

りかしら。私じゃ手に余るわ。」

彼女にここまで言わせるだなんて。

「それにこの間から誰かに見られてるような気がするわ。」

「…それは考えすぎじゃない?」

「そうかしら?」

そんな会話をしているとふと目の前に座っている二人組が目に入った。

「えへへ。椀、お酒美味しいですか？」

「……………」

「何か食べたいものはありますか？持ってきますよ？」

「……………」

「うう…。無理やり連れてきたことは謝りますから機嫌直してください。」

「…もうしないって誓ってくださいねあんなこと。あんなことされたら私はもう自分の意思で行動できなくなりますよ。」

「…はい。」

あんな文初めて見た気がする。

ん？そういえば文は大天狗とか言う位に就いたらしいけど、結構偉かったはずよねそんな彼女に説教出来るなんて何者？

「あれは哨戒天狗ね。哨戒天狗は皆あんな服を着てるわよ。」

私の疑問に答えたのは紫だった。

確か妖怪の山の門番みたいなやつらだっけ？でもそれって…

「かなり位が低いはずよね？」

「そうよ。」

文の交友関係ってちよっと変わってるような気がする。



「ん？あ！霊夢さん！」

さつきまで項垂れていた事が嘘のように文が私に話しかけてきた。

「紹介しますね。彼女は白狼天狗の犬走 椛つて言います。椛、こちらは博麗の巫女の博麗 霊夢さんです。」

そう彼女が紹介したかと思うと。

「はじめまして、博麗さん。犬走と申します。よろしくお願ひします。」

「博麗 霊夢よ。霊夢で良いわ。こちらこそよろしく。」  
すると…

「おお！私は霧雨魔理沙！普通の魔法使いだ！よろしくな。」

「よろしくお願ひします。」

魔理沙が突然乱入してきた。

一番驚いたのが

「あなたは椛つて言うのね。いい名前ね。おっと、私は八雲 紫よ。知ってるかもしれ  
ないけど。」

「？申し訳ありません。私何分、無知なもので。」

そんな彼女の疑問に答えたのが文だった。

「彼女は幻想郷を作り上げた賢者の一人です。」

「!?あの!?そうとは知らず申し訳ありませんでした!」

まあそれが普通の反応よね。

でも少し意外だった。妖怪の山の天狗は警戒心が強いはずなのに彼女は最初私や魔理沙にたいして普通に話してきた。それも礼儀正しく。それに魔理沙と私は人間、妖怪であるはずの彼女は気づくはず。私はともかく魔理沙にも威嚇はしてなかったわね。

いい子じゃん。

「所で霊夢さん!銀色の狼について教えてください!」

突然文が聞いてきた。アンタは少しぐらい我慢を覚えなさい。

「そう聞かれても、わからないわよ。何にも情報を残さなかったし。こないだ話したので終わりよ。」

「…:そうですか。残念です。」

「それじゃあ椀も震えてることですし向こうへ行つてきますね!」

そういつて彼女は椀の手を引いてどこかへ行つた。

その時椀の首の後ろに赤黒い何かが見えた。

「あの子結構肝っ玉がすわつてるわね。」

そう紫が言った。

「まあ、大天狗である文のそばにずっといるからね。」

そりゃあ結構な度胸がないと文のそばにはいられないしね。  
て言うかむしろ文の方が積極的なんだと思うけど…

「ふふふ、違うわ霊夢。」

?何が違うのだろうか?

「彼女は私を見ても驚かなかったわ。」

「いや、ガクガク震えてたでしょ。」

「あなたや魔理沙、そして文はかなりの実力の持ち主だから気づいてないかもしれないけど私の出す妖力は白狼天狗程度じゃ立っているのもやつとよ。」

!?

「白狼天狗の中にはそれほどの実力を持つ者もいるかもしれないわ。でもね霊夢。案外近くに答えはあるかもしれないわよ。」

ただの偶然かもしれない。でももしかしたら…!

《side out》

## 四章・永夜異変

### 25. 永夜異変①

〈幻想郷 とある竹林にある屋敷にて〉

《side ???》

「いいわ、永琳初めてちょうだい。」

長い黒髪をした少女は目の前の医者に告げる。

「了解しました。」

そう言った医者は夜空、いや妖しく光る月に向かって矢を撃った。

「てゐ、そして鈴仙。手筈通りにやりなさい。乗り込んでくる者達を姫に近づかせてはならないわ。」

医者は、後ろの影に隠れた人影に言った。

「了解!」

「はっ!」

そして2人は命令を受け持ち場に戻る。

師匠、輝夜様、私の為にも今回の事を起こそうと言うのに言い付けを守れないかもしれません。

しかしここに飛んでもない怪物が来てしまうかもしれません。

その時、私は全力で輝夜様、てゐ、そしてあなたを守ります。

例え師匠の立てた計画が崩壊しようとも。私の正体を知ったあなた方に嫌われようとも。

彼女は罪悪感にかられながらも心に誓う。

《 side out 》

〈博麗神社にて〉

.....

やはりそうだ。

月がおかしい！

私はふと空を見上げたときに感じた違和感の正体を突き止めた。

人間には害が及ばないかもしれないが一部の妖怪にとつて害となるかもしれない。

「霊夢く。ちよつと提案があるんだけど。」

どこからともなく紫が現れた。

「なに？今から忙しくなるから後にしてくれない？」

「その月がおかしい事について調べるの？私の提案もそれ関連よ。」

…そういうことなら…

「その提案って言うのは？」

「私が昼と夜の境界をいじつて夜を長引かせること！」

自信満々に飛んでもない事を言い出した。

《《side out》》

〈魔法の森にて〉

《《side アリス》》

ドンドンドンドンドンドン！

「アリスー！ー！いるかー！ー！」

なにになになになに!?!?!

寝ている私を突然けたたましいノック音と聞き覚えのある声が起こした。

急いで玄関へ駆けつけて：

「ちよつと!!何時だと思ってるの魔理沙!!」

私は目の前にいる非常識な友人をしかりつけた。

「いやー!悪い悪い!ちよつと用事があつてな!」

「なに?弾幕ごっこ?それなら明日にして。殺すつもりでやるから。」

「おいおい弾幕ごっこで相手殺したら負けだぜ。それに私の用事は別だ。」

はー?別?

「空を見てくれよ月が変じゃないか?」

月?

……言われてみれば何か違和感を感じるわ。

「きつと異変に違いない。一緒に解決しようぜ!アリス!」

……仕方ないわ。

「分かったわよ。ちよつと準備するから待っていて。」

《side out》

〈紅魔館にて〉

《side レミリア》

月がおかしい。説明しろと言われても困るけど…

「ねえ、咲夜。」

「はい、お嬢様。」

私の問いかけに咲夜が応える。

「あなたも気づいているかしら？」

「はい、お嬢様も月に違和感を覚えて御いられですね？」

やはり優秀なメイドね。

「なら準備しなさい。」

「はい、分かりました。」

そうやって彼女は去っていく。

私達にとって夜と月は特別な物。ならばその月を穢す輩は後悔させるのが私達吸血鬼の性である。

一体どんな愚か者なのかしら。我ら吸血鬼の夜を穢す者は

「お姉様。咲夜がお茶入れてるけど私も飲みたい。」

……あの子、優秀なんだけど色々抜けてるのよね。

《side out》



?????????  
に<sup>へ</sup>て<sub>て</sub>

ついに、こんなしみつたれた所とはおさらばだ！

あの方のおかげでここから脱出できる。脱出した暁には望むままに飲み食らいそして殺してやる。

おっとその前に俺達をここに閉じ込めているあのクソアマをぶち殺してくれるわ！

おやおや？なんか脱走しようとしてるやつらが居るみたいだな。無駄だったのによ。私でさえしくじったんだ。お前ら如きには無理だったの。待ってりやその内出れるつてのにな。焦っても長引くだけだぜ。

そう思いながら彼女はくつろぐ。まるで自分の部屋かのように。

そんな彼女の右腕には赤黒い入墨が彫ってあった。「Ⅲ」

## 26. 永夜異変②

〈人里道中〉

《side 魔理沙》

まさか月が変どころか夜が明けないなんて！

私達は色々探って見たがまるで手がかりがなかった。

「ねえ、魔理沙。ひとまず人里に行ってみない？」

「おう！そうだな。」

私はアリスの提案を呑むことにした。

何かわかれば良いが：

〈人里の前にて〉

「悪いがここは通せない。」

私達は今慧音先生の門前払いを食らっている。

上白沢慧音

彼女は人里で寺子屋の教師をしているが、かなりの実力が有るため有事の際には人里を守ることに専念しているそうだ。

彼女は、アリスが妖怪であるため人里には入ってはならないと言っていた。

…相変わらずお堅いな。

「少し位もダメか？ 私達はこの異変の原因を調べようとしてるんだが。」

「申し訳ないが、ダメなものはダメだ。」

…どうしようか。

そんな悩んでいる私をよそにアリスは

「なら、あなたは何か知らない？」

と慧音先生に聞いた。

「…そうだな。霊夢が迷いの竹林へ向かったと言うことは知っている。」

「そうだ！ 異変有るところに霊夢有りつてな！」

「そうと決まれば…」

「ありがとな！ 慧音先生！ 行こうぜ！ アリス！」

「ええ、分かったわ。」

「私が飛び立とうとすると…」

「待て魔理沙。」

「慧音先生が私を呼び止めた。」

「ん？ どうした？」

「気を付けろよ。」

「おう！」

《 side out 》

〈幻想郷のとある草むらにて〉

《 side ??? 》

困った物だねー。月がおかしいと私の子供達が落ち着かないんだ。それもさらに夜が明けないと来たか。

別に私があの偽物の月を消し飛ばしてもいいんだけどねー。

ああ、でもそんなことしたら親友達から怒られるかな？

確かに私ら五人が動いたら世界のバランスが崩壊しちゃうからね。

のんびりと解決してくれる人を待つか！

幸いここ幻想郷には魔神達がいるしね。

親友の一人に魔神が好きなのがあるけど、変わってるね。

まあ私らにとつたら魔神も神も人間もみんな一緒に見えてくるんだけどね。

さてこれからどうなるんだろうね。いやー住みやすく最高だね！幻想郷は！

そう言いながら彼女尾災は触覚を揺らしながら立ちあがり偽りの月を眺めた。

《side out》

〈妖怪の山にて〉

《side 権》

私は休憩時間に入ったので妖怪の山本部の休憩室でお茶を飲んでいた。ラティオの馬鹿が媚薬を入れようとしたため私が自ら入れたお茶だが。

あいつ、料理は出来るけどすぐ混ぜ物をするから困る。だからあの家、ラティオの能力の名前から『Astral house』と呼んでるが、まあそんなことはどうでもよくて、私が食事を作ることになった。

あまり自信がないがラティオと天星様は美味しいといってくれるから嬉しい。

そんなことより先日から月が偽物にすり替わっていたが、まさか夜まで明けなくなるなんて：

まあ、今回は私になんの関係もないし別に異変に首を突っ込まなくてもいいか。博麗の巫女がなんとかしてくれるだろう。

ザワザワ：

ザワザワ…

ザワザワ…

ん？突然回りがザワザワしてきたぞ。

…

「天魔様!? どうしてこんな所に?!」

人だかりの中に恐らく大天狗と思わしき天狗二人を引き連れた天魔様が現れた。

まさか、あの滅多に人前には出ない天魔様がこんなところに来るなんて!

だ、誰か何かをやらかしたのであるだろうか?

私は驚きながらもお茶を啜っていた。

ん? なんかこつちに…て言うか私に向かって来ていないか?!

そんな事を思う私をよそに天魔様は私の前で立ち止まった。

「い、いかがされたのでしょうか?」

私の質問に彼女は…

「ほう、旨そうな茶を飲むではないか。」

「飲まれますか?」

私は紙のコップの中に茶を入れ渡そうとした。

「貴様!」

後ろの犬天狗の一人が私を止めようとしたがすぐさま天魔様に制された。

「ありがたくいただくとする。」

そう言い私からコップを受けるとゴクゴクとお茶を飲み始めた。

「うむ、予想通りうまかった。」

「光荣でございます。」

いや、何か他に何か目的があるはずだ。よもや私のお茶を飲みに来るためにここに来たわけではあるまい。

「うまい茶を貰って早々申し訳ないが頼みがある。引き受けてはくれまいか?」

「ここでノーと言えばどうなるのだろうか?」

考えるだけでも恐ろしい。

「御意。何なりとご命令を。」

「うむ! ありがとう! 私の頼み事は一つ! この夜が明けぬ異変を調査してくれ。」

『えー!!』

『あんな、無名の白狼天狗が!?!』

外野の反応は様々だった。



「お待ちください天魔様!!!」

突然甲高い声が響いた。

「下がれ!無礼だぞ!」

「まあ、良いではないか。どうした?山城。」

「はい。勝手ながらそのご命令、私に引き受けさせてはいただけませんか?」

「どうやら彼女も天魔様と面識が有るようだ。」

「して、なぜだ?」

「彼女には少しばかり荷が重すぎると思います。」

「予想通り私を庇ったわけでは無さそうだ。別に彼女に命令が行こうと私は関係ない。」

「むしろ万々歳だ!」

「ほう、そなたは私の人選に不満があるのだな。この天魔である私の。」

「いえ!決してそんなつもりでは!」

「…仕方ない。」

「お待ちください天魔様。彼女の实力は私よりも高い。それに彼女は私の危険を案じて申し出てくれたのです。悪気があつた訳ではありません。どうか寛大な慈悲を!」

「?!?!」

これには、音も驚きを隠せなかったようだ。

すると天魔様は申し訳なさそうに…

「…別に取って食おうと言う訳ではないのだ。だが私の意思は変わらない。」  
と言った。

「分かりました。では即刻調査して参ります。」

そう言つて私は立ち去ろうとした。

すると…

「犬走、これは貴様の判断に委ねるが、もし異変を解決出来そうならばしても構わない。例え出来なかったとしても罰するつもりはない。そして命の危険を感じたならば任務を放棄して構わない。」

…随分優しい条件だな。

そう思っていると彼女は続けて…

「最も、貴様にはそんな事がないと思うが。」

とどこかで見たことあるようなニヤニヤした笑みで言った。

…この人どこまで知っているのだろうか？

«  
s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
»

## 27. 永夜異変③

〈幻想郷上空にて〉

《side 椀》

まさか、天魔様が私に直接命令を下すとは…

さて、どこから調べようか。これだけ大きな異変だ。博麗の巫女も動いているはずだ！

まずは彼女を見つけよう。そして異変の元凶とその動機だけを聞いてさっさと帰ろう。

帰ったら文様がうるさいだろうな…

そうと決まれば聴き込み調査だ！

《森にて》

誰か手頃なやつはいないか？

ん？彼女はどうかだろう？

「その妖怪さん。ちよつとお時間よろしいですか？」

私は下で痛そうに頭をかかえている鳥のような翼を持った少女に声をかけた。

「いててて…なんですか？」

「この辺で博麗の巫女を見かけませんでした？」

「いや、見かけてないですけど…」

「どうやらハズレのようだ。」

「その代わり変な白黒の魔法使い見たいな格好した人と人形を操る魔女にはあったけど

…聞いて下さい！酷いんですよ!!」

「なんだなんだ?!

「私はただ歌の練習をしていただけなのに突然襲って来たんです!!」

「そ、それは災難でしたね。」

「うー、今度あったら仕返ししてやる!!」

「頑張ってくださいね。」

博麗の巫女の情報は無かったけどその代わりいいことを聞いた。

「ところでその人達はどこへ行きましたか？」

「人里に向かって飛んで行ったけど…」

「そうですか！御協力感謝致します。」

「そう言っって私は飛び立った。」

「へしばらくして」

人里か。困ったな入れないじゃん。

私は人里の前にある木の枝に座りながら途方にくれていた。人里の門の前には門番がいる。

なかなかの実力だ。それに強行突破はさすがにまずい。

「もしもし。」

ん？下から誰かが話しかけている。

視線を下に向けるとそこには緑色の髪と虫のような触角の生えたボーイッシュな少女が私を見上げていた。

「君……魔神でしょ？」

?!?!

今のは聞き間違えか?! いや違う！

「貴様。何者だ！」

私の間に彼女は…

「まあまあ、まず降りて来なさいよ。」

……あまり魔力を感じないからいいか。

私は安全と判断し地面に飛び降りた。

「まだ私の質問には答えていないぞ。」

「そうだったね。私の名前はリグル・ナイトバグ。よろしくね！」

.....

「嘘だな。」

「ありやりや。バレちゃった。まあ元々名前なんて無かったしこれが本名っちゃあ本名だけぞ。」

「別に私は自己紹介をしに君に合いに来たわけじゃないから名乗らなくてもいいよ。」

別に自負する訳ではないが、こいつ魔神を前に随分と余裕だな……

「早速本題に入るけどこの月を何とかしてくれない？」

「……何故だ？」

「うくん、うちの子供たちが困っているんだ。太陽の光がないと元気無くしちゃう子がいるからね。まあ一番の理由は私が月が好きだからって言うのもあるんだけどね。」

「そうか、出来たらやろう。」

「それやらないやつは常套句じゃん。」

「この幻想郷には博麗の巫女がいる。彼女が解決してくれるだろう。」

これは彼女の義務でもあり本望でもあるからな。

「確かにそうだね！それなら博麗の巫女なら迷いの竹林に向かったよ。」

……マジか。

「情報感謝する。所で貴様の種族はなんだ？本当に妖怪か？」

見る分には妖怪に見えるし妖力も感じる。

「ん〜：別に妖怪って訳じゃないけどね。種族名ってのはないな。あ！又聞きなんだけど確か君らが私の呼び名と私らの種族名みたいなのを考えてくれたらしいんだっけ。……ええつと……なんだっけ？」

私らが彼女の呼び名を考えた？それに種族名も？こいつさつき自分には本来名前が無かったとか言ってたな。名前をつけない風習があるのだろうか？聞いたことはないが……別にそこまで興味はないが。

私が飛び立とうとしたその時……

!!!

「思い出した。」

「どうやら思い出したようだ。思い出したなら聞いてみようか……」

「ええつとねー。君ら私の事を Lord of swarm<sup>大</sup> of swarm<sup>群</sup><sup>王</sup>って読んでるらしいね。」

……

……

……



「し、証拠は?!?!」

「うーん、キミは知っているかな？」

我らは徹底的に不干渉なり」

その言葉は!?!

「つてな訳でさようならー。」

「ま、待て！」

「ほえ? まだ何か?」

「彼女は?! Tyrantはどこだ?!」

私は厄災リゲルに問う。

「さあ。知らないね。探したら会えるんじゃない?」

そう適当に言い彼女はどこかえと行ってしまった。

《side out》

〈迷いの竹林にて〉

《side 魔理沙》

まさか、夜が明けなくなったのは紫と霊夢のせいだったなんて!

まあ、それはこの月の異変を解決しようとしていたから別にいいけど…

さつき私が異変の元凶だと思っていた霊夢にマスターパークを撃つたんだが…ま

さか真犯人のアジトを文字道理炙り出すとは！

やっぱり私は天才だな！

「魔理沙、そのまま集中して！誰かいるわ！」

霊夢が私に言う。

「言われなくても分かかってるぜ！」

私は再びミニ八卦炉を構えた。

「私は鈴仙・優曇華院・イナバ。この屋敷の主の為にもあなた達を食い止める。」

長身でうさぎ耳の少女がそこにいた。

「霊夢、魔理沙。私達がここで食い止めるから先に行きなさい。」

紫が私達に提案してきた。

「本当?! ありがとう。魔理沙! 行くわよ！」

「おう！」

頼んだぞ! 2人とも!

《 side out 》

《 side アリス 》

「さすがに2人掛りなら負けなと思うけど念の為聞いておくわ。何か秘策はない？」

私は紫に聞いた。

「もう少しで幽々子と妖夢が来るわ。少なくともせめて彼女達が来るまでは時間を稼ぎたいわね。」

なるほど。あの二人が来るのね。

「来ないならこっちからいくわ!」

そう言い彼女は弾幕を放った。

?!何?!この目の焦点が合わない感じは?!

「もう私の赤眼催眠にかかったのね!」  
マインドシエイカー

どうやら彼女の能力によるものらしい。

厄介ね!

だったら!

〈戦符「リトルレギオン」〉

私は剣を持った小さな人形を数体出し相手に突撃させた。

しかし彼女はその全てを避けようとする。

相手の能力上早く決着をつけなきゃいけないのに!

〈結界「夢と現の呪」〉

どうやら紫がスペルカードを使ったようだ。

彼女の放った2つの弾幕が弾け無数の弾幕となる。しかしよく見ると2パターンの

弾幕で攻撃しているようだ。

「さすが、幻想郷を作った賢者なだけはあるね。」

相手がそう言う。

紫の弾幕に加え私の人形も攻撃を加えることによつて3パターンの弾幕が彼女を襲うことになる。

このまま行けば！

そう思った矢先…

「あら、幽々子達が着いたみたいね。」

「もう来たの?! 思ってたより速かったわね!」

どうやら2人が来たようだ。

すると妖夢が…

「そのあなた降参するなら今のうちですよ!」

といった。

彼女の反応は…

「……………」

何も答えなかった。それどころか上空のとある一点に視線を向けているようだ。

「どこか見てるのかしら?」

幽々子が聞く。

「……やっぱり来たか。」

しかし小声で何か呟いただけだった。

何か来る?!?!?!

私達はとてつもない気配を感じた。

《side out》

〈時は少し遡る〉

《side 椀》

まさかここ幻想郷に五大厄災の一体が居たなんて。

……あれには私達魔神では敵わない。幸い奴らはさっきの言葉通り他の種族とは干渉しないようにしている。それは奴らがあまりにも強大な力を持っているからだが…。

ええい、もう考えるのはやめだ！私が慌てようがどうしようも出来ない。

今は任務に集中しよう。

〈迷いの竹林上空にて〉

迷いの竹林に着いたは良いが…

あそこに煙が上がっているな。

私は千里眼を使い火元を見る。

……

……

あそこにいるのは…八雲紫と名前は知らないが宴会の時にいた少女と…おや？冥界の女主人とその従者じゃないか。

あと一人居るな……

おいおいおいおい

お前もここにいたのか!!!!

どうしよう!?!身体の中から湧いて出る興奮が治まらない!!!!

早くアイツと一戦交えたい!!!!

《side out》

《side 紫》

何なのこの気配は!?!

て言うかこの気配って!?!

そう思う私達の目の前に何かが地面に衝突し小さなクレーターを形成する。

クレーターの中からは煙が上がり中の様子が少ししか見えなかったが間違いない!

衝突したそれは銀色の狼だ!

しかし彼女は私達には目もくれず先程まで私達と戦っていた鈴仙・優曇華院・イナバを見ていた。禍々しい瘴気をまといながら。

「お前も幻想郷にいたならなんで一言かけてくれないんだよ!なあ!」

彼女は嬉しそうに鈴仙に話しかける。

彼女は間違いない無く月の兎よ!まさか月の民は魔神について何か知っているの!?!

鈴仙から飛んでもない殺気が放たれた。まるでもう一体の魔神がいるかのような

……。

ま、まさか!?!

「お前に私がここにいたことがバレたら面倒くさくなるからでしょうが!!!ちよつとは頭

を使いなさい!!このバカ!!」

鈴仙は彼女に怒鳴ると同時に、銀色の狼の様に瘴気を体に纏った。

彼女は月の兎なんかじゃない!!間違いない!!彼女は!!

「言ってくれるじゃないか!まあとりあえず…」

「出会ってしまったものはしょうがないわね…」

魔神!

《left》「久しいな…」《left》「久しぶりね…」

「悪友!!!」

《side out》



## 28. 永夜異変④

〈屋敷内部にて〉

《side 霊夢》

紫達は任せろと行ったけど大丈夫かしら…

…大丈夫よね。彼女はこの幻想郷の賢者だしね。

「霊夢。」

魔理沙が私に話しかけてきた。

「何…。」

……誰かいる。

「誰かしら？」

私の問に目の前にいる人影は…

「良く来たね。殺されることも知らずに…。」

先程のうさぎ耳とはまた違う、今度は小柄なうさぎ耳が目の前にいた。

「誰だてめえ！」

魔理沙が彼女に問う。

「お前らに言う義理は無いね。」

どうやらやる気見たいね!

私と魔理沙は構えた。

しかし、次の瞬間!

ドゴオオオオン  
!!!!

何かが爆発したかの様な音が鳴り響いた。

「なんだぜ?!?!まさか紫達の方か?!?!」

「な、なんだ?!」

魔理沙はともかく目の前の兔が驚いているからもしかしたら紫が何かしたのかも…

いや、確証はないけど…:…違う気がする。

と言うかこの威圧感って!

《side out》

〈屋敷の外部にて〉

《side 紫》

まずい、非常にまずい。

まさかここで銀色の狼が出てくるなんて！それにいつもとは様子が違う！ひよっとして強い相手を見ると戦いたくなる鬼の本能見たいなものを持っているとか！もしそうなら厄介なこと極まりないわね！

私がそんなことを考えていると…

「ねえ、めんどくさいからどっか行ってくれない？目的の邪魔なんだけど。」

と鈴仙が銀色の狼に言う。

「つれないねー。ちよつと位闘ったってバチは当たらないだろ？」

と銀色の狼が返す。

「私あんたと違って忙しいの！ほらあっち行つた！シツシツ！」

…さすが魔神と言うべきか、あの銀色の狼相手に物怖じしないなんて。

「まるで私は暇見たいな言い方じゃないか！私だつて妖怪の山で哨戒任務やってんだぞ

！…ここ最近体がなまってしょうがない！」

…え!?妖怪の山!?まさか彼女は妖怪の山に住んでいるって言うの?!それならやはり白狼天狗の中に紛れてるの?!

「…あんた、変わったわね。自分より弱い者達の下に着くなんて…」

「私は平穩に過ごしたいんだよ！」

かなり重要な手がかりを掴んだわ。後は…

「アリス、幽々子、妖夢。今のうちに行くわよ。」

私はそつと3人に伝え、こつそりと屋敷の中へ入ろうとした。

しかし次の瞬間！

ジャリジャリジャリジャリジャリジャリ!!!

けたたましい金属音と共に紫色の鎖が至る所から飛びたし屋敷を覆ったかと思うと消えた。

間違いない！結界だ！

恐らく鈴仙の方が鎖を出したのね！それも私ですら簡単には入れないほどの大結界を！

「どさくさに紛れて入ろうとしないで下さい。このアホが来たので仕方なく最終手段を取ってるんです。恨むならこいつを恨んで下さい。」

そう鈴仙は私に話しかけた。

「誰に言って…!?!」

…どうやら銀色の狼は私達に今気づいたようね。信じられないことに。

「ま、まさかさっきの話の話を聞かれて?!」

顔は仮面で見えないけど多分真っ青になってるわね…

…しつかりと聞かせて頂いたわ。

「…で来るなら来てください。私が相手になりますよ。」

…恐らく私とアリス、そして幽々子と妖夢がまとめてかかっても相手にならないわね。どうすれば…

「八雲 紫！」

「な、何かしら!?!」

突然銀色の狼が私に話しかけてきた。

「提案がある！私があいつを何とかするから、さつき聞いた話は忘れてくれ！」

……：しやうがないわね。これ以外方法はないし…

「分かったわ。」

私はやむなく了承した。

すると、鈴仙の威圧感が更に増した。

そして威圧感が増したかと思うと突然巨大な門が彼女の後ろに現れ、その開いた門から無数の鎖が飛び出し銀色の狼に巻きついた。

そしてそのまま彼女を門の中へ引きずりこんだ。

我に返った時には私達の前から巨大な門も銀色の狼も鈴仙も消えていた。

あの巨大な門が開かれた時中からおぞましい悲鳴の様な声が聴こえた。

それも1つや2つなんてものじゃないほどに…

《side out》

〈大監獄タルタロス内部にて〉

《side 椀》

ここは大監獄タルタロス。目の前にいる彼女が作り出した魔神や神などを収容する空間。ここにはレベルが1〜5まであり、レベルが上がっていくほど凶悪度が増す。彼女はそんなイカれた奴らを数億年間1人で管理していた。そしてここはタルタロスのレベル4とレベル5の間にある巨大な空間。

にしても懐かしいなあ。全員まとめてここの最下層のレベル5にぶち込まれたんだっけ。

正直もう入りたくは無かった…

いやそんなことはない。

問題は…

「おい！タルタロス！いや今はなんて呼ばれてるんだ？」

私が彼女に尋ねると面倒くさそうに

「鈴仙よ。鈴仙・優曇華院・イナバ。あなたにこの名前を呼ばれるのは嫌だから本名でいいわ。」

今の名前にかんりの誇りを持ってしているとみた。

「おうおう！言ってくれるじゃないか！そんなに嫌か？何気にショックだぞ。」  
私がそうからかうと…

ビュン!!

何かが私の顔目掛けて飛んできた。

咄嗟に私は2本の指ではさみそのまま捉えた。

どうやら瘴気を鋭いクナイ状にして飛ばして来たようだ。

「違うしーあんたには本名を言つて欲しいだけだしー」

私が男だと惚れてたかもな。こんなモノ飛ばして来なかつたら話だけだ。

……やれやれ。

「お前…相当疲れてるな。」

…体は無事のようにだが、長い付き合いだ。

目を見れば分かる。精神的に色々溜まってるな。

「……………だから何？これは私の仕事なのよ。」

…それはそうだ。こんな大役を任せられるのは世界広しと言えどこいつだけだ。

だけど…

「お前の苦勞は私以上だ。ストレス発散の一環として私と闘わないか。」  
そう言うと彼女は俯いてしまった。

…ダメか？

諦め掛けたその時彼女は静かにこう言った。

「分かったわよ。」

よし来た！

《side out》





……普通ならな。

私は鎖を掴み引きちぎった。

「鎖で私の動きを封じようと無駄だぞ。て言うかお前知ってるだろ？」

「……なんか今ならアンタに効くかなって思った。」

そう言ったかと思うと彼女は飛び上がり両手からそれぞれ3本ずつ鎖を出した。その鎖の先端には先程飛ばして来たクナイの様な物が着いていた。

そして次の瞬間……タルタロスの右腕がブレた。

スパァン!!!

先程まで立っていた地面が文字通り弾け飛び、後に残ったのは3本の深い溝だった。

は、速い！

咄嗟に交わしたからいいものの、もし私に直撃していたら恐らく真つ二つどころか首と胴体と下半身が泣き別れしていただろう。くわばらくわばら。

「……なんで攻撃して来ないの？」

彼女は痺れを切らしたのか、私に聞いていた。

そんな彼女に私は一言こう言った。

「もうやった。」

そして続けて……

「自分の右腕を見てみる。」

「は？……」

彼女は攻撃して来た方の腕を見た。

そこには、しっかりと腕がついていた……手首から先のない腕が。

「い、いつの間に?!」

「どうだ？私も早いだろ？」

「……。」

「……なんか言ってくれよ。」

彼女は無言で腕の断面から鎖状の瘴気を伸ばし地面に落ちている自身の手を拾い上げそして繋げた。

「びっくりしたわ。」

本当かよ？

私はそう思いながら彼女の前まで跳び、たたき落とした。

?!?!?!?!?!?何か刺さって……

腕を見るとクナイが刺さっていた。その先には……鎖が連なっていて……落ちているタルタロスが握って……。

気がつくとも私が地面に激突していた。

「どうやら彼女が空中で体勢を立て直しそのまま鎖を引っ張り、私を地面に叩きつけたようだ。」

私は立ち上がろうとしたその時、腹部に突然衝撃が来た。

私はそのまま後ろまで吹き飛び…

「かハッ?!?!」

壁に背中を打ち付けた。

そしてそのままタルタロスに首を捕まれ、壁に押し付けられた。

メキメキ!

壁が軋む音がする。いや自分の骨か…

すると突然、タルタロスが右手を振り上げた。

その先には瘴気でできた馬鹿でかい鎌が…

「…あのタルタロスさん?本気?」

私が彼女にそう聞くと満面の笑みで…

「魔神は心臓を全て潰さないと死なない。だから平気平気〜。」

と…

いや、そうなんだけど! 限度って言うものが有るじゃん!

やばい! 本気で振り下ろすつもりだ!

彼女の鎌が私の首を捉えそのままかき切った……

かのように思われたが、私は咄嗟にその鎌を掴み事なきを得た。

突然の私の反応に面食らったのか一瞬、彼女の手が緩んだ。私はその隙を逃すはずもなく空いている右腕で彼女の顔を力いっぱいぶん殴った！

当然彼女は吹っ飛び地面を何度も跳ねた。そして勢いが止まる前に彼女の真上まで跳び地面に打ち付けるようにめいっばい殴った。

すると……

とてつもない音と共に地面が抜けた。先程まで滅多打ちにされていたタルタロスだったが腹部に刺さったままの私の腕を払い除けそのまま回転しながら私を蹴飛ばした。

私は空中でそのまま体勢を立て直し着地した。

「ちよつと!!監獄が壊れたらどうするのよ!!」

彼女は口から血を垂れ流しながら怒っていた。

「悪かったって。て言うかここは?」

私は見覚えの無い場所に立っていた。

「あんたと戦うためにちよつと監獄の構造をいじったの。上と下それぞれ5階位あるから。」

そうだ、こいつはラティオの様に自ら空間を作ることが出来るのだ。

…こいつ、私と戦うためにそこまでするか。

「な、何?ニヤニヤして。」

「いやー、素直に嬉しいなって思って…。」

私が言い終わらない内に彼女は向かって来た。

《《side out》》

〈屋敷内部にて〉

《《side 霊夢》》

「ちよ、ちよつと待って!?!降参!降参するから!」

私と魔理沙は、先程まで私達の邪魔をしていた兎…因幡 てると言ったっけ?彼女を倒した。

「余裕だったな！」

と魔理沙は言った。

彼女は私達に全てを話すと云ってきた。

どうやら彼女達のボスは月から来た姫らしい。

曰く数千年間この幻想郷に隠れていたらしい。

私は、彼女に聞いた。

「外の結界もあなた達が張ったの？」

「へ？結界？そんな計画聞いてないけどなあ。」

どうやら彼女は何も知らないらしい。もう一人鈴仙とか言う部下がいたけど……

「おい！外にもう一人仲間がいるだろ?!お前のボスはそいつを見捨てるのか?!」

「いや、そんなこと聞かれても知らないものは知らないって！」

彼女を責めてもしょうがない……

「さて、もう十分だろ？」

突然、てゐがそう言った。

「ええ、もういいわよ。」

「いやいや、そう言う意味じゃなくてさ……」

何を………まさか?!

「霊夢！前に誰かいるぞー！」

私は、視線を前に向ける。するとそこには赤と青の服を着た女が立っていた。

「あんたが月の姫の従者、八意永琳ね？」

「ええそうよ。」

すると魔理沙が彼女に向かって言った。

「お前ら！仲間を見捨てて何とも思わないのか！」

彼女は仲間を見捨てるやつが大嫌いなのである。

しかし、八意永琳は：

「なんのことかしら？私達を閉じ込めて逃げ場を無くしたつもり見ただけで結界を

張った意味はないわ。」

と、予想だにしない返答をした。

じゃあ、一体誰があんな結界を？

《side out》



〈大監獄4階層にて〉

さつきから下で凄い衝撃が来てるな。言ったことは無いが、て言うか行きたくもないが最下層の奴らが暴れているのか？

だとしたら都合がいい！作戦が成功すれば俺達は逃げれる上に、あのクソアマは俺達に構っている暇はないだろう。

そして俺はどさくさに紛れてあのクソアマをぶち殺す！

そうすればこの忌々しい監獄も、まるで悪い夢だったかのように消える！そうすればレベル4どころかレベル5の怪物どもが世界を荒らしてくれるだろう。

楽しみだ！楽しみでしようがない！

〈最下層 レベル5収容所にて〉

ん？監獄姫様が誰かと戦ってるな。誰だ？

これはこれは！王様じゃないか！暇つぶし観戦していよう！もちろん王様が勝つだろうけどな！

そう言つて彼女は天井を眺めた。まるで子供が絵本を読むかのように嬉嬉として。

「Ⅲ」

《  
s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
》

## 30. 永夜異変⑥

〈屋敷内部にて〉

《side 魔理沙》

「行くわよー！」

そう言い永琳は突然弾幕を撃ってきた、これまで相手にした誰よりも多く。クソ！かわすのに精一杯かよ！

私は霊夢の方を見た。彼女は私より速く弾幕を避け逆に弾幕を撃ち返したのだ。私ではまだ霊夢には届かないのか…。

いやいや?!そんなことは後回しだ。

「魔理沙！こいつは何とかするわ！あんたは月の姫を探して来なさい！」

霊夢が私達に言った。

「おう！任せな！」

そう言い飛んで行こうとしたその時…

「その必要はないわ。」

私の目の前には、思わず同性の私でさえ見とれてしまいそうなほど美しい少女が立つ

ていた。

「…なんて美しいんだ。」

思わずそんなことを言ってしまった。

「うふふ、ありがとう。そしてようこそ永遠亭へ。」

「ひ、姫様?!」

「あ、あんたが?!」

突然の出現に私や霊夢は疎か、永琳やてゐまで驚いていた。

「もうその位にして永琳。彼女達とは話せば分かり合えるわ。あなた達も結界を解いてくれないかしら? これからは話し合いで解決しましょう。」

そう彼女は交渉した。

「結界は私達が張ったものではないわ。あの結界の強度からすると紫すら入れないと思う。未だに彼女達が来ないのが証拠よ。」

「そんな?! じゃあイナバはなぶり殺しされるの?!」

そう彼女は酷く焦ったように聞いてきた。

「それなら大丈夫よ。紫もそこまでやらない筈だわ。」

「それならいいけど…。」

すると突然ものすごく小さな隙間が出現し…

『 霊……！聴こ……る?! 』

紫の声が途切れ途切れ聴こえた。

しかしやがて鮮明になり……

『 霊夢！聴こえる?! 』

とはつきり聞くことができた。

「紫?! 聴こえるわよ！」

『 本当?! 良かった！そつちはどうなってるの?! こつちでは今大変なことが起こつたわ！ここに私やアリスの他に幽々子と妖夢もいるの……！それからちようど今レミリヤと咲夜も到着したわ！』

どうやらあちらではかなりの味方が到着したらしい。

すると……

「こんにちは、妖怪の賢者様。」

そう月の姫は紫に挨拶した。

『?! 貴方は誰かしら?』

そう紫は彼女に聞きた。

「そうだったわ！あなた達にも名乗ってなかったわね。これは飛んだ失礼を……。では、」

そう言い突然正座をしだし……

「初めまして、私は蓬莱山 輝夜と申すものです。」

と名乗り頭を下げた。

「こんな所で話し合いをするのもなんですし、応接室へとご案内致します。永琳、お願いするわね。」

「了解致しました姫様。」

〈永遠亭、応接室にて〉

『では何から話そうかしら。』

「まずは異変の事よ。」

そうだ！まずはこの月をすり替えたことからだ！

「ええ、分かったわ。でもその前に……」

なんだ？

「イナバは大丈夫かしら？」

『……まずは異変の事を説明しなさい。その事は後で話すわ。説明が難しいの。』

説明が難しい？

「何を言ってるのかしら？」

それはそうだ、そんな反応になるだろう。

『……私達は彼女を殺してないわよ。』

「……では彼女の声を聞かせてくれないかしら？」

『……うっ……』

?!ま、まさか本当に殺つたのか?!

『……はあ、今から話すことは幻想郷の存続に関わることよ。』

と紫は言った。

「話を逸らさないで貰えるかしら？」

と静かに怒りながら輝夜は言った。

『良いから聴きなさい！これはあなた達の責任でもあるのよ！』

「……分かったわ。」

そして紫は霊夢に言った。

『霊夢。銀色の狼がまた現れたわ。』

「ええ、あの威圧感で気づいた。」

……あの時の衝撃か?!やっぱりアイツか!

「一つ質問いいかしら?銀色の狼と言うのは?」

「……そ、それは……。」

霊夢が回答に渋っていると……

『私が話すわ。』

そう紫が言い、なんと彼女は今まで私達が知っている銀色の狼や魔神についての事を洗いざらい説明したのだ。

「……それは本当かしら？ そんな化け物が居るなんて……まあ良いわ。今は信じてあげる。」

半信半疑のようだが信じて貰えたらしい。

「でもそれがどうしたの？ まだ私の欲しい回答は貰ってないわよ。」

『……次に蓬萊山 輝夜。貴方はあの鈴仙って子、どこで知り合ったの？』

「……あなた達になんの関係が……」

『いいから答えなさい！』

そう紫は声を荒らげた。

一体どうしたんだ？ いつもの紫らしくないぞ。

「……彼女は死の恐れのみならず月の都から逃亡して来たの、そして追放された私達の所へ来て匿って欲しいと頭を下げてきたわ。」

『……死の恐れね……馬鹿馬鹿しい……。良い？ よく聞きなさい！ 霊夢も、魔理沙も！』

「な、何？」 「わ、分かった。」



『鈴仙・優曇華院・イナバは、銀色の狼と同等もしくはそれ以上の実力を持つ魔神よ!!!』

「な、なんですって?!」

ま、マジかよ…。

驚きのあまり声を出せずにいる。

「……何を言い出すかと思えば…。」

『……その結界を張ったのは彼女よ。信じられないかもしれないけどこれが事実よ。』

「ねえ、紫。そっちで何があつたの?」

霊夢が1番気になることを紫に聞いた。

『私達が鈴仙と戦っている途中に突然銀色の狼が飛んで来たの、そしたら彼女達は二三言会話していたわ。私はその隙に屋敷の中に入ろうとしたは、でも突然至る所から鎖が出てきて屋敷を覆ったのよ。すると意図も簡単に私ですら干渉出来ない程の結界ができていたって言う訳。』

もし、それが本当なら…:

「お、おい！ならそいつらはどこ行つたんだ?! まだそこで戦っているにしては静かじゃないか?!」

『…突然、鈴仙の後ろに巨大な門が出現したかと思うと、門の中から出てきた鎖が銀色の狼に巻きついてそのまま引きずり込んだわ。気がつくつと鈴仙すらいなくなつてた…。』

それじゃあ、どうしようも出来ないじゃねえか!

「…あなた達の茶番に付き合つてられないわ。早く本当の事を言わないと…。」

「お待ちくださいい姫様!」

突然永琳が言葉を発した。

「私には優曇華院について少しばかり思い当たることがあります。」

「彼女は私の弟子です。そのためこの永遠亭の中では私が一番彼女と接しています。」

「彼女は度々いなくなる事があります。そして毎度決まつて、疲れ果てた様な目をして私の元へ来ます。どこへ行つていたのかと聞くと、いつも誤魔化して来るのです。それも例え私が叱ろうとしてもです。ある日彼女が小声で裂け目をどうしようと言っていました。その時は奇妙に思つたのですが、後日彼女が抜け出した時にこつそりと彼女について行きました。しかしある地点で私は彼女を見失つてしまいました。その日は諦めて永遠亭に戻りました。ふと永遠亭に着くと鈴仙が歩いていった竹林から威圧感を

感じたのです。私が戦慄を覚える程に。私が急いで行こうとすると彼女は何事も無かったかのようにゆっくりと歩いてきたのです。しかし、いつもの様に疲れ果てたような目はしてなく何か思い詰めた様な表情をしていました。」

戦慄を覚える程の威圧感：銀色の狼の時と同じだ。

「…そんなことがあったのにどうして言ってくれないのよ！」

輝夜がそう永琳に怒った。

「…申し訳ありません！私はどうしても弟子の鈴仙を信じていたかったです！」

「その話は後にしてくれない。今はどう脱出するかについて話し合しましょう。」

確かにここで喧嘩していても何も始まらない。

でも…これからどうすれば…

《side out》

### 3 1. 永夜異変⑦

〈監獄内にて〉

《side 椀》

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…」

あれから、私とタルタロスは引き続き戦ったが私も彼女も息が上がっていた。

おそらく彼女が創り出したこの監獄の特性が原因だろう。

この中にいると魔力がの消耗が普段よりも激しくなる。それは囚人達が暴れてもすぐに沈静化させるためである。

しかし、監獄を創り出した彼女自身も例外ではないらしい。

「なあ、ちよつと休憩にしないか？」

私は彼女に提案した。

「ええ、良いわよ。」

「少し話さないか？」

続けて彼女に言う。

「何が聞きたいの？」

…確かに聞きたいことがあり過ぎて困る。

…だがまずは仕事からだ。

「…任務でこの異変の偵察を命令された。何の為か教えてくれないか？」

彼女は少し考える素振りを見せると…

「もし、貴方がこの異変を強引に解決しようとしなければなら良いわよ。」

と、言った。

「分かった！」

「…そもそもこの異変は、私達が月を偽物に変えたのが始まりよ。」

…月を偽物に変えた？

あれ？じゃあ…

「夜が明けないのは？」

「私達じゃないわ。博麗の巫女達よ。理由はよく分からないけど…。おそらく異変を短期間で解決したかったのではないかしら？」

……焦ってもいいことないのにな。

「じゃあ、そもそもなんでこんな異変を？」

「…それは、私が月の民から追われてることが発端よ。」

「…月の民。」



「お、おい！どうしたんだよ!? な、なんなんだこの音……!」

私は言いかけて止めた。気づいたのだ! この音、いや、この音から発せられる魔力は  
!

アイツだ! あの女神<sup>クセス</sup>が何かやったのだ!?

「う……えーレベル4が!!」

タルタロスが頭を抱えながら言った。

そして……

「助けて……ヴァナルガンド……」

そう弱々しい声で私の真の名前を読んだ……

私はそつと微笑み……一言こう言った。

「任せろ!」

《《side out》》

〈レベル4 収容所にて〉

《《side  
???》》

ついにだ！ついにあの方が計画を実行してくれた！我々をこんなクソ見たいな場所から出してくれたんだ！

フハハハハ！！もう自由だ！殺そうと奪おうと俺達の自由だ！！

早く！早くあのクソアマをぶち殺してえ！

そして彼は監獄の主を探しに1人下の階層へ降りた。

伝説の化け物がこちらに向かっていることも知らずに：

《side out》

〈永遠亭前にて〉

《side 紫》

私達がどう屋敷の中へ入ろうか悩んでいたその時！

突如、結界が消滅した。

「今の内よ！」

私はその場にいた全員に声をかけ屋敷に突入した。

〈永遠亭内部にて〉

私達は屋敷を飛び回り霊夢達に合流する事に成功した。

「霊夢！」

「紫?!入って来れたのね!でもどうやって!？」



「急に結界が消えたの！」

私は霊夢に説明した。

すると突然永琳が立ち上がった。

「な、なんなのこれは?! 永遠亭に他に強力な反応がいくつも向かってきている！」

「まさか!?! 銀色の狼と鈴仙かしら?!」

しかし返ってきた答えに私は戸惑いを隠せなかった。

「いや、数が違うわ!?! どうやらやる気見たいね! 姫様は避難を！」

「いいえ私も戦います！」

そして私達はついにこちらに向かってくる何かと対面することとなった。

それらは、どいつも強力な力を持っているようだった。

「クヒヒヒヒ!! ここには食いもんも酒もいっぱいあるぞ！」

「それに女もいる！」

「宴だ、宴だ！」

不味いわねここにいる全員で向かってても勝てるかどうか分からないわ。

「八雲 紫。1つ提案があるのだけれどいいかしら？」

そうレミリアが切り出した。

「我々が数名で散らばって戦うのはどうかしら? ちょうど五体いるみたいだし2人で1

人を相手すれば勝機はあるかもしれないわ。」

「ここで全滅するよりかはマシか…」

「分かったわ！散開！」

そう言い私達はそれぞれ別々の方向へと逃げた。

《《side out》》

〈タルタロス内部にて〉

《《side 脱獄犯のリーダー》》

俺達は6人で悪逆の限りを尽くしていくつも国を滅ぼした。

しかし、ある日俺達はあの忌々しいタルタロスとか言う魔神に捕まり数十億年もの間

この牢獄に繋がれていた。

しかしそんなある日、俺の頭の中で誰かが話しかけてきた。

『逃げたいかしら？復讐したいかしら？』

その声は俺にそう告げた。

もちろん俺は了承した。最初は怪しんだが次第にそんな気持ちも薄れてきた。

そしてその声は俺に作戦の内容を打ち明けた。それは予めこの牢獄に穴を空け、タル

タロスが弱った隙に脱出するというものだった。

まさかこんなに上手くいくなんてな!!

俺は嬉しさのあまり飛び跳ねながら歩いていった。すると  
「お前か？脱獄したバカは。」

目の前に白い犬の耳と尻尾を持った女が立っていた。

「なんだお前？俺の邪魔をするのか？どけ？殺すぞ？」

俺は俺を見てもビビらないその女に言った。

いや…

「やっぱりお前を殺す。いい声聞かせろよ？雌犬！」

どうやって痛めつけようか…まずは爪を全て剥いでやろう！

そう決意し俺はその女に飛びかかった。

すると…女が息を吸ったかと思うと

「私は！狼だ！！！！！！」

そう俺に怒鳴った。俺は爆風と錯覚するほどの圧に負け後に飛ばされた。



……罪を犯したとは言え流石に可哀想だ。  
せめて一撃で葬りさろう。

私は右手で突進してきたそいつを止め、8メートルはあるそれを獄炎で焼き尽くした。

後には骨すら残っていないかった。

こいつみたいな目に遭ってる奴がいたら迷わず殺そう。他は捕まえよう。  
そう思いながら先へと向かっていった。

《side out》

## 3 2. 永夜異変⑧

〈永遠亭内部にて〉

《side レミリア》

私達は作戦通り敵を分散することに成功した。

そして私と咲夜の目の前にいるのは…

「やった〜ラツキー！吸血鬼じゃないか〜。」

手足が長く首に3つもの関節がある男と対峙していた。

「俺も血をすするのが大好きなんだ〜。手足を引きちぎってよく。流れ出る血を汲み取りながらこうぐびぐびと…。そしてしめに心臓を喰うんだ。」

「お前らも俺に食われるよ。吸血鬼の血なんて飲んだことないぜ！飲ませろよ！なあ！飲ませろよ!!」

発言は三流の妖怪の様だけど…

実力はかなり有るわね。

「ねえ、あなた達は何者なの?」

「俺達?俺達はなあ、自由を愛するもの達だ!なのによお!あのクソうさぎ俺達を閉じ

込めやかっただんだ！ああ!!ムカつくムカつくムカつくムカつく!!」  
かなりイカれてるわね。

「だがアイツはお頭が殺しに行った。俺達に自由になれだつてよーやっぱり良いお頭だぜ！」

そして次の瞬間男の後ろに大量ナイフが出現した。

咲夜が放った物だ。

「なんだこれ？」

な?!

出現したナイフは一瞬で消えていた。

その代わりこの男の手中に大量のナイフがあつた。

「そんな?！」

咲夜が驚きの声をあげる。

「お前か?弱い人間のクセに?!?!?!」

男が突然怒り出した。

不味い咲夜が危ない!

男は突然腕を振り下ろした。

すると咲夜に向かって斬撃が飛んで行った。

「咲夜！危ない！」

私がその声をかけた。すると咲夜は時を止めたのか別の場所へ出現した。そして斬撃は壁へとあたり……

文字通り壁を消し去った。壁はドロドロにとけ煙をあげていた。

…毒か？

「ちよこまかと動きやがって?!」

動きが早い上に毒まで使うだなんて…

いったいどうすれば…

《side out》

《side 永琳》

前々からおかしいと思っていた。私の所へ来た時もどうやって地球へ来たのかも教えてくれなかった。

でも彼女は私達を博麗の巫女達から護る為に結界を張ったに違いないわ。

でも今は…

「ふむ、お前達は3人か。当たりじゃないか！」

この目の前の男を倒さなくてはならない。

先程から弾幕が彼の体を通り抜けてしまう。



「残念ながら私は別次元の存在だ。その場においてその場にいない。だからこんな事もできるとだよ。」

彼は私の方へと突進し、私の心臓辺りへと触れようとした。

「危ない！永琳！」

「姫様!!!」

私を庇って姫様が身代わりになってくれた。その男の腕は姫様の胸を貫いていたが透過しているようだった。

しかし、次の瞬間彼が腕を引き抜いたかと思うと姫様の心臓が外へと引きずり出された。

「貴様ア!!」

なんてことを！

「私は大丈夫よ永琳。だって死なないもの。」

彼女はそう言うもぽっかりと空いた穴から血が吹き出していた。不死身とは言え相当痛いはずだ。

こいつには後悔させてやる！

《side out》

へタルタロス内部にて

《side タルタロス》

……………痛い。

頭が……………割れそうだ。

仕方ない……………。

この状態になるのは嫌だけど…………

背に腹は変えられない！

突如彼女の口元に瘴気が集中した。口元だけでは無い、全ての四肢に瘴気が集中したのだ。

黒い塊だったものは形状を変え……

口元にあったものはトラバサミの様な形の口へと変形し両腕の瘴気は金属の鋭利な刃物が3つ付いた様な鉤爪へととなり、両足の瘴気は脚そのものを包み込み巨大な釘の様な形状へと姿を変えた。

そしてその背中からは衣服を突き破り無数の鎖が飛び出した。しかしその鎖の先にはクナイだけではなくアイアン・メイデン、無数の棘のついた車輪、ギロチンなど数え切れないほどの拷問器具、処刑器具が繋がっていた。



い。」

《《 side out 》》

〈永遠亭内部にて〉

《《 side レミリア 》》

「あんれ〜？もう終わりか？」

私と咲夜は満身創痍で立っていた。いや、立っているのもやつとの状態だった。

?!?!何かとんでもないものが来る!?

私はとてつもない威圧感を感じた。

こいつだけでも厄介なのに次は何?!

ドゴン!!!

爆音と共にそこに現れたのは凶悪な姿へと変わった鈴仙だった。

「て、てめえ…?!」

鈴仙は男を見たかと思うと…

「グルルルルル!!!」

うねり出し…

「グオオオオオオオオオオオオ!!!」

空気が揺れる程の咆哮をしたかと思うと男を地面に叩き潰した。

「グエ!?!」

かなりの力で叩き潰されたのか男は両腕がもげた様だ。

すると男の倒れている床から黒い沼のような物が出現し男を飲み込んでいった。

私は男から視線を逸らすといつの間にか鈴仙は消えていた。

《side out》

《side アリス》

なんてパワーとスピードなの?!

「アリス? まだやれるか?!」

「行けるわ!」

さつきからこの口のない男、私達を弄んで居るようにしか見えない。

?!?!

「魔理沙! 構えて! 何か来る!」

「分かってる! なんなんだいったい?!」

異常な気配を感じた方向を見るとそこにはなんと鈴仙が立っていた。

「グウウウウ!!」

彼女は唸ると次の瞬間消えていた。

突然後ろで爆発音が聞こえた。

振り向くとそこには男が腹を鈴仙の足についた武器で貫かれていた。

彼女が足引き抜くと男は血を嘔き出しながらそのままずり落ちた。

落ちたそこには穴が空いておりそのまま穴をとうして消えたのだ。

「おいーお前…?!?」

魔理沙が声をかけるも衝撃波と共にどこかへ消えた。

《 side out 》

《 side 紫 》

参ったわね。

この溶けた肉塊の様な巨大な男。どれだけ攻撃しても吸収されて跳ね返ってくる！

?!?!

突然私の目の前を何かが遮った。

私の身長 of 2 倍あるそれは間違いなく鈴仙だった。でもなんでこんな姿に?!

彼女がまるでトラバサミの様な口を開いたと思うと。

ゴオオオオオオオオオオ  
!!!!

開かれた口から黒い炎が火炎放射器の如く放出され男を覆った。

「ぎやああああ!!!」

?!?!まさか効いてる?!

すると彼女は火を噴くのをやめ黒焦げになってもまだ生きている男を鎖で繋ぎあの門へと引きずり込んだ。

「待ちなさい!!」

霊夢が声をかけるも無視して何処かへと消えてしまった。

《side out》

《side 幽々子》

「ウケケケケ!!俺は何度死のうが蘇るんだよ!」

私達は両手が鉤爪の男と対峙していた。

私の能力で命を絶とうが妖夢の刀できり刻もうがそのまま再生して復活してしまう。

そのうち私達の方が疲れてしまった。

「次はこっちから行くぞ!!」

男が私目掛けて切りつけてきた。

それと同時に天井を突き破って何かが落ちてきた。

姿形が違えど間違いない鈴仙だ!

「な、なんだお前?!」

男が驚いて表的的の的を彼女に変えた。

しかし、彼女から伸びている鎖に刺され拘束されてしまった。

「て、てめえは！」

男が何かを言おうとするも鈴仙は突如現れた門の中へ彼を投げ入れた。

次の攻撃が私達に向くと思つたが彼女は何もせずたまたま近くにいた妖夢を一瞥し  
とこかへと去つて行つた。

《side out》

《side 輝夜》

私と永琳が不死身な為、勝負が一向に決まらないようだった。

でもこのまま続けたくはないわ。

だつてもものすごく痛いのももの！

どうにかしないと……?!?!

考えを巡らせると突然強烈な威圧感を感じた。

視線の先には変わり果てた鈴仙が立っていた。鈴仙は私達を見ると驚いた様子だつ  
た。

「う、うどんげー！」

永琳が叫ぶと彼女は顔を逸らしてしまった。



「き、貴様は、忌々しき魔神タルタロスではないかか!!?!?!?」  
男は酷く怒った様子で鈴仙を襲った。

「逃げて！イナバ！彼には攻撃が通ら……」

私がいよいよ終わる前に鈴仙の腕がぶれた。

すると男が爆発したように小さくバラバラなっていた。

どうやら鈴仙がその腕で切り裂いた様だった。

私達が今まで手も足も出なかった相手にだ。

どうやら本当らしい。

彼女は……

すると突然永琳が叫んだ。

「うどんげ！私の元を去るのは1人前になった時だけです！だから師匠としてこのまま修行を投げ出すことは許しません！」

その言葉を受け彼女のトラバサミの様な口がゆつくりと開き……

「ですが私は！」

彼女が言い終わる前に私はこう言った。

「魔神だからなんだと言うのかしら？貴方は私達の家族鈴仙・優曇華院・イナバよ！」

横から傷だらけのてゐが……

「帰ってこいよ。また落とす穴に落としてやるから。」

と言った。

「みなさん……ごめんなさいそして……ありがとうございます!!!」

彼女がそういうと手足の凶器は消え、いつもよく見るイナバの姿に戻った。

《side out》

へタルタロス レベル5 とある檻にて

《side ???》

監獄の姫様、どうやら幸せになったみたいだな!

どうやら私ももう脱獄する必要は無くなったみたいだな。

後はゆっくり刑期が終わるのを待つか…

……ん?

な?!

向こうから見覚えのある白い狼の耳と尻尾を持った人が歩いて来た。

「おーい!元氣してるか?ファフニール!」

「お、王様?!こんなとこまで来たのか?!」

彼女は私の檻の前で座った。

「おう！お前よく脱獄してたのは、本当はあいつのためだろう？」  
「どうやら彼女には全て見透かされていたようだ。」

「いやはや流石王様！私めの考えなどお見通しだったとは。」

「いや、それほどでも。…ありがとうな。アイツのことを思ってくれて。」

「王様と彼女は親友同士じゃないか！家臣である私が彼女を助ければアンタも喜ぶか  
なって思つての行動だ。」

「それでもありがとう。」

……参つたなあ。忌み嫌われる私が礼を言われるとむずかゆくなつちまう。

「とまあ、お前の刑期は私がアイツと相談してくるよ。」

「そう彼女は立ち上がつ……」

「えっ?!そんなことまでしてくれるのか?!」

「当たり前だ！私はお前らの主だからな。」

「そう言いながら去っていく……」

「あ、そうだ！」

何かを思い出したかのように彼女は立ち止まった。

「アイツは親友じゃない悪友だ！」

……やっぱり王様と監獄姫は仲が良いな……。

《  
s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
》

## 33. 永夜異変⑨

《side 鈴仙》

私は月に行った理由、それは私の監獄と月を繋ぐ亀裂が出来てしまったことが原因である。

私はそこで亀裂を塞ぐ為にあらゆる手を尽くした。しかし私にはどうすることも出来なかった。

そんな中月だけが流れ700年もの時が流れた。私が最も危惧していたことが起こった。

もうひとつの亀裂が出来てしまったのだ。

当時私は月での活動をしやすくするため月の軍隊に入った。恐らくこれは私が今までの中で一番の過ちだろう。

そのせいで、私は軍隊を辞めれずにいた。

しかし、地球にある亀裂の方が深刻だった。

その為私は軍隊を抜け出し地球に飛び降りた。

そしてその亀裂を見つける為にまたもや同じ過ちをしてしまった。

私はあろう事か月から地上に追放された姫と月から逃亡した賢者に匿ってもらおうように頼んだのだ。

そして、彼女達は私を家族同然に接してくれ新たな名前までくれたのだ。

私はそんな彼女達にいつも罪悪感を感じていた。

でも……もう何も隠さなくてもいいんだ……。

《side out》

〈永遠亭 宴会の席にて〉

《side 霊夢》

……ゴクゴク。

私は杯に入った酒を飲み干した。

私は屋敷の屋根の上に座りしたで酒を飲み交わしている皆を眺めた。

私の隣には輝夜と永琳、そして紫がいた。

「……で？アンタらはこれからどうするの？」

私は輝夜に聞いた。

「ん……。それなら永琳がお医者さんをやるのはどうかしら？彼女は医学の天才よ。」

私は紫を見た。

「良いわよ。」

「ありがとう。」

どうやら彼女達のこれからは決まった様だ。

そして私は最も聞きたかったことを聞いた。

「鈴仙はどうするの?」

「どうするつて? 今まで通り私達と暮らすわよ。彼女が居なかつたら永遠亭も回らない

しね。」

「そう…。」

私が、そう答えると彼女は杯に口をつけた。酒を飲み干したのかすぐに…

「イナバー! ちょっとおいでー!」

と鈴仙を呼んだ。

「はーい! たいまー!」

そんな声を聞いたと思うとすぐに鈴仙がやってきた。

「お待ちせしました。」

「うふふ。そんなに待つてないわ。」

「イナバ。聞きたいことがあるのだけれど。」

「はい。なんでもございませうか?」

「あなたには本当の名前はあるのかしら?」

輝夜が彼女に聞く。

「……はい。私の本当の名はタルタロスです。」

「…私もそう呼んだ方がいいかしら？」

すると意外な答えが帰ってきた。

「いえ！お師匠様と姫様にはこれまで通り鈴仙・優曇華院・イナバの名で呼んで欲しいです！この名は私の宝物と言っても過言ではありません！」

「そ、そう？ありがとうね。」

そして彼女は続いてこう聞いた。

「あなたの本当の目的は？」

「…私は過去に大罪を犯した者を収容する異次元の監獄の主をしていました。しかしある日を境に月と地球に裂け目を入れられてしまいました。私の本来の目的はその2つの開けられた裂け目を埋めることです。」

次に口を開いたのは紫だった。

「つまりその裂け目のうち1つが幻想郷にあるのね？」

「はい。しかし…」

彼女はとんでもないことを言い出した。

「私はその裂け目をどうする事も出来ないようです。」



なんですって?!

それは、もしかしたらまたあの化け物たちが出てくるかもしれないってこと?!

「いやー。そりや大変だな監獄姫! いつもご苦労さん!」

そんな事を誰かが:

私達はすぐ様後ろを振り向いた。

そこには短い黒髪に褐色の肌、角、そしてまるで蛇の様な目をした少女が酒を飲んでいた。

その少女の右腕には「Ⅲ」と彫られた入れ墨があつた。

こいつ……とんでもなく強い! 幸い他の誰にも気づかれていないようだ。

「あんた! 何者?!

彼女が答えようとしたその時:

「ファフニール!!! またなの?!?! もういい加減にしてくれない?!?! いつもいつもいつも!!! 好き勝手に脱走なんてしてくれちゃって!!! なに?! 喧嘩売ってんの?!?!」

鈴仙が金切り声をあげた。

「まあまあ、そんなにカリカリすんなよ。酒でもどう?」

「いらんわ!!! 早く戻れ!!!」

そんなやり取りを私達は呆気にとられながら見ていた。

「イ、イナバ?この人は誰?」

私達の気持ち代弁して輝夜が答えた。

「コイツは邪龍ファフニールです。かつて魔王と共に世界を滅ぼした使徒の1人です。その為私の監獄の最下層であるレベル5の檻に入れてたんですが!!!」

「いつもいつも脱走しやがるんですよコイツは!!!」

「いやー。閉じ込められると無性に飛び出したくなるんだよなあー。」

…鈴仙も苦勞してゐみたいね。

「あんた馬鹿なの?!いつも言ってるけど脱獄したら二千年加算!これは原則変わらないわよ!あんた以外の使徒所か魔王すら出所してるのよ!!!」

…今なんて。

「ちよ、ちよつと待ちなさい!魔王が出所?!」

私は鈴仙に聞いた。

「え?ええ、そうだけど。あ!彼女は罪を償ったし元々あれは彼女の意思じゃないから大丈夫よ。ほら、あなた達も会ったことあるわ。」

嫌な予感がする。

「ひよつとして白銀色の狼のしっぽと耳をしてる?」

「ええ、そうよ。」

.....

私は唾然とした。いや、元々そんな気はしていたけど！

そう言えばあれから全然見てない。

「彼女は何処に?!」

「あれ? そう言えば見てない。」

「ただ... また逃がしてしまった。」

「お困りの様だね皆さん! アタシ、王様から手紙貰ってまーす!」

突然声をあげたのは邪龍だった。彼女は手紙を取り出すと読み上げた。

「幻想郷の皆様へ」

今頃私の話で持ちきりでしょうね笑。

まあそんなことは置いといて:

タルタロス、交換条件がある!

ラテイオとエルマの後継者が亀裂を塞げるそうだ。

亀裂を塞いでやるからファフニールを解放してくれ。

あと、囚人一人ぶつ殺しちまったけどそれはすまん。

優しいお前なら許してくれて信じてるぜ。

親愛なる隣人 銀色の狼より」

……………なんだろう。なんかムカつく。

「…八雲様。」

「何かしら？」

「彼女の本名をお教えしましょうか？」

「…よろしく頼むわ。」

「ヴァナルガンドです。」

「どうやら彼女もイラついているらしい。

「ファフニール！ 貴方は釈放よ！ 何処へでも行きなさい！」

「オツスオツス！ その前に…」

「その美しい姫さんとそこのお医者さん、ちよつと耳を貸してくれないか？」

何か輝夜に言いたかった。ことがあるらしい。

「何かしら？」 「何ですか？」

「……………てなわけですらよろしくな。」

「分かったわ！ ありがとう！」

「本当にありがとうございます。」

ど、どうしたのかしら2人ともファフニールに凄く感謝している…

「な、何を言われたのですか？」

鈴仙が不安げに聞く。

「秘密！」

何やらしい事を聞いたらしい。

《 s i d e o u t 》

### 34. 永夜異変⑩

〈永遠亭 宴会の席にて〉

《side 小悪魔》

「本当によろしかったのですか？何もしていない私まで宴会に参加して…」

私はお嬢様達から誘われ宴会に来ていた。

「それなら私もよ。」

パチユリー様は本を読みながら私にそう言った。

しかし、私は気づいているが彼女は本を読んでいる振りをして私を監視していることが多い。

まあそれは置いておいて。

「何か取ってきましようか？」

私は彼女に聞く。

「なら、お菓子を取ってきてくれないかしら？」

彼女にしては珍しい甘いものか…

「了解しました。」

私は返事をし彼女から離れようとしたその時…

私はある1組に釘付けになった。

その先には…

「は〜い! あ〜ん。」

「あ〜ん。モグモグ。」

「美味しかったですか?」

「ん!」

「良かった!」

「ゆーこ! よーむ!」

「ふふ、もう私達の名前も言えるようになったのね。」

「んー!」

まさか!?! そんな?! だって彼女は…

「? どうしたの? 小悪魔? そんな風に突っ立って。」

「パ、パチュリー様! 彼女達について何か知ってますか?!」

私はパチュリー様に聞いた。

「え? 彼女達は冥界を管理している亡霊とその従者よ。もう1人の子供は知らないけど

…」

彼女、シロギーについては知らないのか…

「挨拶をしてきても良いですか。」

私は彼女に問う。

「い、良いけどその前に…。」

私は彼女から許可を貰いすぐにシロギーの元へ向かっていった。

「…私のお菓子は？」

「あの、少しいいですか？」

私は彼女達の元へ到着し声をかけた。

「？何かしら？」

ピンク色の髪の亡霊が言った。

「初めまして、紅魔館の図書館で司書をしている者です。」

「あら、初めまして。西行寺 幽々子よ。冥界の管理をしているわ。」

「私は魂魄 妖夢。幽々子様の従者をしているものです。」

私はシロギーに視線を向け聞いた。



「…この子は…。」

「この子はシロギーよ。貴方は魔神でしょう？彼女について何か知らないかしら？」

「…この人私の事を知って?!

「ああ、警戒しなくてもいいわよ。あなたが幻想郷に何もしなければ敵対はしないわ。」

そう笑顔で言ってきた。

なるほど食えないやつだ。

「…彼女は私の親友です。何かあったのですか？」

「それはね…」

彼女は今のシロギーの情報を教えてくれた。

「…そんな事が…。」

「そうよ、だからこの子は私達と暮らすことになったわ。」

「それは良かったです。」

本当に良かった。

「話は済んだかしら？」

戻ってきた私にパチュリー様は聞いてきた。

「ええ！もう大丈夫ですよ。」

「……そう。……いい加減貴方の名前位教えてくれないかしら？」

……

「……はあ。教えてくれないならいいわ。」

「………バアルです。」

「……そう。ならついでに教えてくれないかしら？なんで私の下についたの？利用価値があるから？」

……

「私を召喚した時の貴方、とつても寂しそうでしたよ。」

「そんな女の子を私は放っておけないですよ。」

「?!」

「さて！お菓子でしたね！今お持ちします。」

私は唾然とする彼女を余所にお菓子を取りに行った。

《 side out 》

やっぱり、月を見ながら飲むお酒は違うね！

あの魔神に頼んでおいて良かったよ。

……にしても他の奴らはどこにいるんだろう？  
元気にしてるかな？

そう思いながら厄災リッグルは酒を飲み干した。

〈宴会から数日たったある日〉

《side 楯》

あれから、異変の騒動も徐々に収まり何時もの平穩が戻ってきた。

私はラティオと天星先輩を引き連れて竹林にやってきた。

「えーっと、確か……お！あつたあつた！」

私達の目の前には完全に開いてしまった牢獄へ繋がる亀裂があつた。

「……犬走、どうやら私一人では無理な様だ。塞ぐ事は出来るが如何せん私の場合は術式で塞ぐため破られやすい。……これでは根本的な解決にはならないだろう。ラティオ殿はどうだ。」

「……可能ですよ。少々強引ですが、主様のご命令に比べたら大した事はありません。」

強引？

「待て、何をするつもりか聞いてもいいか？」

「それはですね、この忌々しい空間を破壊して私の世界に作り替えるのです！」

は?!?!

「ラテイオ殿！そんな事をしては中にいる囚人が脱走してしまう！」

ま、まずい！ラテイオは先輩の言葉を無視してやろうとしてる！

次の瞬間ラテイオの腕が輝き出したかと思うと……

光が消えた。

「…主様。私の能力がこの世界に干渉しません。」

彼女は驚いた様子で私に言ってきた。

「当たり前でしょ！そんなんで私の監獄がどうこうなる訳無いでしょ！」

突然私達の後方から気配を感じた。

「お？タルタロス、来たのか！もうちよつとしたら塞げるからちよつと待つてな！」

私は彼女にそう言った。

「塞ぐつて…アンタら苦戦してる様に見えるけど？」

うっ。

「その亀裂には何か有るみたいなの。私が修復してもどんどん壁が薄くなって穴が空いてしまうみたいなの。幸いその穴はそれ以上大きくなることはない見ただけ。」

「…正直言うとは私は空間関係の魔術は全く分からない。あとはこの3人に託すしかないな…。」

「…：広がらないなら別に塞ぐ必要は無いのでは無いか？」

天星先輩が突然そんな事を言い出した。

「な、何言ってるのよあんだ。」

タルタロスは呆れた様子で彼女に聞いた。

「門をつけるのはどうだろうか？下手に亀裂を塞ぐよりも手っ取り早いし頑丈なものにすれば心配はいらない。」

「そうか！その手があったか！」

「それなら私も手伝える。ラティオ殿も一緒にどうだ？」

「分かったわ、私も手伝う。」

よし！これで解決しそうだ。

〈数十分後〉

結構長い時間がかかったな。

私達は完成した門を見上げたが…

「なんと言うか…：禍々しいな。」

私はタルタロスにそう言った。

「そう？ 私はカッコイイと思うけど。」

…相変わらずこいつのセンスには着いて行けん…。

まあいいか。帰って休もうか。あ！ そうだ！

「もうーつはどうだ？」

私は彼女に聞いた。

すると意外な答えが帰ってきた。

「…本当に言い難いけど、もうーつは月にあるの。見ての通り外からじゃないと閉じれないし跡には巨大な門が残るわ。最悪な事に幻想郷と月は敵対関係にあるの。もし私達が何かしたら最悪月と幻想郷の戦争になるわよ。まだ向こうの亀裂が開いた訳じゃ無いから猶予はあるわ。」

なるほど…

「お前の監獄ザルだな。」

そう言った瞬間瘴気のクナイが飛んできた。

《side out》

〈遠い宇宙の彼方にて〉

「全システム 準備完了まで残り65%」

「目的地を決定

あと18日9時間42分58秒で地球に到着しま

す。」

「機械兵の複製完了まで 86%」

「ワープホール・プロトコルに移行します。」

「目的地5万キロメートル地点にて惑星侵略プロトコルに移行します。」

「警告 警告 警告 重大なエラーが生じました。只今より全エラーを修正します。」

「たす…け…て。マス…ター。」

その巨大な何かは着々と幻想郷に向かっていった。





## 外伝1・彩華の章

## 1. 彩華

## 《side 文》

やっぱり、スクープが見つからないなあ。

今幻想郷に季節違いの花が沢山咲いてるけど、よくある事だし、ネタにもならないよ

：

「というわけで助けてください権！」

「何がというわけですか？ 暇じゃないんで他所を当たって下さい。」

うーん、この子最近辛辣になってきたな。

「…そうだ！ 権は最近噂の魔神について何か知りませんか。」

ダメ元で権に聞いてみる。

「な、なんですか？ ま、魔神?! そんなのいるわけないでしょ?」

おや？ 位が低い天狗には伝えられていないみたいだ。

もしかしたら機密事項だったかもしれない。

「…権ちよつと耳を貸してください。」

「な、なんですか?」

まあ、権1人ぐらいならいいよね。

「へ、へえ。そんな事があつたんですか?! 知りませんでした。」

「私も聞いた話ですからね。実際に見てみたいです。何か任務中に明らかにおかしい事とかありませんでした?」

私は権に聞いてみた。

「そんな、ポンポン事件が起きたら大変ですよ。」

妖怪の山はここ数百年安泰のようだ。

「ところで文さん。」

珍しく権から質問が来た。

「なんですか?」

「鬼にお会いしたことはありますか。」

ブフー!!!

「も、権?!?! それに禁句です!!」

「そ、そうですか。すみません。」

珍しく質問したかと思えば…

「どうしたんですか？そんな質問をして？も、もしかして戻ってきた?!な、何かあったらすぐ連絡下さいね?!」

あばばばば!!一大事だ。

「い、いえ！そういう訳では無く単に気になっただけです。」

ホツ…良かった。

「…鬼はとにかく怖い存在です。くれぐれも気をつけてくださいね。知ってると思います。妖怪の山は鬼が支配していました。だから時々遊びに来ることがあります。あの天魔様ですら勝てない相手です。」

「へ〜。」

彼女は私の言葉を興味深そうに聞いていた。

「どこでももう一つ良いですか？」

今日はどうしたんだ？珍しいこともあるものですね。

「なんですか？」

「あの山の頂上に住んでいる人達は誰ですか？」

……

「椛。彼女達のごことは今後他の大天狗から発表があります。その時までくれぐれも口外

しないように。」

「はっ！」

私の発言にさつきとは打って変わって膝をつき返事をした。

……………

なんか権がこうしていると嫌な気分になるのは何故だろうか？

納得が行かないというか、しつくり来ないというか…

「権。もう良いですよ！そこまで畏まらなくても！」

「…わかりました。」

「てな訳で…」

「手伝いません。」

やっぱりいつも通りだった…。

「肝が冷えただろ？王様。」

「…ああ、かなりな。…ていうか！なんでここまで来た！家に戻つてろ！バレたらどうするつもりだ?!」

「あはは、分かったからそんなに怒るなよ。」

へしばらくして博麗神社にて

「助けてくださーい!! 霊夢さーん!!!」

私は霊夢さんに泣きついていた。

「暑苦しいわね! 何も無いって言ってるでしょ?!

「そ、そんなあ…」

彼女の返答に落胆する。

「無いなら探しに行けばいいんじゃないか? と言うか普通そうだろ。」

魔理沙さんが提案してきた。

「うう…。大きい異変を何個も逃しちやっただんですよ! 今更何が出来ますか?! 私が出来るのは適当なネタを聞いて脚色を加えるだけですよ!」

「ついにいいやがった。ジャーナリズムの欠片もねえな?!」

誰も構ってくれないならしょうがない…

「…行つてきます。」

私は落ち込みながら飛びたとうとした。

「ちよつと待ちなさい！ いい機会だし聞いわ。」

ん？ 突然霊夢さんに呼び止められた。

「なんですか？」

「妖怪の山である程度の実力を持つあるいは目立つてる白狼天狗について知らない？」

なんの質問?!

「…個人情報なのですが…。」

「私はしっかりと守るわよ。て言うかあんたに1番言われたくない!!」

……ぐうの音も出ない。

「…私個人の見解ですが良いですか？」

「いいわよ。あなただからこそ聞いているの。」

「……若い順から行きますよ。実技試験で白狼天狗内ではかつてないほどの点数を叩き出した山城 音。そして元天狗の不正を暴いた風間 牙、天星 社。そして…」

……どうしようかな。

「何? どうしたの?」

「もう1人は友人なんですけど天魔様直々の偵察任務を完遂した犬走 椀です。」

「あゝ、あの子か。…偵察任務?」

「前回の大きな異変です。結構騒ぎになりましたからね。」

あの時は大変だった。

「そういえば権の偵察任務の内容は頑なに教えてくれなかったなあ。天魔様から口止めされているらしかつたけど。」

「そう……もういいわよ。」

そう彼女の言葉を聞き私は飛んで行った。

〈side out〉

「魔理沙は誰だと思う?」

「うーん……分からねえ! 候補が多すぎる!」

……… 一体誰なんだろう銀色の狼こと「魔王」は

## 2. 彩華

〈幻想郷、とある場所にて〉

《side ???》

やれやれ、皆さん何故こんなに罪を犯すのでしょうか？

私が直々に説教しないとダメですね!!

「…ていうか、仕事もせずに小町はどこで何してるのですか?!」

《side out》

〈幻想郷上空にて〉

《side 文》

ネタ。私のネタは無いかね。

心の中でずっと叫んでいるのですが一向に見つかりませんね…

こうなったら、あそこへ行つて見ましようか。



く少女移動中く

〈迷いの竹林にて〉

先程から私はとある人を観察しているのですが…

草むらから覗く私の目の前には、鈴仙が岩に座り人里に持つていく薬箱の中の薬を確  
認していた。

噂によると、彼女は魔神らしいのですけど…

「良かったー全部揃ってるーさて、そろそろ行こう！」

彼女は立ち上がり一歩前に進んだ

瞬間に落とし穴に落ちた。

竹林に住んでいる妖怪兎達の仕業でしょうね。

後ろに1匹いますしね。

……魔神と聴いたからにはどのようなものだと思ったのですが、期待はずれでした

ね。

次行きましょ。

〈side out〉

〈side てゐ〉

ウシシシシ!

引つかかった! 何度やっても楽しいな!

怒られる前にトンズラしよつと!

あれ? おかしいな…いつまでたっても永遠亭につかない。

ズル…ズル…

気のせいか霧も濃くなってきた…

ズル…ズル…ザク…ザク…ザク…ザク…

あれ？この時期に霧？

というか、さつきから何かに見られているような寒気がする。

見つけた…

ん？なんか遠くの方から何かこっちに向かっていているような…

それも、ものすごいスピードで…

れ、鈴仙？

もう来たか。まあ、いつも通り逃げ切つて………?!?!

何かに掴まれて

こ、これは?!鎖  
?!?!?!?!

ザクザクザクザク

ザクザクザクザク

グウオオオオオオオオオオ!!!

怪物がすぐ目の前まで来ていた。

「ヒッー!」

私のすぐ目の前にはそれがいた。

禍々しい見た目のそれは、私を見下ろしていたかと思うと急激に私の顔に近づいた。

「グルルルルルル…」

生暖かい吐息が私にかかる

や、やめ…

《 side out 》

《 side 文 》

ん？どつかから悲鳴が聞こえてきたような：

まあ、いいか。

〜少女移動中〜

〈花妖怪の花畑にて〉

いつ見ても圧巻ですねえ、特にこんな現象が起きてる時は。

ん？あれは…

「チルノちゃん、大ちゃん、どうしたのかー？」

「え？何でもないよ！ね！大ちゃん！」

「うん！そうだね！」

妖精達だ。別に珍しくも無いか。

花妖怪もいますけど、ここは写真を何枚か撮っておきましょう。

カシャ！！

これでよし！

次はどこ行きましょうか？

《side out》

《side 大妖精》

……誰かと思えばあの天狗さんか、あの様子だといいいネタは見つからなかった様だ。

「大ちゃんも気付いてた？」

チルノちゃんが私に問いかけてくる。

「そりゃあ、もちろん。黒い翼が生えてたから一瞬ルシファアーかと思ったけど……」

「それは無いわー。あの引きこもり滅多な事じゃ外に出ないよ。それにそのレベルになると魔力で分かるでしょ？」

「それはそうだけど……。最近魔神たちの騒ぎも聞くし……」

「ワンちゃんやタロちゃんも基本平和主義だから大丈夫だよー。」

大丈夫か？ 片方元大罪人かつ最強と謳われた魔神だけ……

ていうか流石初代妖精王、あの人らをそんな呼び方できるなんて……

私も妖精王として見習わなくちゃ

「2人ともなんの話をしてるのかー?」

ルーミアが不思議そうに聞いてくる。

「い、いや別に。」

「んー?」

「おーい!みんな!幽香がクッキー焼いたって!」

あれは…

「分かったよ!リグル!そっちに行くねー!」

今はみんなでクッキーを食べて楽しもう。

《side out》

〈紅魔館にて〉

《side 文》

ふふふ!着きました!ネタと言えば紅魔館です!

隠れてじっくり待ちましょう!

そう思った次の瞬間私の周りには無数のナイフがあった。

《side パチュリー》

「何かあったの咲夜？」

レミイが咲夜に聞いた。

「いえ。ただネズミが1匹いたもので。」

「それは大変ね。ネズミを放っておくと飛んでもない事になるからね。ところでパチエ  
…」

突然彼女が私に話題を振ってきた。

「魔神について何か分かった？」

「依然何も分からないわよ。」

「そう、小悪魔についても？」

「……………」

小悪魔：いや、バアル…

「パチエ？」

「ん？ええ、まだ何も分からないわ。」

いつかあなたの事を知れるのかしら？

《side out》

《side 文》



ひ、酷い目に逢いました。

あと少しで串刺しになるところでした。危ない危ない。

次は…「そのあなた!」

ん? 誰かが私を呼んで…げ?! あれは!?

私の目の前には正座している船頭と、それを叱るかの有名な閻魔がいた。

「ちようどいい機会です! 小町の横に正座なさい!」

あややややや?! これはまずい?! 死ぬほど説教される?!

た、助けてくださーい

《side out》

………ふわ?!

あれから寝てたのか?

ん? 動けない…鎖で縛られているようだ。

逆さに吊られている私の目の前には「反省しなさい。

書かれていた看板がたっていた。

………反省か………

鈴仙より」と

する訳ないでしょ  
WWW

## 五章・風神異変

## 35・風神異変①

地球まで残り数千キロメートル

モードを変更します。

や、やめろ…

Code:Extinction  
大 量 絶 滅 機 関  
起動

やめて……

それは未だに声を発している。「V」

〈幻想郷、妖怪の山にて〉

《side 椀》

めんどくさい…

私達は突然の招集に応じ妖怪の山本部まで来ていた。

恐らくだけど…山に住み着いた、神々だろう。

「椀〜！」

にとりだ。

「おはよう。今日は何言われるんだろうね？」

だいたい察しがついているがにとりに聞いてみる。

「う〜ん…。最近大きな異変も多かったしそれについてじゃないかな？」

「注目!!!」

突如響いた声により私達の視線は壇上に移った。

あれは…名前知らないけど大天狗の1人だ。

「ごきげんよう、同士諸君！君達に重大な知らせがある！」

「この妖怪の山に、高位の神が住み着いた。」

やっぱりな。

「今はまだ対談の途中だが、天魔様は彼等と寄り良い関係を持って行きたいとお考えだ！従って交渉が終わるまで次に指定する山には立ち入り禁止とする！しかし諸君らの

中にはその山に住んでいた者も居るだろう。天魔様は突然の避難指示を出したことを申し訳なく思っておられる。」

ざわざわ

え!?あの天魔様が!?!

ざわざわ

「静粛に!!!とにかく!その者達はしばらくこの本部で生活してくれ!以上!解散!」

ほおー、流石天魔様と言うだけはあるな。

「凄いことになったね!どんな神様だろう?」

にとりがワクワクしながら言ってきた。

「なんか嬉しそうだね。」

「そりゃあ、外の世界から来たんだ!どんなテクノロジーを持ってきてるか!!」

ああ、そっちなか…

そんな談笑をしている私達の目の前に雛が通りかかった。

「あ!雛!」

「?にとりに権!」

「おはよう、雛。」

するとにとりが彼女にこう言った。

「雛は同じ神様として新しく越してきた人らはどう思う？」  
すると……

「……そのね、その人達私と比べ物にならないくらい高位の存在なの……」  
と怯えた様子で言った。

「そうなの？……大丈夫？」  
にとりが心配して聞く。

「実は、同じ神として私を交えて対談する事になったの……」  
大仕事だな。

「凄いな！それは！」

「……もし相手がとても怖い人達だったらどうしようかと思つて……」  
確かに万が一攻撃でもされたら一溜りも無いだろう。

「雛！私に出来ることは少ないかもしれないけど精一杯雛の助けになるからね！……そ  
うだ文にもっと人を増やすように相談してくる！」

「あ！ま、待つて……」

雛が呼び止める暇もなくにとりは文さんを探しに行った。

「ねえ、雛。」

「……どうしたの？権。」

「ちよつと耳貸して」

「え？分かった。」

そう言うのと雛は私の近くまで来た。

「万が一攻撃されたら全力で私を呼んで。」

「え?!」

雛は私の言ったことにだいたい驚いて居るようだ。

「あの位なら余裕で雛を守る。むしろ戦闘不能に出来る。」

「ええ!!?だ、ダメだよそんなの！それにとても強いと思うよ。」

「知り合いにもつとヤバイ神もいるから大丈夫。」

「そ、そうなの?!…ねえこの話は終わりにしよう。私の話とはかく椀の話は聞かれ  
たらまずいよ。」

「大丈夫、小声で話してるから聞こえないって。」

でも確かにこれ以上話すのはまずいか

「それじゃ、そういう事で…正直個人的にその神達に興味があるし…。」

「で、でも無茶はダメだよ〜!」

雛ははつきり言つて臆病だ。だが臆病な分相手の強さも分かるし何より思いやりもある。

この私の強さに気づく上に心配までしてくれる程だ。  
良い友人ができたよ。

「鍵山雛殿！話があるから私の所まで来てくれ。」

先程の犬天狗が雛を呼んだ。

「私もう行かなきゃ！じゃあね、椀。」

そう言って彼女も去っていった。

私もそろそろ任務に戻るか。

高位の神々を戦闘不能に出来る？  
フン！バカバカしい！

自分を過大評価しているようですけど限度がありますよ！  
いつか、後悔するでしょうね！



あんな奴になんで文様も社様も牙様も甘いのでしょうか？正直意味が分かりません。あんな奴と一緒にいては皆様の評判がさがります！何としてでも引き離さないと！

彼女は偶然にも魔王の言葉を聞いてしまったのだ。後にその言葉の真偽を知ること  
も知らずに…。

《 s i d e o u t 》

## 36. 風神異変②

〈博麗神社にて〉

《side 霊夢》

「ようやく終わったわね。」

私は赤い絨毯の様な落ち葉をかき集め終えお茶にしようとしていた。

もうすっかり秋ね…

私は季節が早く過ぎていくことを実感しながら今までの事を思い返していた。

………魔神ねえ…

そう、1番の悩みの種は魔神だろう。もう既に何人も幻想郷にいる。

確認されていないだけで幻想郷の外にも大勢居るだろう。

それに……

「大戦かあ……」

私は紫の言っていた物語を思い返した。  
銀色の狼が物語を認めたってことは……

必ず居るはずだ。魔神とは違った強大な力を持つ種族が……

「ああ……会いたくない……」

思わず愚痴をこぼしてしまった。

ただでさえ魔神でいっぱいなのに、もつとややこしい奴らが出てくるなんて  
たまったもんじゃないわ！

幸いそんな魔神達は問題を起こすことなくじつとしている。

約1名正体が掴めていない奴が居るけど……

歴史に存在しないはずの大戦……

しかもその元凶である銀色の狼……

「魔王……一体どんな奴かしら。」

彼女はいる。顔すら分からないが間違いないこの幻想郷の中にいる。

もしかしたら今後奴ら関係で異変が起きるかもしれない。

その時私は、しっかりと博麗の巫女としての勤めを果たせるのかしら……。

……今考えても仕方ないか……。

お茶の準備を……。

ん？珍しいなここに人間が来るなんて……。

私は階段を登りきったであろう奇妙な格好をした少女を見た。

「何か用かしら？」

私の問いかけに彼女はこう聞き返した。

「……ここは博麗神社で貴女が博麗の巫女で間違い無いですか？」

奇妙な事を聞くわね。

「そうだけ……」

すると彼女はこう言った。

「出会ってそうそう申し訳ないのですが、博麗神社を渡して貰います。」

な?! 殺気?!

私は思わず構える。

「初めまして、守矢神社の風祝、東風谷早苗と申します。」

「あら、ご丁寧にどうも！」

私はそう言い終えたと同時に彼女に向かって弾幕を放った。

《side out》

〈妖怪の山、本部にて〉

《side 雛》

うう…遂にこの時が来ちゃった。

今日は対談の日。さつきから緊張のせいか脚が震えている。

で、でも大丈夫だよね！

天魔様もいるし、にとりのおかげで人員が増えたから、万が一の事があっても何とかなるよね！

私達が対談用の机で待っていると…

「大天狗様、守矢神社御一行様がお見えになりました。」

とある烏天狗が入ってきた。その後ろには私よりも格上の神様2人が入って来た。

「よう！天魔、待たせちまったな！」

?!?!  
?!?!  
て、天魔様にそんな言葉使いを?!

「貴様！」

「あ？やんのか？」

しめ縄をつけた神様からとてつもない殺気が放たれ部屋に充満する。息をするのも出来ないど錯覚するくらいだ。

「やめろ！武器をおろせ！」

相手の神様達の言葉使いに腹を立てた数名の大天狗が2人に斬り掛かろうとした所天魔王に制された。

…お家帰りたい…

「済まないな。私の部下が早まってしまつて。どうか腰を下ろしてくれ。」

「おいおい、手下の教育がなつてないじゃないか。」

目の着いた帽子を被っている神様が言つた。

「おや？こないだの対談では見なかつた顔があるな。自己紹介した方が良いか？」  
そうしめ縄の神様が提案した。

「よろしく頼む。」

「私は八坂神奈子。風の神だ。で、こっちのちっこいのは…」

私達の視線は帽子を被っている神様に向いた。

「ちっこい言うな！…洩矢諏訪子だ！よろしくな！」

と、彼女は名乗つた。

「我々からも自己紹介を…」



1人の大天狗が発言した。

「良いぞ。」

「この妖怪の山に住みたいのであれば多少貢献して貰わなくては困る。そちら側は何を提供するつもりだ。」

お、思い切った発言だ！

「ハハハハ!!そりやそうだな!もちろんタダで土地を寄越せとは言わない。我々は外の世界の技術を教えよう!例えば遠くに居ても会話ができる代物とかもある。後は何か会った時の用心棒になれるぞ!」

外の世界にはそんな物が?!それに彼女達が味方に成れば例えどんな勢力が攻めてきたとしても安全に生活出来る!

「……なるほど…その提案を呑むとしよう。これから共に寄り良い関係を築いて行く。」

そう天魔様は言った。

「それと、もう一つ話がある。もう時期博麗の巫女が攻めて来る。」

は?!?!

彼女の言葉に流石の天魔様も呆気に取られていた。

彼女だけではなく他の大天狗達もそうだ。



「な、なぜ彼女が?!」

1人の大天狗がパニック気味に問いかける。

「信仰を増やすために商売敵には消えてもらおうと思つてたんだが…早苗1人じゃ部が悪いから引き連れて私らで叩こうつて思つてな。」

「そ、そんな?!」

彼女の発言に大天狗達が慌て出した。

「静まれ!!」

突然響き渡つた天魔様の声で落ち着きを取り戻したらしい。

「申し訳ないが、彼女の始末には参加しない。しかし彼女が妖怪の山の領域に入つて来るのなら、我々が追い払う。万が一突破されたら後のことは任せよう。しかし追い払う事に成功したのならよそでやってくれ。」

「構わないぜ。それじゃあな!」

そうして彼女達は立ち去ろうとした。

しかし、脚を止めた。

「なあ、おい…その…厄神か?名前なんて言う?」

「?!?!?!ここに來て?!あわよくば一言も話さずに帰ろうと思つたのに?!」

「か、鍵山 雛です。」

「そうか、よろしくな！」

ほっ、やっと思つてくれるのか……

「あと天魔。もう1つだけ質問がある。」

え?! なんだろう?!

「なんだ?」

「お前なんか飛んでもない化け物飼ってないか? 約2体ほど」

ば、化け物?! 天魔様が?

「何の話だ?」

どうやら知らない様だ。

「ふーん……そうか……じゃあな。」

あ、嵐みたいな人達だった。

それにしても化け物………

心当たりがあつた—————  
《《side out》》  
!!!!!!!

〈妖怪の山、とある休憩所にて〉

《《side 権》》

「先輩、映像と音声は記録できましたか？」

「出来たよ。」

私と天星先輩は、対談の様子を覗いていた。

「さてと、帰ったら説教だな。」

あれ程魔力は抑えろって言ったのにフアフニールとラティオの奴ら……

「でも、その前に一波乱来るぞ。」

そう天星先輩が言ってきた。

まさかとは思ったが遂に博麗の巫女と敵対する時が来るなんて……

この為の哨戒天狗なんだがな。

あれ？ どんどん私の追い求めていた平穏な生活から遠ざかってね？

《 s i d e o u t 》  
この時私は後にこの異変で奴女神の手掛かりを掴めるとは夢にも思わなかった。

## 37. 風神異変③

《side 早苗》

はあ はあ はあ はあ

私はボロボロになりながらも何とか妖怪の山へたどり着くことが出来た。

これでは博麗の巫女を私達で叩くだけだ！

そうすれば御二方は安心して暮らせる。

《side out》

〈妖怪の山道中にて〉

《side 霊夢》

あと一步の所で逃げられてしまった。

突然襲来してきた彼女は私と戦闘になったが、様子を見に来た魔理沙を見るやいなや

逃げて行った。

この方面は確か…

「霊夢…この先は妖怪の山だ！その住民は結構排他的だから気をつけろ！」

そう魔理沙が私に言ってきた。

ちようどいい！この際異変解決と同時に「銀色の狼」の正体も見つけてやる！

《side out》

〈妖怪の山、本部にて〉

《side 権》

対談の通り、本当に博麗の巫女が向かって来た様だ。

私達は彼女を追い出すための作戦を聞いていた。

どうやら最初から奥の手を出すらしい。最初に彼女と相手するのは秋姉妹だ。

彼女達は秋を司る神だ。何度かあった事があるがこれといって深い面識がある訳でもない。

ん？なんだか大天狗達が焦りだした様に見える。

どうやら博麗の巫女が妖怪の山すぐ近くまで来ていると言う報告が上がったらしい。

秋姉妹が倒された後の戦力は……?!?!

まさか?!?!

雛が?!?!

どうやら大天狗達は雛を配置するようだ。

彼女はあまり戦闘が得意ではない。心配だ……。

「犬走!!」

ん？

「牙様! お久しぶりです!」

私の前には牙様と……不満そうな顔をした音が立っていた。

「今回の任務で俺たちも博麗の巫女を迎え撃つことになった。」

「そうですか! 音様も頑張ってくださいね!」

私は先程から一言も話さない音にも声をかけた。

「ふん! 言われなくてもわかっていきます!」

相変わらずだな……

「……なあ、やっぱり社の下に着くつもりは無いのか?」

「ええ、私は今のままでいいです。」

「そうか……。所でお前も何か任務はないか?」

「私は牙様の様な任務では無く哨戒天狗として大勢で迎え撃つことになりました。」

私の様な哨戒天狗はその他大勢でしかない。適当にやられた振りだけして後は任せよう。

「そうか…お前も頑張れよ。そろそろ行かなくちやな。ありがとな！犬走！」

そう言って2人は去っていった。

妙に音が静かだったな。

「なあ、犬走。」

突如後ろから天星先輩が声をかけてきた。

「何です？」

「使徒としては何かする必要があるか？」

「まさかとは思いますが、ですけど何かするつもりですか？」

私は笑顔でそう聞き返した。

もう面倒事はごめんだ。

「だよな…。」

私も何もしないでおう………

………

…いや…。



「…天星先輩。私には妖怪の山に友人が二人います。万が一彼女達に何かが起きた時私は全力で守ります。自分勝手かもしれないかもしれませんがお許しください。」

やっぱり後悔する様な事はしたくない。

「…謝る必要はないさ。貴女が後悔しない道を進めればそれでいい。」

?!?!?!

瞬私は天星先輩にエルマの姿が重なって見えた。

「ん?どうした?」

「いや、何でもありません。そろそろ私達も行きましょう。」

これから一荒れするぞ。

《side out》

《side ファフニール》

「という訳で残念ながら今回は待機よ。」

そう、ラティオが私に言ってきた。

「わーってるってー。」

あんたじゃあるまいしそこまで戦闘は好きじゃないんだよ。

本当に……

『邪龍ファフニール!!』

戦闘…いや…

『今度こそ貴様を討つ!!』

対立する事自体が虚しくてしょうがない。  
なあ、ジーク。

《side out》

《side ラテイオ》

くっ!!今回は主様の力になれないなんて!!

私も主様と一緒に戦いたかった!!!

《side out》

-----

〈月の都にて〉

「巨大な何かが地球に向かって直進しています!!!」

「我々へは何か呼びかけはあるか!」

「現時点ではありません!」

「ならば現状を維持しろ!そして方が一の時を備えろ!」

「了解」

彼等是人知れずパニックに陥っていた。

しかし、彼等が再び出てくるのはまた先のお話…

### 38. 風神異変④

《side 文》

恐れていた事が遂に起きてしまった。

命令が来た。

博麗の巫女を倒せと：

本当に命令通りに霊夢さんを攻撃していいのか：

彼女は私の友達なのに：

《side out》

〈妖怪の山麓にて〉

《side 霊夢》

「生まれ！ぐはっ?!」

「ま、待て！グワア?!」

私は向かって来る天狗たちを次々と倒して行っただ。

確か…秋姉妹と言ったかしら…彼女達を倒してからどんどん増えて来たような気が

する。

「ま、待ちなさい!!」

私の目の前に怯えた様子の少女が立ちはだかる。

「退きなさい! あんたには用はないわ!!」

私は彼女に向かって怒鳴る。

「ひ、ひい…。わ、私は、あなたを倒さなければなりません! だ、だから! ここで退く訳には行かないんです!!!」

…いい度胸ね。

「…あなた名前は?」

「わ、私は鍵山雛…厄神です!」

そう言ったかと思うと彼女は弾幕を私に撃ってきた。

…それ相応の相手だ…私も出し惜しみはしない!!!

《 side out 》

《 side 権 》

『す、すげえ…』

『まさか厄神様があそこまで強いなんて…』

友人が褒められるとなんだか嬉しい気持ちになるのって本当だったんだな。

私達は何をしているかと言うと、近くの草むらで雛と博麗の巫女の闘いを見ていた。私達を仕切っていた天狗は雛が瞬殺されると踏んで、倒された瞬間にいつせいに襲いかかると言う作戦を立てていた。

まあ、予想通りの結果になったけど……

雛は臆病だけど弱い訳では無い。むしろ強い部類に入る。普段からあまり強く出ないから周囲には弱いイメージを持たれている。

「お、俺だつて！ やつてやる！」

「お、おい！ バカ！ 今行ったら危ないぞ！」

な!? 今行くのか?!

血気盛んな白狼天狗の若者が飛び出して言った。

博麗の巫女の弾幕、あれは厄神<sup>ニギハヤヒ</sup>レベルでさえ当たればただじゃ済まないんだぞ！ それを白狼天狗が当たるとなると……

死にはしないが怪我が治るまでに相当時間がかかるはずだ！

「あ、あんた?!」

突然飛び出されて驚いたのか博麗の巫女が反射的に弾幕を放つ、今までの威力通りに。

「あ、危ない!!」

咄嗟に雛が彼に覆いかぶさって庇おうとする。

……………

次の瞬間、自然に私の体は動いていた。

私は両腕を広げ、博麗の巫女の弾幕を受け止めた。

《side out》

《side 雛》

私が突然出てきたこの子を庇った時にそれは起きた。

今の威力の弾幕に当たるとこの子が大怪我しちゃう。そう思って自分自身が弾幕の犠牲になる覚悟でこの子を守った。

でも弾幕の衝撃は来なかった。

代わりに私はもつと酷いものを見てしまった。

私たちの横を白煙に包まれながら吹き飛んで行く椛が見えた。

「いやあああ!!!椛いいいいいい!!!」

私は絶叫した。

そしてすかさず横たわる彼女の元へと向かった。

「……………くっ…ぐめんなさい……………」

後ろで博麗の巫女がそう言いどこかへ飛んで行った。その場にいた誰もが動けない

でいた。

しかし、私にはもうどうでもよかった。

「椀いい!!目を覚まして!!!」

私は彼女を抱き抱えながら再び絶叫する。

「うはあく、正直舐めてたわ。」

そんな気の抜けた声でした。

「え?!」

私の腕の中の椀は何事も無かったかのような振る舞いだった。

よく見たら所々服が破けているけどかすり傷一つ見当たらない。

「なあ!私強いだろ?」

「……………」

「さっきの吹き飛んだフリどうだった?」

「……………」

「ん?雛?」



「椛のバカアアアア!!!」

《 side out 》

《 side 椛 》

「お……え?……あ、はい……」

突然の雛の剣幕に私はまともな言葉すら出てこなかった。

「とつても心配したんだからね!!!」

あ……

「椛に何かがあつたらと思うと……私……私……。」

私は雛の頭に手を乗せ撫でた。

「大丈夫、雛の思うような事にならないから。」

やっぱり優しいな。

「雛!!!大丈夫かい?!?!」

突然背後から声が聞こえてきた。

にとりだ!

「なんだか聞いた事ないほどの雛の怒鳴り声が聞こえたんだけど……」

「いやあ、ごめん。無茶して雛を心配させちゃって……」

「無茶?!?!椛?!?!怪我はない?!?!」

「うん。この通り元気にやっています。」

私は立ち上がり自分の体が正常に動くことをアピールした。

『すげえ、あの博麗の巫女の一撃を食らっても無傷だなんて…』

『あの子何者?!』

やべー!しまった!

「え?!博麗の巫女の攻撃を受けたの?!どういうこと?!説明して?!」

にとりがすごい勢いで質問してくる。

「いや、それはその…当たり前どころが良かったって言うかなんというか…」

ど、どうしよう……。。

《side out》

〈存在しないはずの世界にて〉

《side ファフニール》

「離しなさい!!ファフニール!!」

「ちよつと落ち着いてくれ!!」

私は怒り狂うラティオを抑えていた。

「あの紅白女!よくも私の主様にあんな仕打ちを!!直接殺してやる。」

と、このように先程から随分お怒りの御様子だ。

「今行つたら王様の命令を破ることになるぞ!! それでいいのか?！」

お? 急に動きが止まった。

「フフ…ウフフフフフ…アハハハハ!!！」

な、なんだ、なんだ? 急に笑いだしたぞ?!

「確かにあなたの言う通りね。今回は! 今回だけは!!! 今回のみは!!!! 我慢するわ。」

顔は笑ってるけど目が笑ってない…。

こ、こわい……。

《side out》

〈妖怪の山上空にて〉

《side 霊夢》

「よう! 霊夢! 遅かったじゃねえか。こっちは河童と戦ってたんだが急にどっか行きやがった。」

「…そう…。」

……

私は先程の事を思い出していた。

あの強力な弾幕を受けてしまった子…あれは間違はなく文が連れて来た子だ。  
文に合わせる顔がないわ……。

私は人知れず罪悪感を感じていた。

《 s i d e o u t 》

## 39. 風神異変⑤

《side 文》

…任務の内容によると私は天屋 社、風間 牙、山城 音の3人と一緒に霊夢さん達と闘わなくてはならない。

皮肉な事に味方である他の天狗と一緒に行動することによつていよいよ後戻りは出来なくなった。

ごめんなさい霊夢さん、魔理沙さん。

私にもつと力があれば平和的な解決が出来たのに…。

《side out》

《side 霊夢》

移動している私達の目の前に4人程天狗が現れ行く手を遮った。

3人の白狼天狗と…。

「……文……」

私達の友人である文だった。

「ごめんなさい霊夢さん……」

文がそう言った。

「?!?! 文様?! どうして頭を下げるのですか?! 奴らは敵です! 情けは無用ですよ!」

一番若いであろう白狼天狗がそう言った。

「文…。私とあなたは敵よ。」

「ですが!!」

「さつき、あなたの後輩の… 椛だっけ? 彼女を倒したわ。致命傷をおつてるかもしれないけどね。」

「?!?!」

その場にいた私以外の全員が驚いていた。

こう言えば文の覚悟は決まるだろう。

「外道が!! そこまでするか?!」

男の白狼天狗がそう言ってきた。どうやら彼も彼女に面識があったみたいだ。

「どうしてですか?! 霊夢さん! あなたはそんな酷いことをする人では無いはずです!」

「そうだけ霊夢! お前らしくもない。」

文の悲痛な叫びと魔理沙の言葉が私の心に刺さる。

やっぱり、文にとって大事な人だったんだな。

「だから文! あなたもそうなりたくなかったら退きなさい!」

「そんな！霊夢さん！」

彼女はそう言ったが3人の白狼天狗が構えた。

「そう言えば、妖怪の山には魔神が住んでるんですってね。事が終わったら説明して貰うわよ！」

私はそう言った。

「そ、そうなんですか?!私はそんなこと知りませんよ！」

文がそう言った。

彼女は大天狗な筈だ。もし知らないのであれば奴は妖怪の山で身分を偽っている可能性がある。

「ほう?魔神だと?最近幻想郷に現れているらしいな。貴様がどこまで情報を知っているか教えてもらおう。」

今まで1度も喋らなかつた白狼天狗の女性がそう言った。

「へえ、気になるんだ。銀色の狼とだけでも言っておこうかしら。」

私がそう言った時彼女は何故か動揺していた。

……彼女は白狼天狗の中でも優秀なのだろう。

十二分に有り得る。

「ひよっとしてあなたじゃないでしょうね？」

「何を言い出すかと思えば世迷言を。」

そう彼女は否定した。

「話は終わりだ。この妖怪の山から出ていってもらおう。」

そう言い、文以外の全員が襲いかかってきた。

《side out》

《side 文》

もう……もう！

やるしかない!!!

《side out》

《side 椀》

あれから私は持ち場を抜け出し隠れて天星先輩達の戦闘を見ていた。

私は雛のおかげで療養中ということになっている。

博麗の巫女：霊夢と呼ぼうか。彼女は天星先輩を私だと勘違いしているようだ。

………本当に申し訳ないな天星先輩。

「主様！」

突然私の背後から声がかかった。



「ダメ！」

ラティオが何かを言う前に私はそう言った。

「そんなあ……」

「……すまないな……。」

「?! いえいえ！ 全ては主様の仰せのままに！」

そう言い彼女は消えた。

私が少し目を離している隙に戦闘に進展があつたようだ。どうやら文様は腹を括つたようだ。

そして音がついていけなくなつた。

それほどの戦いのようだ。

ん？

………まじかよ。

《side out》

《side 霊夢》

あと少しで一人倒せそうだ。

そう思った次の瞬間！

「魔理沙、避けて！」

無数の弾幕が私と魔理沙目掛けて襲ってきた。

私と魔理沙は避けた。

弾幕が飛んできた方向を見てみると、先程の風祝と神が二柱いた。

「お前が博麗の巫女か？どうも！私が洩矢 諏訪子だ。」

小さい方の神がそう言った。

「そして私が八坂 神奈子だ。早速だがお前に消えてもらう。」

くっ!!数が多すぎる上にこいつらは格が違う！

「何故ですか?!約束が違うではありませんか?!まだ我々は負けていないですよ!」

文が彼女達にそう言った。

「気が変わったんだよ。どうせなら一緒に闘おうぜ!その隠れているお前もな!」

彼女は下を見ながらそう言った。まさかまだ増援がいるって言うの?!

「お前さつきから高見の見物しかしてないけど何者だ？こいつらの鬨いに文句があるならはつきりと言えよ！」

彼女がそう言った時下の木の影から見覚えのある顔が見えた。

「い、犬走権?!何故あなたがここに居るのですか?!あなたのような位の低いものはもつと前に配属されるはずです!まさか?!逃げてきたのですか?!」

いや?!その前に私の弾幕を食らって何故無傷なの?!

彼女はゆつくりとこちらへ飛んできてこう言った。

「天星先輩、緊急事態です!」

私達所か、神達も無視して白狼天狗の女性に声を掛けた。

「おいおい、無視するなよ。」

洩矢諏訪子がそう言った。

次の瞬間…

彼女、犬走権から

とんでもない威圧力を感じた。

この威圧感を感じたことがある…

「な、なんのつもりだ?！」

白狼天狗の女性、もとい天星が彼女を問い詰めた。

こいつだったのね!

でもなんでこのタイミングで?!

「も、棍?！」

文はとても驚いている様子だった。

「天星先輩、これは犬走 棍ではなくヴァナルガンドとしての命令です。どうやらS・A・Mに何かあった見たいです。攻撃態勢でこちらに向かってきています。」

「仲間を救いますよ!！」

そう天星に言った。

「了解した。主殿!！」

そして、天星は返事したと同時に手に何か本の様な物を出現させた。

『さまよう かぜの うずよ ばんぶつ を のみこみ ひとつに つどえ』

「な、なんて高度な魔術なんだぜ?!！」

魔理沙が驚く。

「お、お前は何者だ?!」

八坂神奈子が彼女に聞く。

「話は後です。今は鬨いに備えて下さい。」

「た、戦いつて軍隊でも来んのか?どこから?」

そう魔理沙が彼女に聞く。すると彼女は人差し指を立てた。

「正解。空からヤバい軍隊が降って来るぞ。」

私達は空を見上げた。

そこには…

空を埋め尽くさんとばかりに…

何かの大群がこちらに向かってきていた。

《side out》

## 40. 風神異変⑥

《side 天魔》

「こちら本部、何があつた!!」

『多数の未知の敵がいます……お、おい!? やめろ!! く、来るなあああ!!!』

「何が起こっているんだ?!?」

「貴様ら!! 落ち着け!!」

私は部下たちに命じた。

しかし、私もかなり焦っていた。

どうやら、何かの大群が妖怪の山に押し寄せてきたようだ。

ならば…

「総員、戦闘態勢を取れ!! 妖怪の山に襲撃しに来たことを後悔させてやれ!!!」

《side out》

《side 霊夢》

私達の目の前に巨大な金属の物体が落ちてきた。

それだけではなくおびただしい程の何かが降ってきていた。

それは、人型のものもあれば四足歩行や虫のように6本の脚があるものもあった。

しかし、それらには共通点があった。

これら全て生物ではない。

全身が金属で作られた機械なのだ。

私達は機械兵達を倒し続けた。

「クソツ!!キリが無いぞ!!」

男の天狗、風間 牙がそう言った。

幸い一体一体の耐久力あまりなく簡単に破壊することが出来る。

しかし、次から次へと湧いて出てくる。

まさか?!あの金属の物体、もとい巨大な三角錐の箱だ!

あれから際限なく出てきている。

中で作っているの?!

「霊夢!!私に任せろ!!マスタースパーク!!」

魔理沙がその箱にマスタースパークを撃った。

これで少しは楽に?!

なんと、その箱には傷1つ着いていなかった。

「なに?! 私のマスタースパークが!?!」

かなりの威力を誇るマスタースパークだ。

それほど強度があるのか?!

「よいしょっと。」

そんな声と共に犬走棍が剣を振り降ろした。

すると衝撃波が生じ木や岩を巻き込みながら三角錐の箱が真つ二つに割れた。

「な、なんて威力だ……。」

私達だけでなく、守矢の神達も呆気に取られていた。

真つ二つになった箱は爆発し木っ端微塵に砕けた。

「ボケっとしてる場合じゃないぞ、周りを見ろ。」

そう言ったかと思うと、彼女の腕から黒い何かが高速で伸びていき私達を襲おうとし

ていた機械兵達を貫いた。

黒いモヤ…彼女が…

そしてあつという間に近くにいた襲撃者達を倒してしまった。

「この近くのはこれで終わりか?」

「そうみたいだ。」

「気づいてますか? 天星先輩、なんか弱すぎませんか?」



そう天星と椀が会話している。

「よ、弱すぎるってどういうことですか?!」

文が聞く。

「……………本来こいつはもつと耐久力がある上にスピードもパワーも今以上にある。まあ、それはこいつを作ったあいつのさじ加減だけど……」

「あいつ?」

「そう、私の家臣の一人だ。」

「あなたの家臣?も、もしかしてこの襲撃はあなたのせいですか?!」

そう言ったかと思うと音が剣を椀に向けた。

「いやいや誤解だ。」

「信用できるか!!この裏切り者め!!」

そう続けて彼女は怒鳴る。

「ここで私が天誅を下してやる!!!」

そう言い彼女は距離を詰め、剣を振り降ろした。

「ま、まて!!山城おおお!!!」

牙が絶叫する。

空中にキラキラしたものが飛び散る。

しかし、それは杖の鮮血ではなかった。

音の剣を破片だった。

「な?! 確かに切ったはずなのに?!」

「話を聞けよ、危ないだろ?」

そう言い杖は何かを地面に捨てた。

音の剣先だ。彼女はへし折ったのだ。それも誰にも認知出来ない速度で……………。

「……………とにかくだ。早くこんなことをしでかしたあいつに話したい。」

「待ちなさい!」

「なんだ? 博麗の巫女。」

「今度という今度こそちやんと説明してくれるわよね!」

私は彼女にそう聞いた。

「~~お~~きる範囲でな。」

?!?!

遠くで巨大な爆発音が聞こえた。

「あれは?! にとり達のいた方向だ!!」

「さて、犬走!!」

「なんですか?!」

「私が行こう。」

「……いいんですね？」

「ああ。私がかかする。」

「お気をつけて。」

そう言い彼女は天星を見送った。

そして…

「さてと……2人とも仕事だ。機械兵ぶつ壊して回れ。」

独り言のようにそう言った。

次の瞬間！何も無いはずの空間に亀裂が入り中からとてつもない威圧力を放つ人の形をした化け物が出てきた。

「こ、この気配は?!」

どうやら守矢の神、神奈子の方は心当たりがあるようだ。

と云うか片方は永夜異変の時の邪龍じゃない?!

「りよーかい。」

「受けたまりました。」

すると、

「あ！主様！私やらないといけないことがありました！先にそれを終わらしてもいいで



「分かればよろしい。よろしく頼むぞ。」

ドサツ……

物音がした方向を向くとそこには腰を抜かした文がいた。

「だ、大丈夫ですか？文様？」

そう言い楯は彼女に近づき手を差し伸べていた。

文だけでは無い。この場にいた全員の脚が未だに震えているのが分かる。

もしも、もしもこいつが幻想郷に敵対でもしたら………間違いない、1時間足らずで幻想郷が滅ぼされる。

「ん？皆！第二波が来るぞ！」

そんな掛け声と共にいつの間にか周りにいた機械兵達が一斉に襲いかかってきた。

《side out》

《side 文》

……楯……あなたは何者なんですか？

……いえ！あなたが何者であろうと私の大事な大事な後輩です！！決して決してあなたを1人にはさせませんから！！

《side out》

## 4 1. 風神異変⑦

〈機械兵の母船にて〉

私の力では何とかできないのか?!

このままでは……………

せめて……………これだけでも……………

〈妖怪の山にて〉

《side 雑》

私達の目の前には地獄のような光景が映っていた。

突然、何か空から落ちてきたかと思うと、それらは我々を攻撃しだした。

幸い、戦闘不能になった人達には手を出さなかったおかげで死者は今のところではない。私には怪我一人にとりを奴らにバレないように匿うことしか出来なかった。

足がすくむ……生きた心地がしない……

「……雛……大丈夫？」

にとりが心配そうに声をかける。

「……うん……大丈夫。」

何が大丈夫なのか自分ですら分からなくなっていた。

次の瞬間!!

けたたましい警報音と共に車輪のような機械がこちらに向かってきた。

バレたの?!

こうなったら2人だけでも……

死を覚悟した私は機械の前に立ちはだかった。

「う、うああああ!!!!」

自分を奮い立たせるために絶叫する。

後6メートル!!

こい!!!

しかし、私の覚悟とは裏腹にその機械は上から降ってきた何かを押しつぶされた。

「よっと！危なかったなお前。」

私の、目の前には黒い硬そうな鱗で覆われた尻尾と蒼く輝く角を持った褐色肌の少女が先程の壊れた機械の上にたっていた。

「あ、あなたは?！」

「わたし? 王様の手下……と言っても分からないか。犬走椀の配下だ。」

も、椀の?!

「な、何事?! 雛?」

草むらに隠れていたにとりが顔を出した。

どうやらさっきの話は聞こえてなかったようだ。

「ちよつとどいてな。こいつら倒すか……ら!!!」

私達が話している間に2体の機械達が襲ってきた。

それを彼女は引つ掻き、まるで豆腐のように真つ二つに引き裂いた。

「もつと来そうだな……。危ないから避難しろ。そのあんたらも見とれてないで逃げな!!! これからここは地獄と化すからな!!!」

「お、おい！お前ら、今のうちに逃げるぞ!!」

どうやら他にも隠れていた人達が沢山居たようだ。





もし、少しでも私達が遅れていたら……

「ば、化け物……。」

誰かがそう言った。しかし、否定出来るものはそこにはいなかった。

《 side out 》

《 side 社 》

「なんて、凄まじい威力だ……。」

私は機械兵を片付けながらもファフニール殿の戦いを眺めていた。いや戦いと言うにはあまりにも一方的だな。

「……………」

本当の問題はこつちだ…。

「ラテイ才殿、いい加減機嫌を治してはくれまいか？怒られて悲しいのはわかるが……………」

私がそう彼女に問いかける。

「……………」

「え？」

「嬉しいですわ!!!主様に怒鳴られて!!彼女の私に対する怒りイ!!!それにあの膨大な魔力に鋭い威圧感!!!たまらないわアア

!!!」

そう彼女は突然、唾を垂らしながら絶叫する。

な、なんなんだこの人は?!!?

「ああ、ああ!!ああ!!早く!早く!早く!!あの方に会いたいわあ!!!」

そんなことを言いながら体をくねくねと動かす彼女に、隙を見つけたと言わんばかりに数えるのも面倒になるほどの機械兵が押し寄せてきた。

「邪魔」

そんな一言と共に機械兵達は跡形もなく消えた。

機械兵達を彼女が創った空間に放り込み、そのままその空間ごと消し去ったのだ。

この人もまたとんでもないな。

そして驚いたことに2人ともまだ少したりとも力を解放していないのだ。

「さすがだ……」

そう言い私は空中に黒い、魔力出できた球を空高く放った。

すると、まだ地面にたどり着いていない機械兵がその黒い球に吸い込まれていき、みるみると大きな鉄の塊と化した。

そしてその球は赤く溶けだしまるで小さな煮えたぎる太陽のようなものが出来た。  
……あの母船と思われる巨大な物体に当ててみよう。

炎符「フエイクスター」

私が放った火球は母船にぶつかり巨大な爆発を起こした。

しかし、傷1つ着いていない。

やはり一筋縄では行かないか……。

《side out》

—————

《side 霊夢》

なんなの、この衝撃波は?!

それなああの火の玉はどこから?!

「すげえ?! なんなんだあの魔法は?!」

魔理沙は興奮しているみたいだ。

確かに凄いけど……。

何?!

突然金属と金属がぶつかり合うような音が聞こえた。

そして母船から何か吐き出されたかと思うとそれはこちらに向かっていた。

地面に衝突したそれは!!!

巨大な人型の機械だった……。

《side out》

〈母船にて〉

な?!これを出すのか?!  
やめろやめろやめろやめろ  
!!!!

とまれ!!とまれ!!止まってくれええええええええ  
!!!!

しかし彼の意志とは裏腹にそれは止まらなかった。

## 42. 風神異変⑧

《side 椀》

S. A. M の野郎!!

あんな代物まで出しやがって!!

私達は、巨大な人型の機械兵を見上げていた。

高さは約15メートル

各部位には様々な武器が着いている。

そして何よりあの剣、特殊な金属で出来ている上に高周波の音波が流されていること  
によってどんな硬いものでも真っ二つだ。

私達は構えると、それも同時に構えた。

来る!!

私に向かってくると思えば反撃の準備に出た。

しかし、それは一瞬で消え。

音の目の前に現れ剣を振り上げた。

《side out》

《side 音》

私はとにかく犬走椀が嫌いだ。

理由は分からない。

社様達と一緒にいるからかもしれない。

それとも彼女の態度が気に食わないのかもしれない。

いや、答えは出ている。

嫉妬だ。

私には彼女にはないほどの力や才能がある。

なのに、なぜ色々な人が彼女に集まってくるのか。

ずっと不愉快だった。

確かに牙様や、社様までは実力が及ばないかもしれない……でも彼女よりは強いはず。

私はそう思っていた。

でもずっと弱いと思っていた彼女は次元の違う強さの持ち主だった。

あの威圧感を感じた時私は失神しそうになった。

そして現実を受け入れることが出来なかった。

もし、それを認めてしまうと私が取り残されているようで仕方なかったのだ。



私には社様や牙様に相応しくないそう思えて仕方なかった。

「音おおおおお!!!!避けろおおおおお!!!!」

牙様がそう絶叫する。相変わらずこの人は仲間思いで優しい人だ。  
どんな時でも仲間を大切にする。

私が彼に向かって微笑むと、巨大な機械兵の刃が私に振り下ろされた。

.....

.....

でもね。

私だって.....

強いんだから!!!

「舐めるなああああ!!! ガラクタ野郎!!!」

私の身体の隅から隅まで妖力が行き渡り溢れ出した。

溢れ出した妖力は紫色の霧のようなものに変色し私をまとった。

次第に霧は大きくなっていき、段々と人型になって行く。

そしてその形状は刀を持った鎧武者を連想させるような形だ。

今までより早く出来た!!

私の「妖力を纏う程度の能力」で作った鎧。

『朧富士』

私の朧富士はこの機械兵と同等の大きさがある!!!

私の動きと朧富士の動きは連動している。これならどんな大きさの相手でも対等に

戦うことが出来るはず!!!

私は朧富士を動かし敵を切り裂こうとした。

「行っけええええええ!!!」

私の攻撃は敵にあたり、機械兵は動かなくなった。

私……やっつんだ…。

《side out》

《side 権》

……なるほど。

すげえな。

「大丈夫ですか？」

近くにいた私が手を差し伸べる。

しかし彼女は私の手を払い除けた。

「この際だからはつきり言います。私はあなたが大嫌いです。」

ここに来てはつきりと言われた。

まあ知っていたけど。

「この件が終わったら上に連絡します!!あなたなんかより天魔様は遥にお強いですからね!!」

うーん、非常に面倒だ。

「お、おい!?なんともないのか?!

心配した牙様が彼女に近づいてきた。

「はい、私は何とか……」

さて、これからどうするか……

私が次にやる事を考えている時にそれは起きた。

金属と金属が擦れ合うような音と電子音と共に空中にある母船がどんどんと小さく変形した。

最終的にそれは円柱状の筒になりこちらへ向かって降ってきた。

爆音と共にそれは、地面に到達した。

「皆さん、守矢の神々を含めてです。絶対に手を出しては行けませんよ。避難することをおすすめします。」

私は全員に警告した。

「おいおい?!なんだ?!また機械兵だろ?て言うかお前も構えてるだろ?私らが手伝わない理由が無いんじゃないか?」

諏訪子様がそう言う。

「確かにそうですよ。機械兵達は数が多いものの実力はそこまでないんですから私達も手伝いますよ。」

そう早苗も同調して行った。

「はつきり言うわ。あんたら邪魔だ。」

私はそう言った。

「な?!」

「なんだと?!」

それぞれが色んな反応を示していた。

すると筒が開き中から金髪の少年が出てきた。

彼こそが私の配下の一人、Deus ex machina機械仕掛けの神

Star of ancient machine

略してS・A・Mだ。

「この子供が今回の首謀者?」

……………

「お前……………いつやられた?」

彼の胸元にはあの青い宝石が埋め込まれていた。

彼はゆつくりと歩いてくると、突然ピタリと止まった。

「……………マスター…申し訳ありません。不覚を取ってしまいました。あと数十秒後にリ

ミッターが解除されて攻撃が始まります。どうか私を破壊してください。」

「馬鹿言え!!!お前は絶対に助ける!!!二度とそんなことを言うな!!!」

もう、仲間が死ぬのはごめんだ……

機械音とともに彼の背中から4本の棘が伸びる。棘の先端が金色に光り彼は宙に浮く。トゲだけでなく彼の全身に光の線が規則正しく枝分かれし、かけ巡る。

さて……………と……………

嫌だけどちよつと委ねるか。

《side out》

《side 霊夢》

敵の少年が変形し、私の勘が全力で危険信号を発した。

しかし、次の瞬間そんなことが可愛く思えてくるほどの出来事が起こった。

犬走椀の全身に漆黒の痣が浮かび上がりまるで皮膚がひび割れたような風になって行く。

「……………」

今まで何度か彼女が戦ってきた所を見たことがあるけどこんなのは初めてだ。

「S. A. M. 我が貴様を直々に始末する。覚悟するがいい。」

「ちよつと?!さつきと言ってることが……う?!?!」

私はその先を話すことが出来なかった。

後少しでも口を開いていたら私は跡形もなく消えていたと思う。

「次はないと思え、虫けら。」

ツ?!そこまで言う?!

すると突然彼女と少年が消え、同時に衝撃波と轟音が響く。

2人がぶつかりあったのだ。

しかし、衝突し合った拳は少年の方が負け吹き飛んでいく。

木々や岩山を破壊しながら少年は吹き飛んでいく。

あまりの威力に少年は向かいの山まで吹き飛び衝突したことにより、その山には大き

な洞窟が出来た。

突然出来た洞窟が耐えられるはずもなく岩がその洞窟を満たして行き完全に洞窟が

埋まっていく。

しかし埋もれたはずの洞窟から一筋の光の線が飛び出し樫に向かって直進する。

彼女はそれをかわした。すると的を失った光は後ろの山にあたり、その山には巨大な

穴が空いた。

あまりの熱に当たった部分から溶けた岩が崩れ落ち、彼は文字道理山を消し飛ばしてしまったのだ。

「くだらん。汚らわしい熱線を我に向けるなど万死に値する。」

棍がそう言ったかと思うと洞窟が爆発し少年が高速でこちらに飛んできた。

その腕は紫色に光る剣があり、それで棍を切り裂こうとした。

流石の棍もダメージをウケるだろうと思つた瞬間!!

少年の胴体が真つ二つに斬られていた。

あまりの速さに棍が剣を抜いたことすら分からなかった。

地面に倒れた少年はまだ棍を殺すことを諦めていないのか下半身のない体で攻撃を

続けようとした。

グサツ!!

黒い瘴気で出来た槍が少年の胸を貫く。

少年は糸が切れた人形の様になくなってしまった。

止めなきや……でも恐怖で声が出ない。

「トドメだ。」

棍が腕を振り上げた。

その先には燃え盛る漆黒の炎が空を覆い尽くしていた。



こんなもの放たれたら少年所か私達が無事では済まない。  
しかし、そんなことを気にした様子もなく彼女は腕を振り下ろす。

「……………はあ?!……………ハア……………ハア……………ハア……………」

突然棍が膝を着いた。よく見ると痣も無くなっていた。

「マスター、感謝します。それと、とても怖かったので出来れば次はやめてくださいね。」

「馬鹿……………阿呆な事抜かした罰だと思え。もう二度とやらない…。二度と戻ってたまるか……………」

そう彼女達は言った。

「内の部下が迷惑をかけて申し訳なかつたです。でもこれは操られていただけなのでどうか彼は許してやってください。」

……………全て終わったのね。

「……………ハア……………宴会の準備は守矢がやっと来なさい。それで許してあげるわ。」

「「え?!私ら関係無くない?!」」

彼女達が口を揃えて言う。

「私に攻撃した罰よ。あんたら妖怪の山陣宮も出席しなさい。」

「え？いいのか?!」

「当たり前よ。ほらさっさと準備するわよ。魔理沙も手伝って！」

「……………」

「?魔理沙?」

「お、おう!悪い!ブーツとしてた!」

まったく…。

今日は疲れた…………。

沢山飲むぞ!

《side out》

## 43. 風神異変⑨

〈守矢神社にて〉

《side 霊夢》

私達は守矢神社で宴会を開いていた。

そこには、私や魔理沙、守矢達以外に以前異変を起こした鬼の伊吹萃香や紫、リグルやチルノ、妖怪の山陣営は大天狗達数名と私達の相手をした厄神や秋の神も来ていた。まだ来ていないが紅魔館組も来るらしい。

そして驚いた事に天魔も来ていたのだった。

彼女の話によるとこの宴会の事を報告したが実際に来たのはこの数名だったらしい。

まあ理由は……

「霊夢く飲まないのかあ？」

こいつだろうな。

鬼

かつてこの妖怪の山を支配していた大妖怪。天狗たちは鬼にはかなわない。

「そうよく霊夢。飲まないの？」

紫が私に絡んできた。

そんな紫を見て…

「そうだけ霊夢！」

酔った魔理沙までもが私に絡んできた。

暑苦しい！

……

「ねえ？どうするの？銀色の狼は……」

「銀色の狼？ああ！一体誰なんだろうな。」

魔理沙の口からとんでもない言葉が出てきた。

「は?!?!何言ってるの?!あんたも見たでしょ?!銀色の狼は……」

「え?だってお面つけてただろ?」

……おかしい……

もしかして記憶が改ざんされている?!

そう思った私はその場から飛び出した。

「ちよ?!?!どこ行くんだよ?」

「ちよつとトイレ!!」

《side out》

## 《side 早苗》

「ほ、本当に覚えていないのですか?!」

私は諏訪子様と加奈子様にあの白狼天狗についてきいた。

「そ、そう言われても頭にモヤがかかっているみたいで何も思い出せないんだよな……。」

そんな!!

私は立ち上がり宴会の会場を後にした。

## 《side out》

## 《side 文》

権……あなたのあの力……

一体権は何者なんですか?

そういうえばあなたはあまり昔の話をしてくれませんでしたね……。

なんだか権が別の所へ行ってしまったみたいで寂しいです。

「文? どうした?」

私の様子が気になった母が気にかけてくれた。

「いえ、なんでもありません……少し外の空気を吸ってきます。」

私は外へと向かった。

《side out》

〈守矢神社の裏手にて〉

《side 霊夢》

私の他にどうやら文と早苗が来ていた。そして何故か鍵山 雛まで来ていた。

「あんた……彼女について何か知ってるわね？」

「え?! そ、その……お強いとしかわからないです。」

そう彼女は言った。

「うむ、記憶が残っていたのはこれで全員ですか？」

私の背後から銀色の狼こと犬走椋が歩いてきた。

「あんた……」

「ちよつと待つてください。」

私が魔理沙の記憶を書き換えた彼女に文句を言おうとしたその時……

「隠れてないで出てきたらどうですか八雲 紫様。」

「あら、バレちゃった。」

ゆつくりと紫が歩いてきた。

「で？説明してくれますわよね？」

「ええ。何が聞きたいですか？」

?!

「まずは魔理沙たちに何をした?!返答によつてはタダじゃ済まさないわよ！」

私は彼女にそう言った。

「少し認識を合理化させただけです。」

「?!それって?!」

文が何かに気づいたようだ。

「ええ、そうです文様。天星先輩の能力です。」

確か…天星つてあの時文達と一緒にいた……

考えて見れば私達から銀色の狼の情報を引き出そうとしてたわね。

「精神に害を及ぼす能力ではないので安心してください。」

「次の質問いいかしら？」

「なんですか？」

紫が彼女に聞いた。

「あの機械の大群は何かしら？」

「……あれは私の部下S・A・Mが作ったものです……。」

「それは私達の幻想郷を脅かすつもりなのだ」と受け止めていいのかしら?」

紫とてつもない量の妖力が溢れ出る。

「待つて欲しい。今回の事は彼にも制御出来なかったんだ!!」

慌てているのか、口調がぐだけた。

「フランドールの件を覚えてるか?」

.....

「ええ、それが何か?」

「彼女の首元に青い宝石があつたことは?」

「...ええ覚えてるわ。」

「あの宝石を通してとある女神の魔力が流れる仕組みなんだ。その女神は人を操り弄ぶことを生きがいに行っている奴なんだ。その宝石がS・A・Mの胸元に埋め込まれていた。どういふことか分かるだろ?」

「そのS・A・Mとやらが操られていたと?あなたを言葉を信用しろとでも言いたいのですか?」

「ぐつ.....証拠がないが.....もし私の目的が幻想郷の破壊ならもう既にやってるよ!!!」

?!確かにあれほどの力だ。万が一、彼女の目的がそうなら既に幻想郷は跡形もなく消



えているだろう。

それに私の勤だけれど、彼女は平和を望んでいると思う。

「……そう……なら約束して、幻想郷に何か起こったらあなたもこの幻想郷を守りなさいー！」

「……そうしたいのだが……」

「何？取引に応じないつもりかしら？」

「妖怪の山の任務が……。」

「……椀……どうしてそこまでして妖怪の山に従うのですか？あなたなら、妖怪の山を乗っ取ることすら出来たのに……。」

「私はかつて目に映るものが全て敵だと思っていた時期がありました。そして私はある女神の言葉に乗せられて悪逆の限りを尽くしました。その結果世界の9割の生物が消えてしまった。」

「ちよつと待ちなさい!!」

私が待ったをかける。

「9割って……そんな事ある訳ないじゃない!!」

「………実際私のせいで世界のほとんどの生き物は死んだ。私をタルタロスに入れたあと神や魔神は生き残った生物の記憶を消し箱舟にいれ大地を再度燃やしその灰で肥料

を作りまずは植物の生える環境を整えた。その後には箱舟から生物達を出し、彼らに全てを委ねた。…実際私は見ていないから前半の話位しか知らないけど……。 ……軽蔑したか？」

もし、それが本当ならあの伝説の証拠が全くないのもうなずける。

破壊されたあとに世界が作られたのなら当然そのあとの生物が気付くわけがない。何せ破壊された事を知らない状態で新しく作られた世界を見たら最初からそうだったと思ひ込むはず。私達が住んでいる大陸も彼女によって割られたからあんな形をしているのだ。

「でもそれってあなたが居なければ我々は誕生しなかった事ですよね？あなたは破壊神かも知れませんが同時に私達を作るきっかけを作った創造神だと私は思います。だから軽蔑しません!!」

早苗がそう言った。

「…ただポジティブなのよ、でも彼女の言葉に一理ある…」

「…椀…まだ私の質問に答えてませんよ。」

文が静かにそう言った。

「……私が出来る最大の罪滅ぼしはこの世界を脅威から護ることです。確かに私は平和に生きたいですが、まずはこの楽園を護りたいです。それに他の種族と仲良くしたいで

す。」

「……椀は例え強くても不器用ですね。私の知ってる椀で安心しました。」

「私ももういいですわ。今回のことで妖怪の山と仲良く出来そうですし。」

「私達は先に宴会に戻りますね。加奈子様と諏訪子様も待つてますし。」

そう言つて文と紫と早苗が先に戻つた。

……

何か引つかかる。

「ねえ椀……本当はもう一つ目的があるんじゃない？ 私はまだ短い間だけど椀の友達だよ。何か隠してること位はわかるよ。」

先程まで何も話さなかつた雛が口を開いた。

私の勘はよく当たる。やはり何か隠しているようだ。

「……………私のもう一つの罪滅ぼしは……………あの女神を殺すことだ。」

そう言つた椀の眼は憎悪で燃えていた。

まるであの時の様に……

「さー2人とも戻りましょう！早く行かないと美味しいものがなくなりますよ。」

しかし直ぐに戻つていた。

《side out》

「妖怪の山のとある木の幹の上にて」

宴会の料理を楽しむ椀、そんな彼女を遠方から眺める影があった。

ローブに包まれたその人物は彼女を見て笑みを零したかと思うと踵を返し空気に溶けるように消えた。

踵を返した彼女には白い狼の耳が生えていた。

「よし、ネロ様に報告しよう。」

彼女の笑みは何を示すのか誰もわからない。

彼女本人以外は……

《side リグル》

……うわ、あいつこっち見てたな。

直接来ればいいのに。

やれやれ

《side out》

## 六章・星怨異変

## 44・星怨異変①

〈香霖堂にて〉

《side 魔理沙》

「邪魔するぜー。こーりん」

私は世話になったこーりんこと森近霖之助の店、香霖堂に来ていた。理由は、彼が無縁塚から持ってくる物が気になったからだ。

「今度は金払って行けよ。」

彼が私に忠告する。

……色々な物があるな。

…時計、変な形の置物、木彫りのフクロウなどなど  
一貫性の無いものばかりだ。

「…ガラクタしかないじゃねえか…」

私は気を落とす。

「おい、商品をガラクタ呼ばわりするな。」

こーりんがなんか言ってきたが、まあ無視しよう。

ん？これは……

私の目の間には奇妙な円盤が置いてあった。

それには針が5つあり、円盤には輪っかが円盤の中心に向かってどんどん小さくなるように埋め込まれていた。

それぞれの輪っかには様々な色の宝石が不規則に着いておりそれが色とりどりに輝いていた。

時計か？にしては針が多すぎる。

私はその円盤に触れてみた。

ん？針を回しているとあることに気づいた。

それぞれの輪っかは完全に繋がって居ない所がある。

そこに針を回して合わせると。

カチツ

何かカラクリが反応したようで

1番中心に近く小さな輪っかが縦に回転し円盤と垂直になった。

なんだこれ？よく見るとその輪っかには何も干渉していないようだ。

つまり浮いてる？

妖力は感じないが……

「これどこで見つけた？」

「ああ、無縁塚で拾ったんだが針が錆び付いてるのか全く動かないんだ。」  
???

「簡単に動かさせたけど……」

「そんなはずは……ちよつと貸してくれ。」

私はその円盤をこーりんに渡す。

しかし彼がどれだけ力を込めても針はピクリとも動かなかつた。

「……おかしいな……」

「なあ！こーりん！」

「どうせくれとか言うんだろ？」

流石に予想されてた。

「いいだろ？代わりに魔法薬の材料取って来てやつからよ！」

「………仕方ない…持ってけ泥棒。」

「へへっ、ありがとう。」

帰ったらこれを研究しよう！

《side out》

〈外の世界にて〉

《side 紫》

ビル群が並ぶ都会、時々私は外の世界のカフェに来て一時を過ごしている。

今日もいつもと同じくくつろいでいた。

幻想郷の外の妖怪達はあまり強くない。でも時々強い奴らが現れる。その時私は彼らを幻想郷に招き入れている。

そう、これはそのための偵察。決してサボってるわけじゃあないわよ。ただの休憩時間。

………魔神とその他の他種族に着いても調べたけどあまり情報は得られなかった。帰りましょうか。

私はカフェを出て適当な場所にたどり着き隙間を開いた。

「わあー！遅刻遅刻！……ってわああああ！！！」

私が隙間に入ったあと金髪の女子高生が隙間になだれ込んできた。

空中に隙間ができたから女子高生はそのまま落ちて行った。

「……」

……



しまった。

「はあ……まあいいか。ちよつとあなた！そのまま進めば大通に出るからそのまままっすぐ行くと神社があるわ。その巫女に話しかけなさい！」

あとと霊夢が何とかしてくれるはず……

「……分かりましたー！」

元氣いっぱい彼女は答えた。

「あと、森の中には入らないで……つてもう居ない。」

《side out》

《side ???》

変なおばさんにまっすぐ行くように言われたけど……

ちよつと寄り道していいこ！

こんな非日常滅多に味わえないしね！

私は森の中へ入っていった。

「さあ！未知の世界を求めて！」

私は森の中を突き進んで行った。

「ケケケッ！なんか小娘が道に迷ってるみたいだぜ！」  
「食っちゃまおうや！」

人喰い妖怪が彼女の後ろから迫る。……そして…

《《side out》》

〈博麗神社にて〉

《《side 霊夢》》

私はお茶をすすっていた。

今日は珍しく誰も来ていない。まあその方がいいけど……

そんな私の一時を邪魔する人がいた。

「霊夢く。」

紫だ？

「何？」

「あなたと同じくらいの子来てない？髪は金髪で……」

誰のことだろう？

「知らないわ。誰のこと？」

「ちよつと外の世界から間違つて連れてきちゃった！」

「ちよつと?!」

大丈夫なんでしょうね?!

「探してくるわ!」

私が立ち上がったその時、

「れ、霊夢! 助けくれなのか!」

ルーミアが泣きついてきた。

「なんか変な人が剣を振り回して近づいて来る妖怪をバツサバツサと切りつけているのかー! 最初は襲ってきた人喰い妖怪を相手してたんだけど、どんどんその仲間が集まってきたり収集がつかなくなったのかー。」

「案内して!」

私と紫はルーミアの案内に従って飛んで行った。

「に、人間如きが! 舐めるなよ!!」

「んーまだ来るの?」

人喰い妖怪達と対峙している彼女の後ろには無数の妖怪達の死体で出来た山があった。

「襲って来なけりやもう攻撃しないけど……まだ続ける?」

彼女は輝く剣を振り回して人喰い妖怪の群れに近づいて行った。

「待ちなさい！」

「ん？だれ？あ！あの時のおばさんもいる！」

「誰がおばさんよ!!!」

「今はやめて紫！」

私は彼女の前に立ちはだかった。

「流石にやり過ぎだと思うわ。」

「んー？私もここまでやりたくなかったんだけどねー。執拗いから仕方なくってか  
んじー？」

嘘だ……あの目は戦いを楽しんでいる目だ。

「あーもしかしてお姉さん、私が一方的に攻撃したと思ってる？」

「いえ、思っていないわ。ただもうやめて欲しいだけよ。あんた達も早くどこかへ行きな  
さい。」

私の声に人喰い妖怪達が散り散りにどこかへ逃げていく。

「……気が変わった。お姉さん！私と戦ってよ！殺しはしないけど大怪我するかもだけ  
ど……でも、命さえあれば何とでもなるよね？」

そう言い彼女は距離を詰めた！

は、早すぎる！

避けても一太刀浴びてしまう！

私が反撃に出ようとしたその時！

バチイイイイ！！！！

赤色の雷が私と彼女の間で落ちて来た。

「霊夢さん、お嬢様からお届け物です。」

目の前には紅魔館に住んでいる小悪魔が右手で私に布で包まれた箱をわたし、左手で彼女の斬撃を剣で受け止めていた。

「何やらややこしい事になっているようですね？」

《side out》

## 45. 星怨異変②

〈霧雨魔法店にて〉

《side 魔理沙》

……… 凄い……… 凄いぞ!!

この円盤のパズルを解いた途端頭の中に未知の魔法の知識がどんどん入ってくる!!

この知識さえあれば!

霊夢を超えられる!!

………

……… 許さない

ん? 何か声が……

許さないぞ魔王!!

その声は私の口から発せられたものだった。

## 《side out》

〈博麗神社近辺にて〉

## 《side 霊夢》

「あ、あんた！なんでこんな所に？」

私は目の前にいる小悪魔に話しかけた。

「ちよつと咲夜さんが買い出しに行つてて代わりに私が届けに来ました。これお嬢様からいつもありがとうつて言つてましたよ。」

ギギ……ギチギチ……

剣と剣が混じりあつているため金属が擦れたような不快な音がする。

「お姉さん……誰なの？………魔神の匂いがする。」

「この子！魔神の事を知つてる?!

「そういうあなたはペンドラゴン一族ですね？アーサー王の子孫の……。」

アーサー王?!あのおとぎ話の?!まさか魔神と関わりが?!

「……シャーロット・ペンドラゴンよ。お姉さんは?」

「バアルです。よろしく。」

「ねえ、どいてくれない?これからあのお姉さんと闘うの!邪魔しないで!」

「嫌がつてるじゃないですか。ダメですよ。」

小悪魔基バアルがそう言った途端シャーロットの剣がさらに輝き出した。

「……………くっ!!」

突然バアルが苦悶の表情を浮かべた。

「この剣すごいでしょう?この剣はね……………」

「魔神、天使、神…………理を外れた特定の種族には絶大な威力を誇る。」

何と剣に着いて語ったのは他ならぬバアルだった。

「詳しいねお姉さん……………」

「そりやあもちろんずつと間近で見てきましたから。」

「お姉さん…………もしかして…………勇者の1人?」

?!?!まさか魔王を打ち倒そうとしていた勇者の1人が魔神でそれも魔王の妹だったな

んて!!

私と紫は驚きを隠せないでいた。



「さあ？どうだろうね？」

「決めた!!お姉さんと闘う!!」

「?!ちよ?!ちよつと待っててください!」

バアルが何かを言おうとしている。

先程から苦しそうだ。

「フフフ…攻撃はもう始まつてるんだよ?痛いでしょ?赤く熱せられた針を身体中に刺されたみたいにな……」

その言葉を裏付けるかのようにバアルが膝をつく。

「私……あなたとは戦いたくないです……。」

シャーロットはそんな彼女の言葉とはお構い無しに剣を振り上げる。

「お姉さん!頑張れ!!」

まずい!!このままじゃ!!!

私が飛び込もうとしたその時!!!

あたり一面が白銀の世界へと姿を変えた。

「危なかつたぞ!」

声のした方を向く。

そこには見覚えのある青い妖精が宙を舞っていた。

チルノだ!!でもこんな威力こいつに出せないはずだ!!!

……………強烈にイヤな予感がする。

「か、身体が動かない。」

そこには半身を氷で覆われたシャーロットが剣を振り上げたままの体制で立っていた。

「な、なんであなたがここに?!?!」

私よりもバアルの方が驚いていた。

て言うか知り合いつてことは……………

「……………チルノ…あんた……………」

「ふっふーん!私はさいきよーのチルノだー!」

そんな事を彼女は言った。

「まあ!細かく言うとおれだ!最初の妖精達の女王だぞー!」

身近に居たのね……………大戦を生き延びた他種族。

「くうー!!なんで動けないんだー!!」

シャーロットが脱出を試みようとしている。

しかし、

「その剣は確かに理を外れた種族には強いが……それ以外の種族にとつてはただの硬いだけの剣である！」

チルノは高々とそう言った。

「まあ、あいつはそんな弱点を能力と技術で克服したけどな……」

「ん？何か言った？」

「いや、何も。」

「さてと……」

紫がゆっくりとシャーロットに近づいて行く。

「この子をどうしようかしら？」

「まずは博麗神社に連れていこうぜ！シャーロットも暴れんなよ！」

チルノが彼女にそう言った。

「キィ〜!!なんであなたに指図されないと行けないのよ〜!!」

まだそんなことを言うか……。

「仕方ない……」

そう言いチルノは何かを取り出した。

「そ、それは勇者のロケット!?まさかあなたも?!」

「ああ!そうだぜ!もうやめようや!平和になった世界でこんなことをしても意味な

「いってー！」

「……分かったよ。」

ようやく理解して貰えたようだ。

〈博麗神社にて〉

「くうー！お茶美味しい！」

シャーロットはお茶を啜りそう言った。

ルーミアには帰ってもらって博麗神社にはシャーロットとチルノ、紫、そしてバアルに来てもらった。

「それで？」

紫がチルノに問う。

「この子は？」

「アーサー王の子孫とだけしか知らない。あの大战から皆と疎遠になっちゃったから……。」

「あんたらがああの伝説の勇者？」

「全員では無いですけどね。」

バアルが答える。

「妖精は本来弱いはずだけど？」

「そうだ妖精といえば弱いことで有名だ。あんな森の一角の環境を変えるほどの力を持っているのは不自然だ。」

「うーん……大戦前の妖精は肉体を持っていたんだけどね……どうやら長い年月をかけて自然とどうかしたみたいなんだだから弱くなってるんだと思う。肉体って大事だよ！あるかないかってだけで力の安定度が変わる。」

「つまり大昔の妖精はあんな化け物じみた力を持つてること？」

「だとしたらこの時代に生まれて本当に良かったと思う。」

「いや、確かに今の皆より昔のみんなの方が強いけどそれはアタイが女王種だからだぞ！アタイみたいなやつが特別なんだ！」

「……なるほど……」

「ちなみにアタイの他にもう1人女王種が居るからよろしくな！」

「そんなことを軽く彼女は言ってきた……」

「……頭が痛い……」

「……あなたの知ってる範囲で良いから幻想郷にどれだけあんたら見たいなやつが居るのか教えて……」

「紫が疲れきった声で聞いた。」

「うわ、目も死んで……」

「アタイの知る中で魔神は霊夢たちが知ってるので全てかな？妖精はアタイとテイターニアだろ？あとは……………」

突然チルノが黙りこくろ。

「もう1人知ってる人がいるんだけど…………彼女特殊でね…」

「良いから言いなさい！」

紫が言う。

「彼女に書いて話す前にまずは前提としてある物語を知ってもらわないと。」

そう言い彼女は語り出した。

「大戦が起こるはるか前1つの存在と共に宇宙は誕生した。その存在は宇宙その物で絶対的な力を持っている。わかりやすく言うと全ての宇宙の情報はもちろん、法則、運命、未来を知っていてそれら宇宙の全てを司っている。まあつまりそれは宇宙その物と言っても過言では無い。ここでこの存在をXって言わね。」

私は彼女の口から発したその言葉に絶句するしか無かった。

「しかし、そんなXの誕生と共に4つの特異点が生まれた。Xは奴らを支配することが出来なかった。

1つは世界の全てを喰らおうとし

1つは存在するだけで世界の理をXが理解の及ばないほどねじ曲げ

1つは生命を繋げ異常な進化を促し。

1つは暴走する莫大な量のエネルギーその物であり何かを追い求めている。

私らはそれらをX含め五大厄災と呼んでいる。」

……

「昔Xは4つの存在を作った世界に放り込み放置したところ、その世界は極寒と灼熱で安定せず絶えず謎の属性の嵐が吹き荒れていてそこに住む生き物も植物も異常で凶暴、大気中には虹色のモヤがかかっているそのモヤに触れると精神も肉体もおかしくなる。それに加え磁場が狂っているのか時間の流れもめちゃくちゃ。人所か神も魔神も住めない忌界って呼ばれるようになった。」

なんでこんな話をしているのか理解出来ない。

いや、したくない!!

「本題はここから、五大厄災の内の1人が幻想郷に住み着いている。」

「はあ?!?」

大声をあげたのはまさかのバアルだった。

「どいつなんですか?!」

「……Lord of swarm: 生命は彼女の魔力に汚染されると彼女の命令には

逆らえない。それに加え汚染した生命の情報を元に新たな生命を作ることが出来る。

そんな彼女の様子から生命を一つに繋いぎし大群の王と呼ばれている。」

「そ、そいつはどんな風貌なの?!」

「霊夢はもう会ってるよ。宴会の片付け手伝ってくれてたじゃん。リグルだよ。」

「?!」

「彼女は幻想郷が大好きだから安心して良いと思うよ。」

まさか、ただの虫の妖怪だと思っただのに……

「ちなみに補足だけどリグルは大戦のとき滅んだ生命の再建のため生命達を保管する箱舟計画に手を貸してたよ。もうこんな時間か！ちよつと用事あるから帰るね！」

そう言っただどこかへ飛んで行ってしまった。

「霊夢お姉さん……」

シャーロットが話しかけて来た。

「何?」

「お茶おかわり。」

《side out》

へっくしゅん!!!



んー？風邪かな？そんなはずないと思うけどなー。

## 46. 星怨異変③

〈妖怪の山 とある場所にて〉

《side 椀》

「あーっ。」

私は退屈だったので声を出してみた。

誰も来ない。

誰もいない。

そして、ロクにサボれない。

本来なら私は今頃隠れて詰み将棋をしているはずだ。

これが案外バレない。

しかし、この間から警備が強化されており私の担当の場所にはもう1人哨戒任務にあたる事になった。

この便利な千里眼のおかげで私は彼女と一緒に行動しなくていい。

「……何間の抜けた声を出しているんですか？」

うへえ……

来た……

「申し訳ありません。山城様。」

そう、もう1人の担当は音だ。

彼女には私の千里眼の事を説明してあるが頑固な性格から直接確かめないと気がすまないらしい。

「……………ふん！私よりも遥かに強いくせに敬語なんて使つて！」

……………今なんて

「な、なんで覚えてるのですか?！」

私は彼女に聞く。

「知りませんよ。覚えてたんですから仕方ないでしょ?」

そう彼女は落ち着き払った声で言った。

「……………なんでそんなに落ち着いてるんですか?」

「……………天星様が説明してくれました……………」

仕事が早くて助かる。

「ん?なんで上に報告しないんですか?」

こんな脳みそがカチカチなやつが上に報告しないわけが無いはずだ。

「……何か失礼な事考えてませんか？……あなたの配下とやたらに脅迫されたんですよ！あの私を殺そうとした！」

「またアイツか……きつく言っておきますから許してやってください。」

彼女が怒っているのはプライドをへし折られたからだろう。

「ふん！私は見回りの続きをします。」

そう言つて彼女は立ち去つた。

「サボつたら容赦なく上に報告しますからね。」

……………ちくしょう……

「もう、行きましたよ。」

私はそう言つた。

「そうですか！」

そう言つて飛び出してきたのは文様だった。

「何の御用ですか？」

私は彼女に聞いた。

何か取引をするかもしれない。

「椛に会いに来ただけです。」

「……勤務中なのでお帰りください……何抱きついているんですか?!」

彼女は私の背後から私を抱き抱えた。

「ふふ……椛からいい匂いがします。」

「な、何してるんですか?! 一旦離れてください!」

「そうだ! 椛! あなた他の天狗の中で噂になってましたよ!」

「う、噂?」

なんの事だ? 戦闘の時に破壊した山は元通りに天星先輩が直してくれたし記憶も一部を除いて改ざんしたはずだ。

「なんでも白狼天狗の中に博麗の巫女の全力を受け止めて無傷だった者がいるって!」

あ!あの時か!

「椛はものすごく強いから羨ましいです。」

……

「私はこの強さを悪事にずっと使ってきました。」

「昔は」でしょ? 貴方がかつて魔王ヴァナルガンドと呼ばれていたのは知っていま

す。でも今貴方は白狼天狗で私のおも……可愛い部下の犬走樵です。」

……文様

「今、おもちゃって言いかけませんでした？」

「イエ、ベツニ。」

「おい、目を合わせろ。」

「コホン……とにかくあまり昔の事を考えすぎないでください。その時いなかった私が言うのもなんですが……いえ、居なかったからこそ言えます。」

……

「樵、提案があるのですが……私の直属の部下になってくれませんか？大天狗である私なら上手く樵達を隠しきることが出来るはずです！」

……

「文様……」

「はいー！」

「至急、紅魔館の小悪魔を読んできてください。今すぐです！」

私は立ち上がり、どこからともなく現れたレーザーを瘴気の盾で防いだ。

「な、何事ですか?!それに、あれは!?魔理沙さん?!」

「急いでください!!」

「は、はい!」

そう言い文様は猛スピードで飛んで行った。

私は目の前で飛んでいる魔力を帯びた霧雨魔理沙を見た。

「お前……何故ここに居る?」

私の間に彼女はこう言った。

「全てを滅ぼした貴様に対する報復だ……」

「その為に、何も関係ない少女の体に乗っ取るのか?」

「飛んだ勇者だな?」星の管理者 よお!」

私は静かに鞘から剣を抜いた。

《side out》

## 47. 星怨異変④

〈妖怪の山にて〉

《side 椀》

「……………」

私は『星の管理者』と一定の距離を保ち睨み合っていた。

「犬走椀……………」

最悪のタイミングで音が戻ってきた。

「来るな!!」

私が一瞬彼女から目を離れた時!!

星魚「グレガリアス・ピスケス」  
群れなす魚座

彼女が腕から無数の魚の形をした光がこちらに向かってくる。

「な、何を?!!」



私は音を抱えその場から飛び退いた。

私と音にはかなりの距離があつたが奴の攻撃はそんな距離を虫する程、広範囲だつた。

光の魚群達が当たつた場所には大量の溝があつた。

あれに当たると私はともかく音はバラバラに刻まれていただろう。

「何のつもりですか?! 人間!! これは妖怪の山への宣戦布告と受け取りますよ!!」

音が奴に向かって言う。

「黙れ!! 全ての悪の元凶である魔王に加担している貴様らなど私が滅ぼしてやる。」

……こいつ、こんなに話が通じないやつだったか?

「貴様も裁きを受けよ。」

やつが右手を突き出す。

「まずい!! 音を抱えながらじゃ戦えない!

「逃げて下さい!!!」

私は音にそう言い投げ飛ばした。

その瞬間私は奴のレーザーに吹き飛ばされた。

「ゲホッゲホッ!!! 随分と威力が弱くなっているじゃないか……」

私はいくつもの木をなぎ倒しようやく止まることが出来た。

「それはこちらのセリフだ。この程度でその様とは……。まあいい貴様には絶望を味わって貰おう。」

彼女は視線を逸らし腰を抜かした音に向けた。

「なんで、まだいるんですか!!」

私は彼女に怒鳴る。

「……………うぐ?!…かは?!」

音が突然そんなうめき声を出し首を抑えたかと思うと宙に浮いた。

音にゆっくと奴が近づく。

「おい!? そいつは関係ないだろ?!」

私の言葉を見無視し彼女は何かを取り出した。

それは……見覚えのあるものだった。

「貴様!!…何故それを持っている!!!」

私は魔力を撒き散らしながら怒鳴った。

辺りから鳥が一斉に飛び立つ。

「神の裁きだ。」

彼女が手に持っていたのは、あの青い宝石だった。

彼女はそれを握ったかと思うと……

音の心臓の中に埋め込んだ。

「貴様アアアアアア!!!」

〈時は少し遡る：紅魔館にて〉

《side 小悪魔（バアル）》

……この幻想郷に……五大厄災が……

頭が痛い。

それも、一番生命に対して被害を及ぼす上に何考えてるかわからないやつじゃないですか……

その上……アースーの子孫まで幻想入りするなんて……

「バアル? どうしたの?」

パチュリー様が私に話しかけて来る。

「いえ…なんでもありません。」

私は笑顔でそう返した。

「……博麗神社で何かあったの？」

「少し昔の知り合い関係で……」

「知り合い？」

「まあまあ！そんなことはいじやないですか。」

私は何とか誤魔化そうとしていた。

「……そう…そろそろ魔理沙が入ってくるから今度こそ捕まえなさい。」

「はい……………?!」

私はとてつもない程の魔力を感じた。

「ん？射命丸文？珍しいわね…彼女が来るなんて…何か慌てる?!」

どうやら射命丸さんが入って来たらしい。

「パチュリーさん！あと小悪魔さんでしたっけ？至急妖怪の山に来てください！」

「私達に何の関係があるのかしら？」

「そ、それは……………」

射命丸さんが言い留まる。

「パチュリー様…………紅魔館付近に姉さんと思わしき魔力が急接近しています…………この

速度は……瞬間移動です！」

〈紅魔館付近にて〉

私は紅魔館ら飛び出した。

その目の前には

姉さんと天星さん

それと対峙する巨大な妖力で出来た鎧武者。

そして、

私の戦友が飛んでいた。

《side out》

《side フラン》

ん？ヴァナルガンド姉様が来てる?!

私は飛び出そうとした。

でも……他にも誰か居るみたい…

誰だろう？

《 side out 》

〈博麗神社にて〉

《 side 霊夢 》

このシャーロットって子どもしょうかしら……

普通なら外の世界へと送るけど……

まだ何か大切な情報を持つてるかもしれない。

………なんで私ばかりこんな目に……

「………霊夢お姉さん。」

「今度は何？」

「ちよつと行ってくる！」

「はいはい。行ってらっしゃ………つてちよつと待ちなさい！え?!もう居ない?!待ちな

さい!!」

私は彼女を追いかけて行った。

《 side out 》

〈太陽の花畑にて〉

《side チルノ》

「……………」

「あら？チルノどうしたのかしら？」

「ごめん！幽香！ちよつと用事が出来た！」

私は彼女にそう言った。

「え?!急にどうしたのチルノちゃん。」

大妖精ことティターニアが私に聞いてきた。

「大ちゃん一緒に来て！」

私は大ちゃんを引っ張って行った。

「どうしたんだろ？」

1人残された幽香は首を傾げることしか出来なかつた。

「あ、クッキー残してる……ラッキー！」

《side out》

## 48. 星怨異変⑤

〈紅魔館 近辺にて〉

《side 椀》

「椀の指示通りにここへ飛ばしたぞ!!」

途中で合流した天星先輩は驚きながらもしつかりと私のお願いを聞いてくれた。

「ありがとうございます。私が2人を食い止めますのでバアルに状況説明を!!」

私は迫り来る隴富士の刃を受け止めながら弾幕を撃ち落とした。

《side out》

〈紅魔館内部のある部屋にて〉

《side フラン》

さっきの爆発音がしてから妖精メイド達がパニックになり始めた。

私はお姉様を見つけた。

「お姉様!」



「フラン！」

「何が起きたの？」

「まだ分からないけど大丈夫よ！」

お姉様は必死に私を安心させようとしていた。

「外にヴァ……………銀色の狼のお姉様が何かと戦ってるの！私も行かなくちゃ！」

私はそう言い飛び出した。

「ちよつと待って!!フラン!!」

《side out》

《side 霊夢》

「ちよつと！待ちなさい！」

私がシャーロットを追いかけると彼女は紅魔館の方向へ向いた。

「……………やつぱり…嫌な予感が当たった。」

彼女はまっすぐとある場所へ視線を向けていた。

そこでは熾烈な戦いをするヴァナルガンドと山城 音

そして

魔理沙がいた。

《side out》

《side 社》

私は一通り今の状況を3人に説明し終えた。

「……何事?!」

博麗の巫女と謎の剣を持った少女、そして恐らく屋敷に住んでいる金髪の吸血鬼まで来た。

「またもう一度説明しないと行けないのか……」

「端的に言うとも魔理沙と音は操られているって言うことよ。ついでに言うとも操ってるのはバアルの知り合いみたい。」

「魔女がそう言った。」

「私達も助けに行かなきゃ!!」

吸血鬼ブランドールがそう言った。

「……ねえ、あんた!魔理沙の事を操ってる奴の弱点を言いなさい!」

「……………」

「バアル……………っ?!」

さつきまで黙っていたバアルから突然魔力が溢れだしてきた。  
バチ…バチバチ！

赤い稲妻のようなエネルギーが辺りにほとばしる。

「……ねえ…あの朧富士とか言うんですけどつけ？本体に当てなければ大丈夫ですよね？」

「ああ、そうだが…」

そう聞く彼女の体には漆黒の瘴気が額に紋様を浮かべていた。

額だけではなく羽からも無数の棘のように瘴気が突き出ていた。

《side out》

《side パチュリー》

「ば、バアル？」

私はかろうじて彼女に話しかけた。

彼女から放たれ殺気、魔力、気配全てが私達の足をすくめた。

それに、いつもはヘラヘラ笑っている彼女が怖い顔をしていた。

間違いなく怒っている。

ゴゴゴゴゴ

地震でも怒っているかのように全てのものが揺れている。

次の瞬間、彼女が翼を大きく広げたかと思うと私達は衝撃波によって前が見えなくなつた。

《side out》

《side 椀》

クソツ!!

魔理沙と音、どちらも傷つける訳には行かない!

「天星先輩! 奴を引き剥がせませんか?!

私は問う。

「出来なくはないが魔理沙や音に後遺症が残る!」

「却下です!!」

音の斬撃を私が受け止め、向かってきた弾幕を天星先輩が逸らした。

「地獄に落ちろ!!」

魔理沙が私に怒鳴る。

次の瞬間、音が驚異的な速度で吹き飛ばされていく。

地面に大きなクレーターが出来る。

仰向けに倒れている隴富士の上にはバアルが立っていた。

いや、踏みつけていた。

あの体格差でもそう見えざるを得なかった。

ギシギシと音を立て隼富士が立ち上がろうとする。

### 雷速針

目にも止まらぬ速さで赤色の電撃で出来た槍が隼富士に打ち込まれていく。

しかし効果が内容に見えた。

それでも立ち上がろうとする隼富士

「……まだだ……」

彼女が足を上げると同時に全ての槍が更に放電する。

そして彼女が足を振り下ろした時全ての槍が光を超える速さで隼富士に打ち込まれていく。

それだけでは無い撃ち込まれた槍は破裂し更に放電する。

「おいおいおいおい!!!音は大丈夫なのか?!?!」

私は慌てて聞く。

「大丈夫ですよ。ただ数日は目覚めないかもしれないかもしれませんが……」

そう言い彼女は煙を上げて倒れる音に触れた。

「……良かった……生きてる。殺したかと思った……」

「おい！聞こえたぞ!!」

「な、何をですか?!べ、別に威力を間違えた訳じゃありませんからね!!」  
すまない音。今度何か奢ってやるから。

「……………さて…」

そう言い彼女は威圧感を撒き散らしながら魔理沙の方を向いた。

「分かっているだろうな……………アトラス!!!」

……………今日は大嵐が来るぞ。

《side out》

## 49・星怨異変⑥

《side バアル》

「邪魔をするな、迅雷の魔神。」

……本当に話が通じない。

「情けないな……あなた程の人が安易に暗示にかけられるなんて……」

「全ては悪の権化、魔王を討伐する為だ!!」

………っ!!!

「対戦は終わった!!!いつまで囚われ続けるつもりだ!!!」

私はいてもたつてもいられず思わず怒鳴る。

こいつだけだ。こいつだけあの時から何も変わっていない。

変わろうとしていない。

「黙れ!!」

彼女はそう言い返し弾幕をはる。

「クソッ!あの威力はまずい!!」

そう言い姉さんは攻撃をしようとする。

そんな彼女を私は止めた。

「……なんのつもりだ？」

「あいつは私達の仲間です。彼女がずっと悪夢の中に囚われ続けているのは私達のせいです。私達が納得の出来る理由を説明しなかった……いや、出来なかったからです。だから、どうか……私に止めさせてください。」

弾幕が迫ってくる。

「……何を言っている……本当に悪いのは私だぞ……でもお前がやりたいなら……仲間を救ってやれ!!」

よし!!

私は弾幕に向かい雷撃を放った。

空に無数の爆発が起こる。

本番はこれからだ!!!

《side out》

《side 霊夢》

衝撃波とともにバアルが飛んで行ったかと思うとすぐさま戦闘が始まった。

次元が違う過ぎる!!



彼女が対峙しているのは魔理沙だ！

私の友人だ！

「霊夢……。」

フランが手を握ってくる。

「私も同じ気持ちだよ。自分が心底無力だと思うよね？」

「どうやら彼女もまだ私と同じようだ。」

「………何か…何か手はないか?!

あ!!

「一か八かだが……あれをやれば何とか……」

「少し離れて……」

「霊夢？」

「神降ろしをする。」

神を降ろせば何とかなるかもしれない。

リスクはある。

どんな奴が来るのかも分からない。それに勝てるかも分からない。

私は座禅を組み精神統一をする。

〈靈夢の深層心理にて〉

私は目を開ける。

昔、修行の時に習ったけど上手くいって良かった。

私は目の前に見える人影を見つけた。

「貴方が来てくれたの？」

「……………」

「もしかして知らないかも知れないけど実は世界は…………」

「知ってる。」

その神は言う。

「な?!」

「ついでに言うとおんたらの現状も分かっている。バアルが戦ってるんだろ？」

「知り合いなの?!」

「ただの腐れ縁だよ。同じ雷属性だからな。」

「名前は何？」

私は聞く。

「後でアイツに聞け。」

辺りが輝き出し、どんどん眩しくなる。

「なあ、私に会うのは今回が最初で最後かもしれないから言っておくわ。くれぐれも魔神を憑依させようと思うなよ。」

「なんで？」

「あんたの体質に合わない。どうなるかも分からないからな。」

そう彼女は行つた。

そして……

《side out》

《side バアル》

……やっぱり、あの体を使っているからろくな攻撃が出来ない。

どうしよう……

思い悩んでいる私の前に博麗の巫女が現れた。

見覚えのある雷を纏って。

「これで私もあんたらの足でまといにならずに済むわ!!」

彼女は左手の槌を振り回しながらそう言う。

「どいてください！あいつは私の仲間です！」

「その前に私の親友の体に乗っ取ってるでしょうが!!! 私が引き剥がすわ!」  
そう言い彼女は雷を撒き散らしながら魔理沙へと向かって行った。

《 s i d e o u t 》

## 50. 星怨異変⑦

〈side 霊夢〉

「魔理沙アー!!!」

私は友の名前を叫びながら飛んで行った。

何とかしてこの御札を貼らなければ!

この御札を貼れば魔理沙の中にいる奴を追い出せる!

「邪魔をするなアアアア!!!」

魔理沙も叫ぶ。

私に向けて無数の弾幕を撃って来る。

その光景は圧巻だった。

まるで流星群の中にいるようだ。

見惚れてる場合じゃない! 確実に死ぬ!!

私は咄嗟に防御した。

私を纏う結界にヒビが入る。

くっ!!! 持たない!

遂に私の結界が砕け散った。

私は、私は友達1人助けられずに死んでいくのか…。

私は死を覚悟した。

しかし……

『おい！あんな攻撃でどうこうなる私じゃないよ！その手の槌は飾りじゃないんだぜ  
!!』

何者かが私に話しかける。

私は手に持っていた槌を空へ向けた。

瞬間！青いイナズマが槌に集まる。

私はその槌をなりふり構わず振った。

ゴロゴロゴロゴロ  
!!!!

爆音がしたかと思うと魔理沙へ強大な雷のエネルギーが向かっていった。

「オノレエエエエエ!!!」

魔理沙は絶叫しながら防御壁を張る。

うそ?!あれでもまだ聞いてないの?!

「霊夢さん!!加勢します!!」

バアルがそう言い私の雷と共に電撃を放った。

魔理沙の防御壁が燃えていく。

これなら?!

「な?!くっ!!」

バアルは突然攻撃を辞め魔理沙へ猛スピードで飛んで行った。

「ど、どうしたの?!」

私が尋ねるも

「間に合え!!!」

バアルがそう言う。

「先輩!!もし降ってきたらどれくらい撃ち落とせますか?!」

「全部は無理だ!!」

椀と社がそんな会話をする。

「どきなさいバアル!!あなたに当たるわ!!」

私は思わず攻撃を中止する。

それを好機と見た魔理沙はバアルを結界の中に封じ込めた。

「やめろおおおおおおおおお!!!」

何が始まるっているの?!

その時、突然空に巨大な穴が開く。そこから巨大な岩石が燃えながら降ってくるではないか?!

まさか?!これの事?!

「貴様ら!この地諸共消え去るがいい!!!」

「させないよ!!」

そんな声と共に魔理沙が氷の柱の中に拘束される。

「貴様アア!!妖精王!!!」

その声の主はチルノだった。

「…いつの話をしてるんだ?アタイはもう違うぞ。」

そう言った彼女の背後から何かが飛び出して行き、そのまま魔理沙へと向かっていった。

……槍?

しかし槍にしてはあまりにも大きすぎる。矛の部分ですら私より大きい。

「チルノちゃん!あとは私に任せてあの隕石を何とかして!!」

「了解!妖精王様!」



「どうやらその槍を操ってるのはチルノのそばによくいる大妖精だった。何とか1個で済んだんだが……どうしよう。大きすぎる。」

もしかしてもつと来てたかもしれないってこと?!

「みんなー!!」

フランが私達に声をかけてきた。

「私があれを壊すから!!」

な?!

「できるのか?!」

チルノが彼女に聞く。

「うん! 出来ると思う!」

「そうか! じゃあ次は霊夢だ! 早く魔理沙を解放してやろう!」

?!!

「そうね!」

私は無数の木々に拘束された魔理沙の方へ向かった。

ドゴオオオオオンンンン!!!!!!

頭上で聞いた事の無いような爆発音が聞こえた。

しかし、なりふり構ってられない。

「魔理沙アアアア!!!」

私はそう叫びながら魔理沙に御札を張った。

次の瞬間私は吹き飛ばされていた。

-----

私は目が覚めるそこは地面の上だった。何時間気絶していたんだ？

数分間、いや数秒間だけかもしれない。

は！そうだ！魔理沙は?!

私は辺りを探す。

あ！いた！

私はすかさず飛びつき安否を確認した。

良かった何ともない。

終わったんだ………

「みんな！」

私はみんなの方を向く。

しかし彼女たちは私たちを見向きもしなかった。

彼女達の視線は立ち込める巨大な黒煙へと釘付けになっていた。

?!?!?

煙の中に何かがいる?!

煙から出てきたそれを見た私はとても驚いた。

中に居たのは紫の髪をした女だった。

彼女は私たちを見下ろしていた。

しかし、飛んでいた訳では無い。

立っているのだ。

立ったまま私たちを見下ろしていたのだ。

彼女は……

あまりにも

巨大だった。

「貴様ら………。魔の者に心売った裏切り者め……ここで私が天誅を下してやる!!」

彼女がそう言ったかと思うと巨大な緑色に光る剣を取り出した。

「死ねええ!!!」

避け無きや！

グツ！体が重い！神降ろしの影響か！

せめて魔理沙だけでも！

私は振り下ろされて来る剣に再び死の覚悟をした。

ガギンンンン！！！！

金属がぶつかる音と共に剣は止まった。

止めたのはシャーロットだった。

彼女がああのだ巨大な剣を自分の剣で受け止めたのだった。

「ここからは一騎打ちだよ！！！！おっきなお姉さん！！！！」

《side out》

## 51. 星怨異変⑧

〈はるか昔、とある草原にて〉

「ねえ、アトラスさん。あなたは魔王が憎いですか？」

金髪の青年が星の巨人に話しかける。

「ええ……憎い。」

それを聴き青年は笑う。

「やっぱり！そうじゃないかと思ってましたよ。」

「……あなたは違うの？」

巨人が聞き返す。

「……最初はね。いや……今でも憎いかもしれない。ただ……」

「ただ？」

彼は続けてこう言う。

「今の彼女はまともじゃない。」

「あれだけ殺戮をする奴はまともじゃないわ。」

「……そういう事じゃなくて……」

青年は困ったように頬をかく。

「……………ここだけの話彼女は操られている。」

「な?! 誰に?!」

「そこまでは分からない。だけどいるのは確かです。」

「そんな事が…………。」

青年は続けて言った。

「例えそうだとしても我々の目的はただ一つ彼女を殺す事だ。それが例え彼女が操られていようが。やることは変わらない。」

「…………そうね。」

「さて…そろそろ戻りましょう! バアルさんがまた怒りますね。」

青年はいつもの柔らかな表情へと戻っていた。

《side out》

《side 霊夢》

今、私の目にはとんでもないものが写っていた。

シャーロットがああ巨人の剣を受け止めているのだ。

「貴様!! それは!!」

「どうやら相手は何か知っているようだ。」

「……………ほんとズルみたいな能力だな。」

「そう言ったのは権だった。」

「どんな状況相手がどんな種族でも剣一本さえあれば同じ土俵で戦える。……………」

「抗う弱者とはよく言ったものだよ。」

「それがあの子の能力なの？」

「私は彼女に聞く。」

「ん？もう立てるのか？…ああ、そうだよ。そして英雄アーサー・ペンドラゴンの能力でもある。……………さてと。圧されてるな。」

「私はシャーロットに視線を向けた。」

「どうやら反撃に出れないらしい。」

「バアル。後は私がやるわ。」

「?!でも姉さん！」

「私にしか出来ないだろ？」

「そう言っただけ彼女は戦っているシャーロットの方へと飛んで行った。」

《《side out》》

《《side シャーロット》》

うう……………

負けそう！

「アーサーの子孫よ貴様まで邪魔をするのか？」

「そうだね！」

私は巨大な剣を受け止めながらそう返した。

腕が痛い。

確かに私の能力だと相手のパワーを大幅に減らすことが出来るけど…。

ゼロに出来るわけじゃない。

「貴様も魔王を許せと言うのか？」

……………決まってるじゃん。

「どうでもいいわ！そんな事！」

「なに?!」



「私は私の非日常の為に剣を振るう。その他の事はどうでもいい！」

「あんたも私の代わり映えのない日常をぶっ壊してよね!!!」

「貴様！俗物が!!!」

巨大な剣を降ってくる。

さあーっいー!

「……なるほどな。お前かなりイカれてるわ。」

ふとそんな声でしたかと思うと私は何者かに投げられた。

「白い狼人間？誰……あなたも魔神？」

「私はな……元魔王だ。」

――  
〈アトラスの真相意識内にて〉

「貴方が?!」

私は驚いていた。

「怖いか？」

「髭の生えたおっさんかと思った。」

「どんなイメージ?!」

まさか女の子だったなんて。でも……

「あまり強くなさそうだね。」

私の発言に魔王は首を傾げた。

「あれ？まあいいか、余計な戦闘は避けたいし。」

そんな事を彼女が言う。

「ところで何処なのココ？」

「ここはアトラスの心の中。何処かに彼女がいるはずだが……いたいた。ほら、あそこ。」

彼女の指さす先には大きな鳥かごがあった。

中には鎖で吊るされたアトラスがいた。

「……気分はどうだ？」

魔王が彼女に聞く。

「貴様の顔を見たせいで吐き気を催す程最悪だ。」

「そこまで?!……それもそうか……はあ……。」

?!魔王が残念そうにしよんぼりしてる?!

「だが……アーサーの言っていた事は間違いでは無いのか……」

「先祖さまの言っていたこと？」

「貴様！なぜ操られていた事を公表しなかった!!」

操られていた?!魔王が?!

私はすぐさま魔王の顔を見る。

「言ったら私のやってきた事は帳消しになるのか?」

「なんだと?」

「出来れば責任から逃れたいさ、でもな分かるか?逃れようとする度に私が殺してきた奴らの怯えきつた顔が頭をチラつくんだぜ。操られていようが殺したのは私だしな。夢に出てくるんだ。そいつらはいつも言うんだよ命を返せ、家族を返せってな。」

魔王の顔がどんどん恐怖に歪んでいく。

彼女もまた1人の女の子なんだ……

「だから私は言わないことにした。半端に罪から逃れようとするくらいなら覚悟して正面から罪を受け止めるってな。……結局これが私にとって1番楽だったんだよ。つくづく思うよ。私は自己中心なやつだったってな。」

「貴様も今の私のように意識がありなが強制的にやりたくもない行いをしていたのか?」

「結局私が最初に望んだことだよ。」

「……………そそのかされたんだろ?」

「……………全く同じやり口だな。」

何の話なんだろう。

「操る前にまず対象を悪の道に引きずり込む。まるで自身の行いを見せつけるような。必要だからこんな悪趣味なことをやっているのか？」

アトラスが聞く。

「いや。奴は楽しんでるだけだ。自身で誤った道を選ばせその道を進む過程をじっくりと本人に見せつけて絶望を味わせる。やられた本人は後戻りが出来ない上後悔しても強制的に体が動く。それが奴のやり口だ。」

「そうか……。いいか魔王！私は貴様を許せない！」

「それで結構！だがこれから私とお前は同士だ。共に奴を殺すためのな。」

ヒキヒキと檻にヒビが入る。

「この剣に誓おう。」

アトラスがそう言った瞬間檻が砕け散った。

「?!なに?!あれだけ硬かった檻が?!」

「単純だよ深層意識の中に入って語りかければ解ける。最も深層意識の中に入れるのは一度奴の能力に曝露された奴に限るがな。」

「そうなのか……。シャーロット。再び聞こうお前は何が為に剣を振るう。」

「だーかーらー！私の非日常の為だって。」

「なんだと?!」

「ちよつと待てよ。」

怒ろうとするアトラスを止めたのは魔王だった。

「彼女が何のために剣を振ろうが私らには関係ないだろ?」

「関係ないわけないだろ? だって彼女は……」

「アーサーの子孫だからか? だからアーサーのように自身の身を削ってまで知らない奴を守り抜かなきゃいけないのか? なあアトラス。大戦は私らの代に私が始めた戦争だ。アーサーもお前も他の英雄も十分に働いた。悪の権化である私を倒したじゃないか。もう解放してやれよ。アーサーも彼女もそしてお前自身も。」

「……………だが…。嬉々として他人に斬り掛かるのは如何なものか……。」

ギクツ……………

「それは……………言えてるな。」

「そ、そんな事……………してないよ。」

「嘘をつけ、操られていても遠目から見えていたぞ。お前がバアルに斬り掛かる所を。」

そ、それは……………

ウグ?!

突然頭に衝撃を受けた。

「何するの?!」

魔王が拳骨を振り下ろしたのだ。

「私の妹を傷つけたぶん。」

うー痛い。

「分かりましたー。もうしませんー。」

「戻ったらバアルに謝れよ。いいな?」

そう彼女が行ったかと思うとあたり一面が白い光で眩しくなった。

《side out》

## 52. 星怨異変⑨

〈宴会の席にて〉

《side 霊夢》

異変も解決し私達も宴会を開くことが出来た。

宴会には魔理沙や文、椛、妖精達や紅魔組が来ていた。

他にも萃香や関係のないリグルやミスティアまで来てるけど…

「なあ……霊夢。」

魔理沙が近づいて来た。

「なに？」

「迷惑かけてすまなかった！」

珍しく謝ってきた。

「別にあんたが悪いわけじゃないし……所で何か後遺症とかない？」

「え？……いや別に特には……あー！」

何かを思いついたように彼女は言った。

「なんか新しい魔法が使えるようになったぜ！アトラスに乗っ取られた時に彼女の星の

魔術の知識が流れ込んで来たんだよ！これでお前にも迷惑かけずに済むな！」

「……………次は私があなたに追いつかないと行けない番ね。」

「え？なんて？」

「何も。魔理沙が無事ならそれでいいわ。」

私はそう言つて……………

「え?!そんなに私の事を心配してくれるのか?!ありがとう!!!」

しまった!

魔理沙が抱き着いて来ようとしている。

「ちよつとちよつと!!霊夢姉さんは私のなんだから!」

後ろからシャーロットが抱き着いて来る。

「ちよ?!あんたら暑苦しい!!」

私が2人を引き剥がそうとすると…………

「霊夢さん!」

バアルが私に話しかけてきた。

「そうだ!あなたにも聞きたいことがあった!」

あの神のことだ。

「彼女のことでしょう?名前はツールと言います。私と同じ雷を使います。」



「そう、どういう関係だったの？」

私は聞く。

「向こうはどう思ってるか知りませんが私は友人だと思ってます。」

へえ……

「また会えるかしら？」

「…私も何処にいるか知りませんから……。」

所で……

「こいつら引き剥がすの手伝って！」

「えー！仕方ないですね…そらよつと！」

バチバチと音がなったかと思うと。

「うわあー!!」

2人ともパタリと倒れてしまった。

「し、痺れる。」

「体が動かない……」

「……ありがとう。」

「どういたしまして。」

ささてと……

「話を聞きに行くわよ。」

《side out》

《side 椀》

やばい、帰るに帰れなくなっちゃった。

…そんなことより。

「山城様、お体は大丈夫ですか？」

「ふん！別になんともありません！」

「……どうやったんですか先輩？」

私は天星先輩に聞く。

「椀、エルマ殿はやっぱり天才だ！」

ああ、なるほど。

「所で……文様？少し離れてくれませんか？」

私はさつきから私を抱き抱えている文さんに言った。

「やだ。」

子供か！

「ヴァナルガンドさん？」

八雲紫が私の前に座った。

「……犬走権がいいですよ。」

「そう……もうそろそろいい加減に話してくれないかしら？」

「……」まで被害が出たんだ。隠す訳にはいかない。

「大方の話はわかってますか？」

「ええ、あなたが操られていた事も操った本人があなたを付け狙っていることもね。」

「そういうことです。」

「ねえ……まだ何かを隠してない？」

「いいえ……別に。」

私と紫が静かに見つめ合う。

あまりの緊張感と威圧感に音が震えている。

「はあ……やめだやめだ。わかりました。」

「ふふ、ありがとう。さあ！言ってご覧なさい。」

「操られてた部下によるとあの女神の標的が私と幻想郷になりました。」

「え?!なんで?!」

私の言葉に紫は取り乱していた。

「さあ?分らないし分かりたくもないです。ただ私の部下に話しかけてたらしいです。ついでにアトラスにも。」

「…………どうしよう。」

「……………本当にごめんなさい…私のせいで。」

やはり私は不幸しか生み出せないのか……

「まあまあ！可哀想に。」

そんな声が私の右からした。

そこにはフードを被った少女が正座をして私たちの話を聞いていた。

「?!?!」

「何者だ？」

……………変だ。ここにいる私らしか気づいて居ないようだ。

「そんなに慌てないでください。今日は私も宴会に参加しに来たんですよ。」

そう言い彼女はお酒をついだ。

「んー！美味しいー！」

「何が目的だ！」

「私の目的はあなたの観察ですよー」

「貴様……やはりあいつの手下か？」

私がそう言うのと彼女は立ち上がった。

先輩が術式を展開する。

「ちよつとちよつと！ダメですよ宴会の席で乱暴しちゃ。」

「貴方をまじかで見ることが出来たし私は満足です。」

「おかしい、こんな堂々と私の前に現れるなんて……」

「あ！ちなみに私に観察をお願いしたのはネロ様です。それじゃあ！愛してますよ！  
ヴァナルガンド。」

「そう言いどこかへ去ってしまつた。」

「ネロ……例の女神の事かしら？ねえどうなの椀？」

「……………」

「……………ちよつとまで！」

「私は彼女を追いかけようとしたがもうどこにもいなかった。」

「やっぱり例の女神なのね?!」

「違う。」

「なら誰なんだ？」

「天星先輩が聞く。」

「二つ名は女帝……私の……育ての母親です。」

「え?!あれは椀のお母さんの使者だったんですか?!」

「文様が驚いた様子で私に聞く。」

「そうみたいなんですけど……さっきの彼女は何者か分かりません。魔力を全く感じませんでしたし。」

ん？ 魔力を全く感じなかった？

「おーい。」

リグルが私たちに声をかけてくる。

「?!彼女が例の？」

「ええ、そうです。」

紫が私に小声で聞いた。

「どうしたんだ？」

「いやーなんか懐かしい奴が来てたみたいなんだよ。」

ええ？

「ええっと、確かアンタらが……そうだ！ E n i g m a 幻想神祕 だったな！ そう呼んでたと思うよ！」

………

「八雲様」

「な、なに？」

「さっきの人、見つけても絶つたに刺激しないでください。万が一怒らせでもした

ら。この幻想郷は終わります。」

幻想郷どころか世界が終わる。

「もしかして、彼女も五大厄災?!」

だがまだ疑問が残る。

「なんでうちの母親の言いなりになってるんだ?」

「あれ?あなた知らないの?」

「何が?」

「彼女はあなたの実のお母さんだよ?」

《side out》

## 七章 銀色の狼の旧地獄巡り

### 5.3. 銀色の狼の旧地獄巡り①

〈深夜　とある大天狗の屋敷にて〉

「黒羽、只今参上しました。」

とある烏天狗が膝をつく。

「よく来た黒羽。貴様に任務を言い渡す。」

大天狗である飛車上　雷が黒羽に言う。

彼女は大天狗の中でも特に天魔に信頼されていた。

「なんなりとお申し付け下さい。」

「この女を監視しろ。」

そう言い雷は写真を差し出した。

「これは白狼天狗？何故こやつを？」

「お前は近頃、銀色の狼なるものを聞いてはおらぬか？」

雷はそう言う。

「はい。風の噂には……まさか?!」



「決まった訳では無い。しかし可能性が高い。こやつは博麗の巫女の一撃、それも神に撃つべきであった一撃を無傷で受け止めた。」

「そんなことが……」

「こやつは明日1日有給を取る。私からの任務は一つ。こやつを監視しろ。そして……」

妖怪の山に仇なすとみなせば殺せ。

〈雷と黒羽が話し合う1日前、妖怪の山麓にて〉

《side 権》

「……………」

私は木の枝に腰掛けぼーっと明後日の方向を眺めた。

私の実の母。それも五大厄災。

……彼女はどう言う心境で私を産んだのだろう。

そもそも私の育ての親は知っていて黙っていたのか？

「犬走権!!」

「はい?!」

びっくりした。

突然、音が話し掛けて来た。

「あなた……何をぼーっとしてるのですか？」

「いえ!すみません!」

「もしかしてあのことですか？」

っーやはりあの場にいた音は知っている。

「……………1日ばかり休息をとることをおすすめます。正直邪魔ですので。」

お?!なんだなんだ?!音が私を気遣ってくるなんて明日は嵐か?!

「いえ!そういう訳には行きません!」

「……………そうですか。勝手にしてください。」

そう言い音はパトロールへと戻って行った。

「休みたいのはやまやま何だけどな……………」

「もーみじ!」

今度は文様が来た。

「どうされたのですか？」

「聞いてましたよ！ 権、色々あつて疲れてるみたいですね！ 私も休息を取るべきだと思いますー！」

「ですが私には哨戒任務が……」

一人抜けると音が可哀想だ。

「仕方ない……」

……あれ？ 前にもこんなことがあつたような……。

「犬走権！ 大天狗として命じます！ 休暇を取りなさい！」

……ああ、そうだったな……。

「叛逆しても宜しいですか？」

「ただただだだめですよ?!?!」

……仕方ない。

「……旧地獄なんかどうですか？ 温泉もありますし！」

温泉旅行か……悪くないな……。

……でも。

「私の穴は誰が埋めるんですか？」

私が聞くと彼女は自信満々にこう返してきた。

「天星さんに言ったら変わるって言ってました。」

まじですか……あんたもそつて側ですか天星先輩。

「………わかりました。明後日は休みを取ります。」

「それは良かったです！所で権……」

「なんですか？」

「私か天星さんの直属の部下になりませんか？」

うーん……それもいいかもしれない。むしろ私にとっては得策だろう。妖怪の山の中でも名の通る文様だ。

何かあったとしてももみ消してくれるだろう。

しかしあの女神がなにかしてきたら危険が及ぶかもしれない。

「………まだ検討中です。」

「そうですか。……まあそれは温泉にでもつかってゆつくりと考えてください。」

………そうしようか。

「所で文様？」

「はい！何でしょうか？」

「何か気になる勢力はありませんか？例えばシロギーだったり、タル……鈴仙だった

り。」

タルタロスは流石に異変を起こすことは無いだろうけど……

「どうしてそんなことを？」

「何かあつたら私が止めに行くので……」

「……今のところは何もありませんが……。新しい勢力に隠れて来るかもしれません。」

特になしか……

それとこれも一応話しておこう。

「天使達にも十分注意してください。頭のネジが外れた奴らみたいなのがいるので。」

例えば天使の癖にとある魔神を崇拜している奴だったり……

快樂殺人をするやばい奴だったり……

「友人を人間に殺されて人間に対して激しい憎悪を抱いているものもいます。」

「ま、待つてください！ いいネタになりそうです！」

そう言い彼女はメモ帳を出した。

「あとは「ちよつと!!!」

なんだ……げっ?!

視線を向けるとそこには音が仁王立ちしていた。

「すみません！文様！見回りに行ってきますす！」

「ちよっ?! 待ってください!!! 話の続きを聞かせてください!」

私はそそくさと逃げるように見回りに行った。

《side out》

〈次の日、博麗神社にて〉

「どうなってる?!」

神社の近くで温泉が噴き出していた。

## 54. 銀色の狼の旧地獄巡り②

〈妖怪の山、椀宅にて〉

《side 椀》

「荷物はぎつとこんなところか。」

私は地底に行くために様々な準備をしていた。

「どこかへ行かれるんですかい？」

ファフニールがソファアードでくつろぎながら聞いてくる。

「ああ。ちよつと地底で温泉旅行を。お前も来るか？」

こいつもあまり幻想郷には詳しくないだろうし見学がてらだろう。

「いや、私はいいや。」

「そうか。残念だ。お土産は期待しろよ。」

「楽しみ。」

そろそろ行くか。

私は扉を開け外へ出た。

「あつ！椀！」

外にはにとりが何かを持って立っていた。ちょうどいいタイミングで外へ出たらしい。

「どしたの？」

「椀が旅行へ行くつて聞いてさ。新しいカメラの試作機を使って風景を撮つて欲しいんだ！」

にとりが手に持っていたのはどうやらカメラだったようだ。

「うん。いいよ。使い方は？」

「上にあるボタンを押せば写真が撮れる。カメラの後ろに画面があるけど撮りたい所を拡大したり縮小したりできるよ。」

す、すげえ……。

S. A. Mに見せたらどんな反応するんだろう。

あいつとにとり、もし知り合えばいいコンビになりそうだな。

「所で温泉つてどこ行くの？」

あれ？言つてなかったっけ？

「地底だよ。」

「え!?!」

ん？どうした？



「地底には鬼たちが住んでるけど大丈夫?!」

え? マジで?

「隠れながら行ったら絡まれないはずだよ。」

自分でそうは言ったが見つかったら面倒なことになりそう……

「くれぐれも気をつけてね! 権。」

「うん。分かった。」

戦闘は避けなくては……

《side out》

《side 黒羽》

ふむ……地底か。

どうやら犬走権は地底へ行くようだ。

好都合だ。万が一戦闘になれば奴は自ら正体を晒すかもしれない。

あの作戦で行こう。

《side out》

〈博麗神社にて〉

《Side 霊夢》

「おーい！ 霊夢!! 温泉が吹き出しているって本当か?! うわ?! すげえことになってるな  
！」

吹き出している温泉について調べていると魔理沙が飛んできた。

後ろにはアリスがいる。

「ちようど今、発生源が分かったところよ。」

いいタイミングで魔理沙が来たと言える。

「場所は地底よ。」

「それって旧地獄か?! 私も一度行ってみたいと思ってたんだ!!」

ん? アリスが辺りを見回している。

「どうしたの?」

「いえ…今回は銀色の狼来てないんだ……。まあ居なければ居ないで良いけど。」

「さすがに今回は来ないでしょ。」

魔理沙がアリスに言う。

そう毎回毎回こられちゃあ困る。

「旧地獄?! 私も行く!! 久しぶりに勇儀に会いたい!!」

そう言ったのは萃香だった。

「別にいいけど。ちゃんと手伝ってよね。」

「あいよー!」

そんな会話をしていると、聞き覚えのある声が聞こえた。

「おーい! 霊夢さん!」

文だ。

「あら。来たの。」

「それはもうもちろん! あ!! 萃香様! ご無沙汰してます!」

「おう! 久しぶり!」

こいつも着いてくるのか……。

「所で原因は分かりました?」

「原因はともかく場所は分かったわ。旧地獄よ。」

私は文にそう言おうと……。

「え?! き、旧地獄ですか?!」

ん? 文の驚き方が少しおかしい……。

「何か知っているの?」

違和感を持ったのはアリスも同じだったようだ。

「そ、その……。」

もしかして異変の元凶を知っているとか?!

「じ、実は梶が旧地獄へ向かっています……。」

……………。

恐らくその場にいた萃香以外が頭を抱えたと思う。

「なんで?!」

今度はどんな化け物だ?!

「言いづらいのですが……彼女は異変の存在すら知りません。私が休暇に旧地獄をとおすすめしたのが原因です。」

なんだ良かった。

って良くない!

「シャーロット!!!起きてる?!?!」

「はいはい!!」

神社の奥からシャーロットが出てきた。

「あなたも行く?」

私は彼女に聞くと……

「?!行く行く!!」

よし！食いついた！彼女が居ればなんとか魔神に対する対策は取れる。最悪の可能性だが鬼に絡まれて大規模な殴り合いをするかもしれない。

その時の仲裁役に彼女が必要だ。

それに……。

「勇儀にあいつのことを早く言いたいな!!それに旧地獄に行くなら好都合だ！宴会で彼女を招待しよう!!」

やっぱり！大江山の四天王、星熊勇儀に知られたら……。

話によると彼女はかなりの戦闘狂らしい……。

萃香は話す気満々らしい。ていうか萃香も四天王だったけど……。椛と話してる所は見たことがない。本人はお近づきになりたいようだけど。

コレは……椛が避けてるな……。

「ぐぐぐ……。不安要素が山のようにあるけど……まずは異変を解決してから!!」

不幸中の幸いだけど、椛は地底に住む鬼よりも話が通じる上に不必要な戦闘を避けるタイプだ。

なにも起こらないことを祈ろう。

それに彼女は味方だ。前向きに考えよう。

《side out》

〈旧地獄の入口にて〉

《side 椀》

ここか……。

私は写真を撮りながら真っ暗な大穴を眺めた。

全然下が見えない。

どんな温泉が有るんだろう。

楽しみだ。

そして私は穴に飛び込んだ。

《side out》

《side 黒羽》

行っただか。

待っている。必ず貴様の正体を暴いて見せる。

《side out》

## 55. 銀色の狼の旧地獄巡り③

《side 黒羽》

……行っただか。

俺は犬走棍が飛び込んだ巨大な穴を覗き込んだ。

俺もこれから入るが……どうやって地底の住人を焚き付けようか。

《side out》

〈旧地獄の入り口、縦穴内にて〉

《side 棍》

……すげえ深いな。

空を見上げたがもう太陽の光が見えなくなっていた。

やはり旧地獄という名は伊達では無いな。

………ん？

下の方に白い何かが見える。

底に着いたのか？

千里眼でよく見てみると……………

あれは……………糸か？

それは地面ではなく縦穴の途中に張り巡らされていた蜘蛛の意図だったようだ。

「よつと。」

いざ着地してみると、あまり粘つく感じはない。

弾力のある丈夫な糸だな。

「おやおや？珍しいお客さんだねえ。」

……………下の方に感じていた強い霊力はこいつか。

「妖怪の山の天狗かい？何しにこんな辛気臭い所へ？」

辛気臭いって……………住人であるあんたが言い出したらおしまいだろうが……………

私は呆れながらも彼女のことをよく見る。

金髪で髪型はお団子、それに茶色いリボン、あとは茶色いスカートを履いている。

身長は私よりほんの僅かに低いくらいかな？

「はじめまして。犬走権と申します。あなたは？」

私がそう聞くと彼女はニカッと笑いこう応えた。

「私は黒谷ヤマメ。か弱い一匹の蜘蛛だよ。」



……か弱いねえ。

霊力で見ると……普通の並の天狗じゃあ太刀打ちできないレベルだな。

「今日は本当に珍しい日だよ。まさか天狗、それも白狼天狗が来るなんてね！お前さん、何しにこんな場所へ？」

「観光です。」

私の答えに彼女は一瞬唖然とした顔をしたかと思うと、大爆笑した。

「ハハハハハハ!!!ヒーお腹痛い!!!まさかの観光だつて?!?!」

すつごく陽気な人だなあ。

「あーおかしかった。旧地獄は辛気臭い場所だが、地底にあるからいい温泉が出てるよ。他は……地霊殿って言う大きな屋敷があるよ。」

彼女は涙を指で拭き取りながら親切にも教えてくれた。

いい人だな。

「おーい！キスメ！いるか？面白い奴がいるぜ！」  
彼女が上に向かってそう叫ぶと……

「んー？」

少し上にある洞窟から桶が飛び出してきた。

中に妖怪が入っているらしい。

「こいつはキスめって言うんだ！」

「…… よろしく。天狗さん。」

「はじめまして……」

桶の中から白装束をきた少女がこちらを覗きこんだ。

「なあキスめ！こいつは犬走権って言うんだ！今日は観光に来たらしいぜ！」

「へえ……じゃあ下にある名前のない橋に行ってみてよ。面白い奴がいるよ。」

そう彼女が私に紹介してくれたが……

「面白い奴……？」

私は詳しく聞こうとしたが……

「それは言ってるからのお楽しみ。」

このキスめって子、内気そうに見えて案外そうでも無いらしい。

「じゃあ、私はそろそろ行きますね。また会いましょう。」

私はそう言って飛び降りた。

《 side out 》

《 side ヤマメ 》

「さてと…… アンタの方も観光…… って訳じゃなさそうだね。さっきの権って奴

の監視かい？」

私は背後に隠れているもう一人の天狗に話しかけた。

「貴様には関係ない事だ。」

そう言ったかと思うと彼は杖の後を追った。

「なあ、キスメ。」

「なに？」

「妖怪の山も一枚岩じゃ無さそうだね。」

「……………」

キスメはなにか考え事をしている風な顔だった。

「どしたの？」

「あの杖って子………… 白狼天狗だよね？」

「ん？まあね。それがどうしたの？」

「確か白狼天狗って妖怪の山でも地位が低くて、さっきの男みたいな烏天狗の方が地位が高いんだよね？」

確かにそうだ………… あれ？

「じゃあ、烏天狗がわざわざ白狼天狗一人の為に尾行しているのかい？」

それは不自然だねえ。

そんな事を考えていると……

「おい！ 霊夢！ 底が見えたぜ！」

「……………何か違和感を感じない？ あの地面に……………」

おや？

今日は本当に珍しい客が多い日だねえ。

「妖怪?!」

今度は博麗の巫女と来たか！

他には人間が2人と魔女が1人、烏天狗と鬼もいるじゃないか!!

「おやおや、今度は団体様かい？」

私が話しかけると……………

「あなた達が異変の犯人？」

ん？ 異変？

「なにかあったのかい？」

「地上に温泉が吹き出してるの。何か知らない？」

魔女が説明してくれた。

「ん……………。心当たりないなあ。キスメはどうだい？」

「……………私もないけど……………。地霊殿に言ってみたら？」

「地霊殿？」

「おつきな屋敷で、旧地獄を管理している悟妖怪が住んでるんだ。」

少し気難しいやつだけだな。

「情報感謝するわ。ところで聞きたいことがあるんだけど……。」

「何だい？」

「白狼天狗がここを通らなかつた？」

ちようどその話をしたところさ。

「つい少し前にここを通って行ったよ。何か烏天狗につけられてたけど。」

「ええええ?!」

おや? 烏天狗が何か驚いているみたいだ。

「一体誰が…… いえ…… 誰の命令で？」

そう彼女は訳の分からないことをブツブツ言い出した。

「…… そろそろ私達は行くね。」

そう言つて彼女達は飛び込んで行った。

「なあ、キスメ。」

「何?」

「今度は誰が来ると思う?」

「……誰が来ようともう驚かないと思う。」  
「だよね。」

《 s i d e o u t 》

## 56. 銀色の狼の旧地獄巡り④

〈地底にて〉

《side 椀》

ようやく底に着いたようだ。

底に着いたが目の前には、また洞窟があった。

「随分嚴重だな……。」

私はそう思いながら洞窟を抜けて行った。

ん？前方からぼんやりとした光が見える。

どうやら洞窟の出口らしい。

洞窟を抜けると底には………

地下だとは思えないほど幻想的な光景が広がっていた。

大小様々な古風の建物。

妖怪かはたまた幽霊か宙を飛び交う無数の、そして様々な色をした光の玉。

何より街を照らす赤、紫、黄色の光を放つ提灯。

「凄いな……。」

にとりからもらった写真機のボタンを押す。

私は何処か懐かしさを感じていた。

と言うのも我々魔神達が住む世界でも太陽の光が無いためどんな時でも国中を明るく灯していた。

「最悪妖怪の山を追い出されたらここに住もうかな？」

ふと私は視線をそらすとその先には町と洞窟のある場所を繋ぐ橋があった。

キスメが言っていた橋ってあれの事か。

私は橋の近くまで来ていた。

変だ。住民が全く橋を通ろうとしない。それどころか見向きもしていない。

疑問に思いながらも橋を渡ろうとする。

すると

「おっと……。」

さつきまで短かったはずの橋が急に長くなった。

「あなた、誰？」



恐らくこれをやったであろう少女が話してきた。

「えつと……犬走権と言います。本日は観光に来ました。」

私はあるのままを言った。

まあ、さすがに魔神であることは伏せるけど……

「……白狼天狗？」

どう答えようか……

正直に言おう。

「はい、そうです。」

すると突然妖力が吹き荒れた。

「妬ましい!!!」

「え?!」

「あなたの度胸が、そしてその脳天気さが妬ましい!!!」

ん? さりげなく馬鹿にされてないか?

「あの、ちなみにお名前を聞いてもいいですか?」

私は彼女の名前を聞く。

「……今の妖力に動じないのね……妬ましい……私は水橋パルスィ。橋姫よ。」

そう言いながらも、私を恨めしそう睨む彼女。

烏天狗4……いや6人分くらいの実力者だろう。

「あなた……鬼が怖くないの?」

「怖くは有りませんが、出来れば会いたくないです。」

「……そう、やつぱりその度胸が妬ましい。……じゃああの道を通りなさい。どうせ、温泉につかりに来たんでしょ?あの道を行くと鬼に会わずに済むから使うといいわ。」

……地底つて親切な人ばかりだな。

「ありがとうございます。」

「……早く行きなさい。あなたが妬ましすぎておかしくなりそうよ。」

私は彼女の言葉通りに道を進んで行つた。

「……鬼は出ないけど……ほかの妖怪はどうかしらね。あなたも気をつけなさいよ。……二人揃つて妬ましいわね。」

「……………」

《side out》

《side 霊夢》

やーつと着いた。

「……が地底か?」

長い縦穴を抜け、さらに洞窟を抜けると輝かしい街並み広がっていた。

「何処から街に入れば……あそこかしら?」

アリスが小さな橋を指さす。

なんだかとてもない妖力を橋から感じる。

気を引き締めなきや。

「なんだかボロボロの橋だね。」

シャーロットの言う通り、あまり綺麗な橋ではないわね。

私たちが橋の真ん中まで行くと……

なんと向こう岸が遠く離れたでは無いか?!

「なんですかこれ?!」

「あんた達も地上から来たのかしら?……妬ましいわね。」

……橋姫か。

「邪魔しないで。今急用があるの。邪魔するなら退治するわよ!」

私達は戦闘態勢を取る。

「その失礼な態度が取れる凶太い神経が妬ましいわね。」

……ムカつく奴ね。

「あんた……さっきあなた達もって言ってたけど………なんか知ってるの？」

「教えて欲しい？ 教えてあげようと思ったけどやっぱりやめた。知りたいなら力づくで聞き出せば？」

上等よ!!!

私達は一斉に弾幕を放った。

《side out》

## 57・銀色の狼の旧地獄巡り⑤

・ s i d e 楯 ・

私はパルスィの言った通りの道を辿っていた。

本当に鬼が出てこない。

私が安心していったその時…

「なんだあ？てめえは？おい！相棒！こんな所に白狼天狗がいるぜ！！」

「まじかよ?!おもしれえ！」

うーわ……。

明らかに柄の悪そうな妖怪に出くわしてしまった。

そいつらはよく似た見た目だが、片方は腕が長く片方は脚が長かった。

そして何故か脚の長い方が腕の長いやつを肩車している。

……話には聞いたことがある。

手長足長だな…

いや！人を見た目で判断してはいけない！

今のところ地底の住人は親切な人ばかりだ。

もしかしたら彼らも「おい！こいつを路地裏に連れ込もうぜ！」  
ダメでした……。

「あのく、見逃して貰えないでしょうか？」

私が話しかけると……

「黙れ！白狼天狗ごときが俺たちに指図するな！」

ええ?!絡んで来といてそれかよ?!

仕方ない……。

偽罪「銀幻狼」<sup>プーカ</sup>

私はプーカを5匹ほど召喚した。

「な、なんだそいつらは?!」

そんな事を言ってたがお構い無しだ!

私は2人へと突っ込んだ。

私だけではない。召喚したプーカも私と共に2人へと向かった。

「な、なんなんだお前?!」

敵まで後3mのところでは足を止めた。

しかし、プーカ達は止まらない。

2人へ噛み付こうとした時、突然プーカ達が弾け当たりは霧に包まれた。

まあ、やったのは私なんだけどね。

「くそ！前が見えねえ！」

うん、目くらましとしてよく使える。

さあ、今のうちに隠れよう。

side out

side 朧

俺は引き続き犬走椀を追跡していた。

すると突然やつの目の前に手長足長が現れた。

どうやら奴を襲うようだ。

俺が手を加えずとも奴の戦闘が見られるかもしれない。

すると、突然犬走椀の近くから謎の狼達が出現した。

なんだ?! 奴の登録している能力は千里眼のみだったはず。

まだ魔神と確定した訳ではないが……。

何か隠していることは確かだ。

しかし、あの程度がやつの全力ならば俺なら直ぐに始末できる。

それに、能力の秘匿は妖怪の山では大罪だ。

殺されても文句は言えない。

?! どうやら奴が動いたようだ!

狼達を引き連れ真つ直ぐ手長足長へ走って行った。

そして手長足長の直前で止まったかと思うと、狼達が炸裂し当たりは白煙で包まれた。

しまった?! 俺としたことが!! 目くらましか?!

俺は辛うじて奴を追うことができた。

まだだ、まだ奴は全力を出していない。

引き続き監視の必要がある。

▪ side out ▪

▪ side 霊夢 ▪

な、なかなか手強かったわ……。

私達はようやくバルスイを倒すことが出来た。

当の本人は……

「きゅー……。」



橋にもたれかかりながら伸びていた。

「ちよつと！起きなさい！」

私は。パルスィを揺さぶってみたが反応が無い。

どうしたものかと悩んでいると……

奥に見える大きな屋敷から旧地獄には有り得ない筈の気配を感じた。

「どうしたの霊夢？魔理沙まで……」

アリスと文、萃香は気づいていないらしい。

「何故かは分からないけど……あの屋敷から神の気配がする。」

「それってまさか?!」

「いや……神としては産まれたばかりらしい。もとは妖怪だったのか妖力を感じる。」

私の代わりに答えたのは魔理沙だった。

「でも産まれたてでも神よ。一筋縄では行かないわ。気を引き締めて行こう。」

でもなんで急にその神とやらは妖力を上げたのだろう？

▪ side out ▪

▪ side 権 ▪

手長足長から逃げた私は遠くにある屋敷を眺めていた。

屋敷から神の気配がする……

そしてもう一つ懐かしい気配がする。

……使徒だ。

アイツだな……

だとするとここからアイツの姿が見えないのは、おかしい。

直接行って確かめないとな。

▪ side out ▪

## 58・銀色の狼の旧地獄巡り⑥

＜旧地獄市街地にて＞

・side 霊夢・

私達は。パルスィを倒した後、地霊殿へと向かっていたが……

おえっ!!酒くさっ?!!

道を歩いているだけでも漂ってくる酒の匂い。

「おおっ!!これこれ!!地底っていうのはこうでなくちゃ!!」

萃香が嬉しそうに言う。

私や魔理沙はともかくシャーロットがやばい。

さつきから顔が真っ青だ。

そんな時、前から集団がこちらに向かってきた。

「おっこりやあ珍しい客人じゃないか……」

その集団には皆、共通点があった。  
全員頭の何処かに角が生えている。

地底で最も出会いたくない集団だ。

そしてその鬼たちの先頭にいるのが……

「博麗の巫女、それに天狗……萃香もいるのか?!」

身長が私の倍は有る一本角の女。

「まあ、とりあえず……」

大江山の四天王

「ツラ貸せや。」

星熊勇儀。

▪ side out ▪

▪ side 椀 ▪

………ここか。

私は目の前にある「湯」と書かれた建物に来ていた。

誰もいないようだ。

中に入ってみると、外見に反してとても広かった。

「店の従業員はいないのか？」

「……三文になります。」

?!?!?

私は思わず飛び退いた。

建物の入口、すぐ左に老婆が座っていたのだ。

「ああ……はい。これを……。」

私は老婆の言われた通りに三文渡した。

そして気づいた。

この老婆……角がある。

鬼だ。

「私みたいな白狼天狗が来ても驚かないんですね……。」

私が聞くと、

「……誰だろうと客は客さね。……それに、」

「それに？」

「それは本当の白狼天狗が言うべきさね……。」

な?!この老婆……。

まあいいか、変に詮索はしない方がいいか。

私もされたら嬉しくないしな。

「何かおすすめの湯はありますか?」

私が聞くと……

「それは客であるお前が決めることさね。私に聞くんじゃないよ。」

ピシヤリと叱られてしまった。

それもそうだな。

「それじゃあ、楽しんできます。」

「……………」

彼女はそんな私の言葉を見殺して再び本を読み始めた。

・ s i d e o u t ・

-----

「で? お前は客か?」

「いえ、俺は奴を監視するために伺いました。」

「……客じゃないなら出ていけ。」

彼はそんな言葉を無視して温泉に繋がる扉を開けようとした。

ガシッ!!!

(曲がりなりにも鬼か……なんて力だ！だがこんな老婆の鬼俺一人で……)  
彼が振り返ったそこには老婆ではなく若く美しい鬼が彼の肩を掴み、屈みながら彼の顔をジツと見つめていた。

男にはその鬼の目を見ても心の内は分からなかった。

ただ琥珀色の鬼の目の中にどんな獣よりも、いや、まるで獣の長の様な獰猛な本能が垣間見えた。

まるで男に警告をするかのように……

(まずい！)

本能的に危機を感じたのか彼は音速を超える速さでその場を去った。

女は天狗の男が居なくなるのを見ると床に落ちている本を拾い、先程老婆がいた座布団に座り込んだ。

辺りには静けさが戻り、老婆が放つ本をめくる音以外は聞こえなくなった。  
この事の中にはいる魔王が気づかないほど刹那の出来事であった。

・ side 権 ・

………いい湯だ。ホッとする。

落ち着いた私の頭にいくつももの思考が巡る。

一つ一つ解決していこう。

まずは、文様や天星先輩の部下になるけんだが……………

もうなつてしまおう。少し目立つ上に文様に危険が呼びやすいかもしれないが

……

いや、私が文様の近くで彼女を護ろう。

あの女神のことだ。私の交友関係全てを調べ上げ最も容易な人から人質にするかもしれない。

そうなる前に彼女の側につこう。

……………また色んな奴に反感を買うかもな……

まあ仕方ないと言ったらそれまでだが……………

「私の正体を知って匿ってくれるやつなんか居ないよなあ……………」

この時一瞬、私の脳裏に家族の顔が過ぎった。

「つ?!ダメに決まってるんだろ……………」

私はそう自分に言い聞かせ湯船に顔を半分沈めた。

少し落ち着いた私は別の事を考えた。

「地底に来た時感じた配下の気配。」



そして残る違和感。

「……こればかりは会ってみないと分からないな……。」

そう呟きながら私は湯船をでた。

「お？体が軽い……。」

▪ side out ▪

▪ side 霊夢 ▪

「おい、お前も呑めよ！」

私は呆れた目で萃香と勇儀を見ていた。

「呑まないわよ!!」

「じゃあ天狗お前が呑めよ！」

「ええ?!私はその……。」

勇儀が文お酒を渡す。

「あん？文句あんならはつきり言え！」

「頂戴だしますう!!」

流石の文も天狗の性なのかビビリまくっている。

「私達は、異変を解決しなきゃいけないの!!私の家が温泉で水浸しなの!貴方も家がび

「しよびしよなら困るでしょ?!」

「私は酒がありや家が吹き飛ばうとも関係ないね!」

全く話になんない!!

まだ魔神達と話している方が数百倍楽だわ!!

「そーだ! 勇儀! 面白い土産話があるんだ!」

「ん? なんだ?」

そー萃香が勇儀に言う。

ま、まずい!!

「ちよ、萃香! ぐえっ!!」

「霊夢姉さん!!」

酔っ払ったシャーロットに潰されてしまった。

力強!!

「ちよ、」

「地上に魔神って言う超強い種族が出てきたぜ!」

魔理沙やアリスが止める甲斐もなくとうとう彼女に知られてしまった。

「ほお……! 詳しく教えてくれ!」

「こ、これ以上は……」

「中でも銀色の狼つてのが兎に角やばいらしい。」

あ……終わった。

「へえ！お前らは知ってんのか？」

勇儀は私達に聞いてくる。

「知ってても教える訳には行かないわよ！」

私や魔理沙、アリスは同意見だった。

ただ文は天狗だ。逆らえない可能性がある。

「天狗は？」

「教えませんよ。」

え？

「なんで？」

周りが突然静かになり、嫌な空気が漂う。

「彼女はあまり人と関わりたがらないので。それに友人を裏切る真似はしません。」

いつもヘラヘラしている文から考えられないほど真っ直ぐな目だった。少し恐怖心を感じるほど鋭かった。

「天狗の分際で……鬼に逆らうか!？」

側にいた鬼が文に襲いかかろうとする。

私は咄嗟に文を庇おうとするが……

その鬼は吹き飛ばされてしまった。

吹き飛ばしたのはなんと……

「小せえ事すんじやねえよ！」

勇儀だったのだ。

「天狗……いい目だ！友を護るその心意気は気に入った！」

「それは何よりです！」

あ、空気が戻った。

「まあ友を裏切る腑抜けならここでお前をぶっ飛ばしてたがな！ハッハッハ！！」

それを聞いて文は少し青ざめているようだった。

可哀想に。

「私達はそろそろ行かなくちゃならないわ。」

「そうか……帰りにまた来いよ！」

「……シャーロットと文を少し預けてもいい？」

「あややややや?!?!」

「シャーロットの世話よ。」

「そ、そんなあ！」

「なんだ？天狗？嫌なんか？」

「いえ！滅相もない！」

「そんなじゃ私も残るわ！」

そう切り出したのは萃香だった。

何しに来たんだこいつは………

「じゃあ、また来るわ！」

宴会は直接ここで開こう。掃除しなくて済むしね。

▪ side out ▪

「いい事を聞いたぞ。これで奴にけしかけてやろう」

鬼たちを眺める者が一人いた。

## 59. 銀色の狼の旧地獄巡り⑦

・ s i d e 霊夢 ・

鬼たちと別れた私達は遂に館にたどり着いた。

「……………博麗の巫女よ！異変の解決に来たわ！早く出てきなさい！」

「ちよつと！霊夢?!」

勝手に扉を開け中に入った私にアリスが驚いていた。

「……………反応が無いわね。」

中は誰もいないかと思うほど静かで薄暗かった。

「なんかワクワクするな！」

魔理沙がそう言いながら屋敷の内部に入っていく。

「もう！二人とも勝手に入って！」

続けてアリスも入ってくる。

ギギイ……

そんな音と共に何故か扉が閉まる。

「しまった！」

私は咄嗟に扉を目一杯引っ張るが、ビクともしない。

「……ご丁寧に鍵までかけてる。」

「ぶっ壊すか？」

「いや、先に異変の元凶を探し出そう。」

変だ。扉からは妖力も霊力も感じない。至って平凡な扉だ。

どう言う原理で閉じ込められたのだろうか？

私達が館を進んでいくと……

「やい！侵入者共！アタイが相手だ！」

目の前に赤髪の猫娘が現れた。

「館の主に合わせてくれない？」

私がそう言うと……

「え?!」

何故か魔理沙とアリスが驚いていた。

「ん？何よ？」

「霊夢も冷静に人の話を聞けるんだな……」

後でしばく。

「え……さとり様に？なんのようだ！」

「今異変が起こってるんだけど……その事で相談が……」

「いいいい異変?!そ、それは大変だね!ちよ、ちよつとさとり様を呼んできます!」

そう言つて彼女は逃げるようにその場から去つていった。

……あの猫娘……怪しい。

しばらくすると奥から小さな少女がやつて来た。

「小さいとは失礼ですね。博麗の巫女。」

「こいつ?!まさか……」

「ええ、貴方の心の内は分かつてますよ。貴方も、貴方も。」

私達は身構える。

「別を取つて食つたりは致しませんよ。立ち話も何ですしどうぞ客間までいらしてください。」

私達はお互い顔を見合わせ彼女の言う通りにした。

「で?話は何ですか?」

恐らく彼女は分かっているのだろう。



「ええ、分かってますよ異変を解決しに来たんでしょ？」

「ええ、そうよ！早く温泉を止めて！」

「その前に……お互い自己紹介をしませんか？」

「何で？貴方は私たちの心の中を読めるんでしょう？」

「ですが貴方は私の心の中は読めないでしょう？」

それはそうだ。

「私は古明地さとり。この旧地獄を管理している者でございます。先程の子は火焰猫  
燐。私のペットです。」

「そう、私は博麗霊夢。」

「私はアリス・マーガトロイド。」

「霧雨魔理沙だけ。」

………なんだか違和感がある。

「ねえ……貴方、なんか楽しんでない。」

私がさとりに聞くと……

「ふふ、やっぱりそう見えますか？ごめんなさいね、久しぶりに他人と合間見えたので嬉  
しくて。何分人の心の中を見透せるので人間からは恐れられています。」

………彼女が異変を起こしたにしては変だ。

.....

「火焰猫燐だっけ？」

「はい、私達はお燐って呼んでます。」

私達？

「そのお燐を呼んで貰える？」

▪ side out ▪

▪ side 椀 ▪

私は配下の気配に吸い寄せられるように地霊殿へと誘われた。

「( )か.....」

そして建物の前にいるのだが.....

「.....」

.....

「お邪魔します。」

.....見つかったらやばいな。

▪ side out ▪

-----

## ・side 霊夢・

「で？知ってる事を全部吐きなさい。」

私は火焰猫燐に質問を投げかけた。

さとりは心配そうに様子を見る。

「そ、それは……………」

「はあ…………この館…まだ人がいるでしょ？」

「はい、私の妹が1人とペットがもう1人。」

そう答えたのはさとりだった。

「会わせて。」

「それは出来ません、」

「なんで？」

「妹…………こいしは私でも見つけることは出来ないんです。能力のせい……………」

「もう1人のペットは？」

「霊鳥路空つて言います。私達はお空つて呼んでます。彼女は最近能力に目覚めたので核融合炉の管理を任せてます。」

今のさとりの言葉でお燐がビクツとした。

「お、お空を止めてください！アイツ張り切りすぎちゃって能力を使いすぎてます。温

泉が湧き出したのもアイツが一生懸命焔を活性化させようと力を使いすぎたからなんです！このままじゃアイツの身体が持ちません！」

お燐が床に頭をつけながら頼み込んで来た。

「お、お燐?!ど、どうしたの?!そ、そんな事が?!」

心が読めるさとりが何かを察したらしい。

「お空に頼まれてさとり様にも言えませんでした。退治するなら私だけを退治してください。」

「ま、待ってお燐に罪は………」

「はいはい、分かったから。」

これで彼女達を退治しよう物ならこつちが悪役みたいじゃない。

「案内してくれない?」

私達は中庭にはある大きな穴の前についた。

「この下にお空がいます。」

っ?!

飛んでもない霊力だ。

「お空はこの下で作業をしています。」

私達はさどりの言葉を聞くやいなや穴の中に飛び込んだ。

「え?!ちよつと?!」

▪ side out ▪

▪ side さどり ▪

私が制止する間もなく彼女達は穴の中に飛び込んで行った。

「……さどり様……ごめんなさい。こんなことになってしまつて。」

「お憐とお空は悪くないわ。全て気づかなかつた私が悪いの。こんな能力が有るのに大事な事は何も見えてないわ。」

私の能力は心の表面ならすぐに見ることが出来る……しかし、心の奥その事は深く見ないと分からない……。私は怖いからいつも出来るだけ心の奥は見ないようにしている。そのせいでお空は……

前に大事な妹を傷つけてしまったのに私は何も反省出来なかつた……。

彼女達に責任を押し付けるような事は死んでも出来ない。

「ちよつと、お取り込み中失礼します。」

背後から声が聞こえてきた。

振り向くとそこには白狼天狗と思わしき人物が立っていた。

「貴方も異変を解決……………ヒッ?!」

「さ、さとり様?!」

私は思わず尻もちをついてしまった

私の能力は心の中だけでなく相手の隠している力も分かってしまう。  
彼女の中には何か得体のしれないものがあつた。

「さ、さとり様に何をした?!」

「お燐! やめて!」

私は大声でお燐に怒鳴ってしまったためお燐はびつくりする。

「ん? どうしました?」

彼女は私に近寄ろうとする。

「こ、来ないで!」

言ってしまったってハッとした。

同時に死を覚悟した。

もしかして怒らせてしまったかもしれない。お燐が危ない!

「くっ!!」

私は立ち上がり彼女に弾幕を放つた。

そしてお燐に向き直り…

「お憐！逃げ……」

私は最後まで言うことが出来なかった。

直接見てないけど分かる。もう私のすぐ後ろに立っている。

お憐……ごめんなさい……あなただけでも……

「ちよつと落ち着けよ。別に何かするわけじゃないんだから……」

彼女は少し怒った風に言った。

「勝手に入ってきたことは謝るから！そんなに怖がらなくても……まあ無理はないか……」

はあ……と、ため息をついた彼女は地面に座り込む。

「犬走椀と呼ばれてます。普段は妖怪の山で哨戒任務をしています。」

「う、嘘よー！」

それ程の力がありながら哨戒天狗なわけが無い。

「……あまり本名と来歴は言いたくないんですが……後で巫女に魔神について聞いてください。そうすれば私の話もしてくれるはずですよ。」

あまり信用はならないが、敵意は無さそう。

「貴方はここに何をしに来たのですか？」

「主な目的は観光です。」

「……………へ?」

今、私はこれまででした事の無いほど間抜けな顔をしているのだろう。

「本来は地霊殿の周りを眺めるだけのつもりでしたが……………」

「ちよつと待つて下さい!!旧地獄を侵略しに来たわけじゃ無いんですか?!」

「え?!?!そんなことしませんよ?!妖怪の山でこっそり身分を偽って過ごしているんですから!そんな自分の正体をさらけ出すマネはしませんよ!」

私が彼女について疑問を持っているのは他でもない、彼女の心の中が全く見えないのだ。

こんなことは初めて。あのスキマ妖怪ですら私は覗いて来たのに。

「えつと……………勝手に侵入してきて何ですが……………貴方は……………」

彼女は私の事について聞いてきた。

「さとり妖怪の古明地さとりです。」

「さとり妖怪?!あの心をよむことで有名な?!」

どうやら私についてよく知らないようだ。

「も、もしかして今も私の心の内も?!」

あれ?意図して防いでたんじゃ無いの?

「いえ、貴方の心の内は読めません。こんなことは初めてです。」





知ったらしくて。私もよく分からないんです……」

誰が作った物か分からない上に書かれている文字すら分からない。

「核融合炉って言うのは…簡単に言うところある小さな物質を繋ぎ合せてそこからエネルギーを取り出すものです。………多分博麗の巫女は分かってないな……。」

へえー、お空ってそんな事出来るんだ！

「ざとりさん…分かってます？お空ちゃん的能力。」

「はい、よく分かりました。」

「お空ちゃん………下で太陽を作ってますよ。」

………え？

▪ side out ▪

▪ s i d e 朧 ▪

俺は隠れながら犬走椀と古明地さどりの会話を聞いていた。ついにやつの口から魔神と言う言葉がでた。

あの口ぶりは自分が魔神だと言っているような物だ。

しかし、まだ奴の戦力は分からない。

引き続き調査をして行こう。

▪ s i d e o u t ▪

## 60. 銀色の狼の旧地獄巡り⑧

・ s i d e 霊夢 ・

しばらく進むと開けた空間があつた。

ま、眩しい……

広い空間の壁にはなんの素材か分からないが赤く光る素材が使われていた。

「霊夢……」

魔理沙が指さす方を見ると……

「……………」

黒い翼を持つ少女が静かにこちらを眺めていた。

間違いない神の気配は彼女からだ。

「ねえ、ちよつと……」

「異物………排除………しなきゃ……」

ポソポソと何かを喋り出したかと思うと左手の筒？から高密度のエネルギーを感じた。

やる気ね……

▪ side out ▪

▪ side 権 ▪

うわ……やってるやってる。

私は気づかれないように彼女達の弾幕をかわしながら部屋の底へと言った。

あつた……

部屋のそこには人一人入れるくらいの穴が空いていた。

この下に………

▪ side out ▪

▪ side 霊夢 ▪

「あんた!!もうやめなさい!!」

私は必死に呼びかける。

「もつと、もつと頑張らないと……」

彼女は素晴らしい、巨大な弾幕を放ってくる。

「かはっ!!!」

しかし、身体が耐えられないのか血を吐き出す。

「それ以上やると死ぬぞ!!!」

その隙にアリスが糸で拘束し、魔理沙が彼女に向かって弾幕を放つ。

「?! 霊夢! 糸が持たないわ!」

一瞬のうちにアリスの糸が燃え尽き彼女は解き放たれる。

「くっ!!! かわされる!」

「もつと……もつと頑張らないと……異物を……」

異物を………排除しないと!!!」

彼女の腕に着いている筒が弾け飛んだかと思うと中からは真つ赤に光る腕が出てきた。

今まで炎など様々な熱を発する物を見て感じてきた。だがあの熱さは………私が感じて来た……いや、生物が知りえないはずの熱さだ。

「霊夢………」

魔理沙が言う。

「あの腕……あの熱さ……私、知ってる。いや、正確にはアトラスの知識だ。」

「いったい、あれは?」

「間違いない……あれは……」

太陽だ

・ s i d e 権 ・

……あれ程の神が突然生まれるの不自然だ。

いや、それにあれ程はつきりした神核は……

間違いないな……

でも大丈夫だろう。

博麗の巫女達は強い。確かに彼女の神核は強力だ。妖怪の山に住んでいるあの二柱よりも遥かに強くなるだろう。だが生まれたばかりだ。

あの3人なら犠牲を出さずに何とか解決出来るはずだ。

だから私はこつちに集中しよう。

私の目の前には巨大な燃え盛る剣が突き刺さっていた。

X I

「久しぶりだな……スルト。」

10人目の使徒、燃え盛る大地の巨人スルト。

私たちが投獄されたあと彼は汚染された大地を浄化するために炎で大地を焼き尽く

した。

生き残った生物は箱舟で宇宙に避難していたから大丈夫だったらしい。

指図め炎の洪水と言ったところかな？ いや、炎だから洪水は変か……

『救世主様……お久しぶりです。』

「お前、身体はどうした？」

『私の身体は崩壊しました。』

「……………」

『……………』

……………いや……もうちよつと喋ろうよ。

「なんで？」

『力を使い果たしたからです。』

……………

「他に何か聞きたいことはない？」

『特にありません。』

……………こいつは昔からこうだ。あまり会話をしたがない。

「お前、ずっと剣の中にいてたのか？」

『私はずっと眠っております。』



「……家に来る？他のやつも居るけど。」

『ここが居心地良いので結構です。』

だー!!!

「………また来るから。何かあったら呼べよ。」

『了解しました。』

――――  
さて、用事も終わったし帰るか……

私は来た道に戻り入ってきた穴から顔を覗かせると……

「あ」

博麗の巫女達がニコニコしながら私を見下ろしていた。

ただ目が笑ってない……

「あんなねえ……手伝いなさいよ。」

思ってたより速かったな。

お空はどうやらアリスが背負っているようだ。

「まあ、何とかなつたでしょ？あ、ちよつと待って踏まないで！」

▪ side out ▪

## 61. 銀色の狼の旧地獄巡り⑨

・ s i d e 霊夢 ・

「皆さん！ありがとうございます！」

事情をさとりて伝えたらものすごく感謝された。

「ねえ、お空がこんな風になった理由…本当に知らない？」

私が聞くと。

「ええ、恥ずかしながらある日突然お空が覚醒したとしか分かりません。」

今まで見た神の中でも明らかに異常だった。

「誰か見知らぬ人が来たとかありませんか？」

そう聞いたのは権だった。

「いえ、心当たりはありません…あの！お空は大丈夫なんでしょうか?!」

「今はまだ新しい力に身体がついていけて無いだけで、慣れると力を自分の手足の様に使うことが出来ますよ。今は休息が必要ですが……」

なんでそんなに詳しいの？

「そうだ！異変が解決したから宴会にしようぜ！」

魔理沙がそう言う。

「丁度鬼たちも宴会を開いていた所だしな！」

釈然としないがひとまず落ち着くことにした。

「ねえ、なんであんなに詳しかったの？」

私達が鬼たちの宴会場に行く道中、椀に聞いた。

「……………神核って知ってるか？」

「ええ、神達の心臓みたいなものでしょ？ 最も人の信仰が無いと自然消滅してしまうけど……………」

その代わり絶大な力が使える。

「昔の神々は信仰が無くても大丈夫だった。」

……………どんだけやばい世界だったんだ。

「神核には2種類の生まれ方がある。1つは旧世界の壊れない神核から派生して生まれる弱い神核。これはあんたも知ってるやつな。信仰がある対象や概念に憑依する様にくつついてくる。」

それは初めて知った。てつきり信仰から生まれるものだと思っただが信仰されているものに取り憑く物なのか。

「恐らくだが、今ある強い神核の持ち主はどいつもこいつも名だたる神ばかりだと思  
う。」

.....

「じゃあ、強い神核はどこから産まれるの?」

「始まりの神、母なる神、地母神。色んな呼ばれ方がある。だが全て同一人物、いや神だ  
から人と表すのはおかしいか……まあ神核の生産機みたいな奴がいるわけだ。」

.....まさか!!

「そんな奴が幻想郷にいるの?!」

「かもな」

頭が痛くなってきた。

「姿を表すことが滅多にないから顔も名前も知らないけど噂で色んなやつに神核を与え  
まくってるっていう噂を聞いたことがあるぞ。」

「そ、そんな………」

「まあ、産まれたばかりの神核はすぐに対処出来る上に目立つからなんとかなるって。」

そう言い彼女は私を励ましてくれた。

そろそろ鬼の宴会場が見えてきた。

「さて、私は帰るわ。鬼たちに目をつけられたら困るし。」

椛が皆に聞こえるように言う……

「そうか……気をつけて帰れよ。」

椛が違う道へ向かおうとした瞬間、

「おおい!!! 銀色の狼がいたぞ!!! 姿は白狼天狗だ!!!」

どこからともなくそんな声がした。

私たちは全員びつくりしていた。当の本人もびつくりしていた。

少し遠方の宴会場から砂埃が上がる。

しばらくすると椛の5歩先に何かが降ってきた。

「お前か? 銀色の狼つてのは?」

勇儀だ……

それに続いて色々な妖怪が集まってきた。

「さあ……なんのことか分かりません。私はただの白狼天狗でございます。」

椛が地面に膝をつきながらそう言う。

次の瞬間、勇儀からとてつもない殺気が溢れ出た。

「お前、知らないとは言わせないよ？鬼は嘘が嫌いだってな。それも嘘をつく相手をその場で捻り潰すほどにな。」

あまりの妖力に地面がひび割れる。

「あいつ、姉御を怒らせやがった。」

「死んだな。」

色々な妖怪がそんなことを言っていた。

椀は下を向いて黙っていた。

「ただ手合わせをするつもりだったが……お前を殺すつもりでぶっ飛ばす。」

ドスを聞かせた声でそう言ってきた。

「ちよつと……?!」

私が制止しようとする椀が止めた。

「……………私は戦いたくありません。」

「黙れ。私に指図するなら私を倒してからしろ。」

「さとりさん……………」

「は、はいなんですしょう?」

「この雑魚を抑えるのに結構建物が壊れますが大丈夫ですか?」

『な、なに?!』

『勇儀の姉御が雑魚だつて?!』

四方八方から驚きの声が上がっていた。

「お前……本当に殺すぞ。」

「口だけは達者に回るな。クソガキ。ごちやごちや言つてないで早くこいよ。」

その言葉を言い終えると同時に勇儀は距離を詰め棍に拳を叩き込まんとしていた。

・ s i d e 朧 ・

俺は、俺は夢でも見ているのか?!

俺は犬走棍を鬼たちにけしかけた。そこまでは計画通りだった。

しかし、やつは鬼の前で嘘をついただけでなく、あの星熊勇儀を雑魚と吐き捨てやがった。

当然星熊勇儀は怒る。

この時俺は犬走棍がやけくそになっていると思った。このまま星熊勇儀の拳に潰されると思った。

しかし、やつは……………

微動だにせず片手だけで拳を受け止めた。

「な、なに?!」

星熊は驚いていた。無理もない。語られる怪力乱神と言われた彼女の力が通用しない。

俺も驚いていた次の瞬間……………

「私も貴様の怒りに触れてしまったな。そこは謝ろう。すまない。」

そう犬走棍は言つてのけた。

「ハハハハ……………まさか私の拳がこうもあっさり止められるとは……………酒吞童子様だ



けだと思っていたがな。だが……鬼には引けない誇りがあるこのまま戦わせてもらおうぞ。」

星熊勇儀がそう言った瞬間。

犬走椀からとてつもない威圧力が放たれた。

それと同時にやつ顔には漆黒の痣の紋様ができていた。それだけでは無い。やつ体から黒いモヤがまるで触手の様に出てきていた。

間違いないやつは………魔神だ。

今は少しでもやつの力を解明しなくては!!

そんなことを考えていると星熊が二撃目を打ち込もうとしていた。

ひらりと犬走が交わすと星熊が膝をつき血を吐いていた。

「ガハッ?!ゲホッ?!」

あの一瞬で彼女の腹に拳を打ち込んだきたのだ。

あの星熊勇儀が膝を着いたのだ。こんなことが信じられるか?!

「うおおおおおおお!!!」

星熊が咆哮をあげる。あまりの迫力に思わず足が凄んだ。

咆哮を上げ終わると彼女は立ち上がり再び犬走に拳を向けようとした。

しかし、顔を上げると同時に犬走の容赦ない拳で再び地に手をつかさされる。

万が一あそこに居たのが俺だったならば一撃目で俺は死んでいただろう。

「まだやるか？」

静かに犬走は聞く。

「まだだ、まだ負けちゃ居ない。」

「そうか……終わりにしよう。」

「なに?!グッ?!」

犬走が星熊の首根っこを掴んだと思った瞬間、星熊の腹に膝蹴りを入れた。

その一撃で星熊は膝から崩れ落ちる。

「あ、さとりさん。結局建物は壊しませんでしたね。」

そう言い彼女はそそくさと帰って行った。

この事を大天狗様に報告せねば!!

▪ s i d e o u t ▪

## 62. 銀色の狼の旧地獄巡り⑩

<飛車上 雷の屋敷にて>

・side 臙・

「雷様！ただいま戻りました。」

ついに奴の正体を掴めた。

「黒羽か!?どんな情報が分かった？」

雷様が私に聞く。

「結論から言います。奴は間違いなく魔神です。」

「して根拠は？」

「信じられぬことかもしれないが、奴は鬼を簡単にあしらい倒す程の実力です。」

俺がそういうと雷様はガツカリとした様子だった。

「それだけでは魔神だという証拠にはならないではないか？」

「しかし、その鬼が星熊勇儀様だとすれば……？」

私がそう言った瞬間、部屋中に妖力が充満する。

「ふざけているのか!!!」

「こ、これほどまでの力とは?!

「いえ! 事実でございます!」

「そんなもの信じられるか!!!」

ど、どうすれば信じて貰える?!

私がそう思った次の瞬間、

「失礼します。」

障子から女の声が聞こえた。

「取り込み中だ!」

雷様が怒鳴る。

この部屋には結界があるので中には入れない。

しかし、障子の向こうにいる者が続けてこう言う。

「天魔様からのご命令です。」

?!

「なんだと?!」

私と雷様が同時に驚く。

「入れ!」

雷様が結界をとく。

「失礼します。」

中に入ってきたのは……

「お、お前は?!」

件の犬走棍だった。

▪ side out ▪

▪ side 雷 ▪

私は予想だにしていなかった来客に驚いていた。

「貴様!よくもココノコと入ってこれたな!」

私がそういうと……

「申し訳ございません。天魔様からの命令と言うのは嘘です。」  
なに?」

「貴様！覚悟は出来ているな？」

私は妖力を撒き散らしながら彼女に問う。

「貴様は何者だ?!噂に聞く魔神とやらか?!」

私は彼女に聞く。

「はい、その通りです。」

意外にも、彼女はすんなりと認めた。

……不気味だ。こいつはさつきから顔色ひとつ変えていない。

何故こんなにも冷静なのだ?!

「貴様……わかつているのか?私の一存で貴様を処刑出来るのだ!」その話、私も混ぜてもらおう!」

我々は一斉に声の主を見た。

「な、な、な?!何故、貴方様が?!」

驚いて声を上げたのは黒羽だった。

私だけでない、犬走椀も驚いている様子だった。

声の主は天魔様だったのだ。

「私がここに居る理由か?下に居るバカ娘に呼ばれたのでな!聞いた話によると、犬走、君は魔神らしいではないか。」

「は、はい。」

「では聞こうか。」

突然天気が悪くなり初める。

天魔様の妖力だ。彼女の強大な妖力が天気をも変えてしまったのだ。

「君は妖怪の山に仇なす存在か？」

「いいえ。」

即答である。

「信じられるか!!」

私がそう言う。

すると…

「はあ……」

彼女はため息を着いた。

「あまり力を引けらかせたくないのですが……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

!!!!!!!

「?!?」

「む?!?!」

「おええええええええええ?!?!」

反応は三者三様だった。

天魔様は驚いた声を出し、私は足が震え始めた。

黒羽に至つてはあまりの重圧感に吐いていた。

無理もない。私も下手をすれば黒羽のような無様を晒していたかもしれない。

「ね?」

「なるほど。理解した。」

犬走棍が発した一言で天魔様は何かを察したらしい。

「雷よ。私じゃ逆立ちしても無理だわ。」

な、なんだって?!

「それは本当ですか?!」

「ああ、それどころか多分妖怪の山全勢力が束になつてかかっても勝てないな。本当に文の言つた通りだったな。」

「文様はなんと仰つていましたか?」

犬走棍が天魔様に聞く。



「ああ、強大な力を持つてるがそれを行使しないことが平穏な日々を送ろうとしている証拠だつてさ。」

「文様……」

「で？ 実際はどこまでやれる？」

「え？」

「いや、恥ずかしながら私じゃ君の力の全容は捉えきれないから。」

「……働かせてもらつてる身なので説明しないとダメですよね？」

「そこまで堅苦しいことを言うつもりはない。」

天魔様でさえこいつの力の全容を図りきれないのか?!

「信じる信じないは自由ですが……頑張れば10分で星1つの文明全てを消せます。」

「……10分もいらぬか。」

「なるほど……、妖怪の山のためにその力を使うつもりは……」

「ないです。昔それをやって捕まりました。」

何をしたんだ?!

「そうか、このことを公表した方がいいか？」

「それをするなら私達は妖怪の山から去ります。」

ん？

「達?」

「あ」

「説明頼む。」

「私の配下達です。放っておくと何するか分からない奴もいるので。」

「お互い部下を持つもの同士苦勞するな。」

「さて、君にはこれまで通りの業務を行って欲しいのだが、最低でも文の部下になって貰うぞ。いいか?」

「はい! ありがとうございます!」

「なんだったら私の代わりに妖怪の山の長になってもいいのだぞ?」

「そんな事を天魔様は……」

「ええ?!」

「そんな事になったら今度は私が犬走権に処刑されるかもしれない。」

「結構です。」

「即答?!」

「私には上に立つ資格はありません。」

「そうか、安心して引退できると思っただが……」

「まあ、いいか。この話はこれで解決、2人ともそれでいいな?」

「はい。」

この方がこういつてしまえば私は何も言うことが出来ない。

これからどうなる事やら……。

▪ side out ▪

▪ side 椀 ▪

ついにこの日が来てしまった。

「……………」

「も、もーみじ……………」

……

「このまとも隠し事の出来ないバカになんのごようでしょうか……………」

「そ、そんなに自分を卑下しないでください。」

文様が慰めるが……………」

「もつと早くにつけられていることに気づくべきでした。」

「仕方ありませんよ。朧さんは妖怪の山でも1, 2を争うほど隠密行動が得意なんです

から……………」

そうなのか……………」

「ちなみにいつ気づきました？」

「名前の無い橋を渡る寸前です。」

「あなたは十分すごいと思います…」

「これからどうなる事やら……。」